主幹・麻生路郎

川柳雑誌

十一月號

ソプラノを母は呆れた顔で聽き　柳路

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和七年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
第九卷　第十一號
川柳雑誌社發行

十一月例會

日時　十一月四日(金)午後六時半

會場　大阪市南區千年町(市電日本橋停留場西辻北入)
ちとせ倶樂部
電話南二四五五番

兼題「疎」三句　麻生路郎選
兼題「姿」三句　安西杏三選

會費　金參拾錢

初心者の來會を歡迎致します

年賀廣告を募る……

◉一口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます

◇申込期間　十二月十日迄
(新年號に掲載)

加茂川句會

日時　十一月十日(木)午後六時半

會場　仲源寺(京都四條繩手東入)

兼題「金槌」三句　町二選
兼題「標準」三句　司郎選

會費　金參拾錢

京都市七條大宮東入桑原方
京都支部

川柳雜誌　第九卷第十一號目次

文苑

五葉を語る(三)　麻生路郎(二)
武玉川初篇研究(六)　梅本秋農　森東蛭子省二
柳の絮(一九)　長野吉高(三四)
石と光線　松丘町二(三六)
南北君隱退と玉屋町時代　木村半文錢(三〇)

地下鐵

街に住めば　高橋かほる(四)
潔癖の差　柳林籔(四)
蛇旅女その我が家の老少　平井蒼太(六)
夜長に聽く外語　西田艸樂(一一)
獨矢車莊掌編　關本雅幽(一三)
ハルヒンの此頃　吉田水車(一四)
井原鴉天(一五)
久方慕秋(一六)
立井登美坊(一八)

創作

不朽洞句稿　麻生路郎(一)
近作柳樽　麻生路郎選(四)
光耀抄　麻生霞乃選(三)
川柳塔　同人・社友(三六)
粒々集　諸家(三七)
各地柳壇　(四八)

一路集
(課題吟)

損料　朝田新水選(四〇)
食堂　須崎豆秋共選(四一)
西村明珠共選(四二)

◇

飛燕往來　(四四)
編輯の窓　山雨樓(六三)
西之町MEMO　綠雨(四三)

◇

表紙　吉岡烏平
題字　麻生路郎

不朽洞句稿

癈生路郎

二男アート危篤

汝の父はロツク氏液をさゝげ立つ
子の父は注射にかたくかたくなり
子が病んで店をしめるのかと問はれ
看護婦を少し寝させる父になり

田中主治醫笠原博士前田博士の勞を謝して

ありがたし起死回生の手がそろひ
石鹸を忘れ看護婦とりに來す
ハーモニカ回春の子の枕許
毛が薄く薄くなつたが吾子なり

ある方面委員に

方面の父と仰がれ家にゐず
親子五人委員を待たず死んでゐる

帝塚山アル街風景

ヴエンチレーターも廻り長唄も聞え
洋室がのぞく綠の中に住み

故淺井五葉君

五葉を語る（二）

麻生路郎

五葉君は何んとなく淋びしい男であつた。あまり人から話しかけられることを好まない男であつた。したがつて自分からも話しかけなかつた。ただ默つて膝を抱え込んだ姿は痩せこけた羅漢さんそつくりだつた。それでゐて別に居眠りはしなかつた。必ず何か考へてゐるのだつた事毎に何等かの感想が浮んだ。けれどもそれを相手方に喋べり散らしたりしなかつた。じつと頭腦の奥にしまひ込んで置いた。

五葉君は一人ボツンと机に向つてゐるのが好きだつた。そしてボツリ〳〵雨垂れのやうに物を書いた。人に會つては稀にしか意見を吐かないし、たとへ意見を述べても、どつちでもよいと云つた。邪魔臭さうな、しかも遠慮勝ちな意見であつたが、紙に向つては誰に遠慮も要らないだけに、隨分と思ひ切つたことを書いた。五葉君の本體を知らぬ人が讀んだら、五葉君といふ人はこんな人かと惧れをなすほど遠慮會釋もなくメスをあてたソレは辛辣その者であつた。樂屋落の句にしても青明百句の如きはその一例である。單に句に限らず番傘初期時代のこれといふ川柳家で五葉君の筆先にかゝらぬものは一人もなかつた。それは別に原稿といふ意味ではないが、短篇でも書く調子で、丹念に書き上げては紙撚りで綴ぢてそれを僕等のとこへ通信のやうに送つて來るのである。

さうしたものを尤も多く受取つてゐるのは故青明君、當百君、水府君、荷十君僕などであらうと思はれるが、惜しいことには今日それ等を全部蒐集することは困難であらう。番傘の中期とでもいふべき頃に淺井花樂といふ川柳家があつた。その令息に故淺井四洋といふ川柳家があつた。花樂は五葉君の令兄であり、四洋は五葉君の令甥であつたが句會の席上で別に口も利かなかつたので、そんな關係を知る人は殆んど稀であつた。肯ひた四洋のことについては拙著「川柳漫談」の中にも少しく書いて置いたので、既に御承知のことゝ思うが、こゝらにも五葉君の性格の一部が出てゐると思ふ。

喋べれない人ではなかつたが喋べらなかつた五葉君は書く方では人一倍書いてゐる。短冊なども相當に遺してゐる。短冊がない時には、フールスペーパーを短冊型に切つてそれへペンで書いたりして

ゐた。私もかなり貰つたが希望者に頒つて今では一二枚しか遺つてゐない。

こゝに掲げたのはその一枚であるが、寫眞版を凸版にされてしまつたので短冊としての風韻は味はへぬが、書體を知るのには却つて便宜であらう。

次に番傘初期時代に於ける五葉君の句風を紹介して見やう。前にも述べたやうに寫生で終始した彼の句風は飄逸であり奇抜であつた。

大佛の鐘杉を抜け〳〵

東西屋常盤御前のやうなを着

此處へ來て酌げには困る上女中

慰みのやうに屑屋は輓いて行き

軍服を出されて困る紙屑屋

六法は氣の落着いた煤拂

棟袋曰くあんたはお妾か

後朝はお柳のやうな姿にて

石塔へ幽靈肘を突いて待ち

幽靈は寢卷の儘で出た姿

斷つておいて姑一つこき

サア來いといふやうに後家構へて居

三味線屋蟹を並べたやうに干し

彦九郎のやうに手をつく泣上戸

若旦那ちよいと引かれて倒けかゝり

ワイシヤツに縫上げをする散髪屋

落付いた英語を使ふ日本人

鉋屑何處へさすらふかのやうに

燒芋屋奇術のやうに蓋を開け

ザツとこんなものである。籐椅子にでも凭つて、樂に讀める句ばかりである。五葉君の句を讀んで微苦笑をしない者があつたら、神經がどうかしてゐると云つてもいゝ位なものだ。

しかし、五葉君の斯うした寫生句から一面には飛び離れて深酷な句が生れてゐる代りに、一歩スケツチの焦點を外づしたと思はれる句を讀むと、まるでゴムを噛むやうなあつけない句に終つてゐる。次にその深酷な例句を二三擧げて見やう

藥賣片足だけの音をさせ

親切に敎へてやつて掏摸も乘り

裏梯子頭は痛し灯は暗し

眼が覺めて母の寢顏を弄び

物の比較から句を構成する時に「やうに」といふ字齣を用ひることは拙であるとされてゐるが、五葉君の句の多くにはこの「やうに」が隨分あつても、一句一句を味つて見ると、對照が奇抜であるだけに、比較的無難である句が多い。

晩年の五葉君の句には、同じく奇抜であり、皮肉であつても、番傘初期時代から見ると、あくどきが抜けてゐる。それだけ妙味が淡的になつてゐるので從來の句の如くに一般にうけないやうになつたいよ〳〵死期に入つてからの句には流石に五葉の眞實が流れてゐる。句が單なる遊びでないことが知れるだらう。

小便だ大便だとて人の末

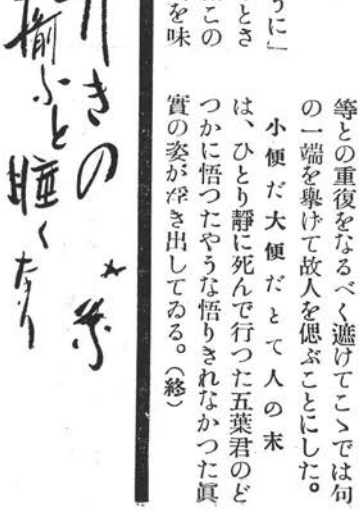
思ひ出せば皆亡き人の部にはいり

いかんなと亭主それだけ云つたきり

五葉君のことについては番傘の追悼句會でも談し、追悼號にも書いたから、それ等との重復をなるべく避けてこゝでは句の一端を擧げて故人を偲ぶことにした。

小便だ大便だとて人の末

は、ひとり靜に死んで行つた五葉君のどつかに悟つたやうな悟りきれなかつた眞實の姿が浮き出してゐる。(終)



近作抑揚

路郎選

滿蒙へ何んにも知らぬ馬も來る　大　緑雨
兵兒帶で働く女ものすごし　同

ギャング

三面をとぢて資本家おびえて居　同

滿洲國

握り合ふ國も失業呼びに來ず　同
考へることをルンペン止めたやう　同
たんか切る程の男に出來てゐず　同
バンドの穴の違ふ食滯　同　新水
いゝ男それが車掌といふ惱み　同
背へ鞄車掌は暇な腕を組み　同
たゞ憎くい男に酒を呑まされる　同
失業をせぬばかりなる二階借　同　琴人
用もなく住んで糸瓜を長くさせ　同

地下鐵

街に住めば

高橋かほる

久し振りに四人連れで心ブラして歸るとぬすつとがはいつて赤城颪のお花の着物と私のよそいきを持つて行かれてあります……親分肌な里十九氏や華水氏や、劍道四段の二南氏でしたらギャング達の方が恐はがりませうが、自慢ぢやありませんが娘形が通り相場といふ私、此の頃憂うつですかあいそうでせう。

潔癖の差

柳林籔

拙稿「川柳忌に就て」(十月號)に陳べた事と、對照すべき意見が、紋太氏(フアウスト十月號に因ても再述され、「初代と斷るところに、私達の潔癖さが現はれてゐる」とある。が、實はそこだ。私も亦潔癖であるが故に、「初代」なんて無用な斷り文字は、不要ではなからうかと强張したのである。結局は潔癖の程度の差異、而て眞實な潔癖性が何れ

猫ぶつたのがお隣のお腹立ち　同
米國がなんのと伯父に少佐あり　同

ゲーテ晩年の戀

小娘に責めさいなまれてゐる白髪　同　艸樂
人込に目立たぬ彼氏をもとめ居り　同　同
舌が廻り出すと買ふて買ふてなり　同　同
日向ぼこ瞼の肉へ日があたり　同　町二
吹雲みな睫毛に來たり睫毛に消ゆる　同　同
心虛しく木枯の音聽きゐたり　同　同
地下鐵工事いつ迄も店の前　同　閑生
家に歸れば別の怒りが待つてをり　同　同
レントゲン我の生身をおびやかし　同　同
滿三年テーブルなども置き換ようと　同　里十
は知らず旦那はきつうのぼせて居　同　九
天井を見つめ子の事店の事　同　同
油さゝれし時計と誰知るや　同　雅幽
生活難子は逆立ちをして遊び　同　同
膝に手を重ぬ勇士の母となる　同　愚陀

病床にて（三句）

四つの硝子窓へ秋も疲れてる　同
なあに日向で棺桶を考へてるのさ　同

にあるのかを冷靜に判斷すれば議論は盡きる。私は「川柳忌で押進めるのが、私の理想である。多くの川柳家の信仰でもあらう」と言つた。私の潔癖は理想と信仰をも意味する徹頭徹尾のものであるを知られたい。

次に、柳翁忌と稱さぬのも、四世などが隱退して柳翁と呼むだ事からの、混同を避忌した潔癖に因るのだとの說明があつた。が、これとても前同樣。私は潔癖なるが故に、他の柳翁などは全く眼中に有るなく、認識の問題外に屬するのである。「この理窟を捨て得る時が來る迄は、初代川柳忌で毎年營む」と頑張れるのは、どうとも御自由にお任せ致すとして、私では理窟は餘りにも明瞭に透過して居る話で、潔癖がレフアインされたなら「川柳忌」で御滿足がゆく筈なのだと思ふのである。夫れに私の言ふ「柳翁」とは、尊崇の表示であつて、十世などが自稱した柳翁とは、全然辭句の用法、精神が違ふ。そんな大運庭のある事柄に、今更理窟附けして拘泥する程の度量や乃至センチメントは、持合し得ない潔癖的一途なのだ。

紋太氏の文中に、「初代川柳の傳統は忘しくその人々が承け繼いである」とある其人々とは何人を指すのか判りにくいが、多分「初代を除いてあとの人々は全部が狂句だから」とあるから、二代以下の謂であらう。此點に於ても明かに潔癖のバランスが狂ふ。昭和の御時勢に十三世なんて人が名乘を上げて居らるるけれ共、其人々等を柄井八右衞門の後繼者だなどと夢にも思つた事はない。況んや

友が歸ると秋空の色がまし　　同　鳥取　鐵洲
滿腹に日掛の事も打ち忘れ　　同　　　同
栗の實の枝に居るさへ許されず　　同　大阪　杏三
秋空をするどく切つたビルデイング　　同　　　同
佛像の指に流れしエロチツク

○

菊人形植物性の媚態なる　　松江　天痴人
一九三二年松江大橋アスフアルト　　同
父と共に野良へ行きたいしやくり泣き　　同

松江支部復活一週年

菊滿開友よ未來を壽かん　　同　神戸　華水
訪づれば妹だけの友の家　　同
止めるだけ止めて嵐へ傘を貸し　　同
天井の高さに馴れてタキシード　　同
月給日、今宵生れる子もあらん　　同　大阪　奇可愛
こゝで泣く人も有るべしW、C、　　同
足を組み腕組み智惠の有つたけ　　同
突然に秋をさわぐも人心　　同
御機嫌は斜の月經不順とか　　同　石橋　二南
病床の若さが目立つ掛布團　　同
遲刻して煤降る街に氣が咎め

「傳統は正しく」＝（讀者よ、正しくに張目せられよ）＝そんな人等が繼承して居るなどとは、私共の親友間には信ずる者は、一人も存在せぬ。「フアウスト」一派が斯る解釋の下に旗を樹てらるゝが故に、「初代」にこだはりを生じ、自ら作る感情と理窟に束縛されて今一步のラインで平靜になり得ないのである。舊派の連中相會して勝手に披露宴を催し第何世だと言つて居るに過ぎぬ。何にも傳統的に權威あり繼承權が賦與されてゐるものでもなんでもない事位は、御承知の筈ではなからうか。だからこそ、飴ン坊氏其他が十二世を名乘つてやらうかなど、面白半分にイタヅラ心を起された話柄は、今年始めに柳誌上興がられた事。川柳家全部が十三世になつても可なりとの、頗る徹底したお話に落ちたのは。舊派の手合を「傳統は正しく其人々が」などいふより、餘程眞摯で意氣を含むかを告げたいのである。

蛇・旅・女 その他

平井蒼太

病床紫煙地獄の猥雜な夢魘の話です。
ガード横の下水溝へ、五丈もあらうといふ青大蛇がのたくつて行きます。若者五六人、山奥から追つて來たのだとて、右往左往してゐるうちに、蛇は一散に狹い露路の中へ。一軒の表戶を破つて、物凄い悲鳴が起ります。若者らの鋭い攻撃に、再び蛇は露路を驀進して僕の眞正面から襲ひ掛るのです。逃げ損つた僕は夢中で一軒の家へ飛込み、戶を締めて

事なかれ事あれかしと巡査ゐる　　同
看護婦は朝の空氣を褒めて置き　　同
更正の意氣へ杯廻るなり　　現夢裡
統制へ責任だけがついてくる　　同
まけられぬ直段うるさく向ふむき　　同
挽けないと云つたら挽けないと馬　　同
氷屋が芋屋に變る風の吹く　　大阪變人
しみ〴〵とあんまと話す事になり　　同
墓石も哀れズンベラボーなプロ　　同豆秋
制服の兩手子供にひつぱられ　　同
算盤を持つとボロ口かと問はれ　　同
トラツクで濡れて來る荷を待ち合せ　　松本民郎
オートバイ金を返しに來る夜霧　　同
木の肌の片つぽ濡れてゐるこゝろ　　同
あちら向きこちら向け共秋の風　　別府晃卓

僕の恢復を祈る母

もたいなや母燈明へ背をまるめ　　同
愁しさは病む身にあらで秋なりし　　同
金やつて日本晴れのこゝろもち　　神戸春秋
ふと我にかへれば女房縫ふてゐる　　同
旅の月西へ走つてゐる夜汽車　　同

窓から覗くと、若者の一人が蛇の首に胯がつて、鐵輪を口に銜んとしての亂闘の狀です。そこへ行中水の女主が、僕を咎めながら出て來たので、默つて蛇の姿を見せると、カンと計り卒倒して終ふのです。裸体の女を抱いて口移しの氣付け水といふ妙な話になるのですが、蛇に追はれた點が夢で、それから先は何うも半睡の幻想であつたやうに思ひます。

實は數日前、獨り居の夜のことでした、暗い臺所でバタンと物の落ちる音がします。恰度その夕暮、軒から落ちた蛇の音が耳に殘つてゐたので、若しやと電燈片手に窺ひますと、足許に五尺許りの青大將が蠢いてゐるのです。長虫の嫌ひな僕、生れて始めて田舍棲ひの僕、蒼くなつて靠兩手に追ひ出したのですが、流石の蛇も疊の上では滑り悪いと見えて大騒ぎの醜態で、ヤツと椽先から暗い庭へ棒になつて逃げて行きました。これがこの夢の原因となつたのかも知れません。

しかしその朝の病床の枕頭へは、松浦泉三郎氏の高著「好色見世物志」が贈られて來ました。とすると蛇の夢魘も、萬更捨てたものではありません。

健康な時は貧乏暇無く、暇の多い身体となつた今は、不自由な不具同樣の身体で、結局憧れの儘で終るのかも知れませんが、秋になれば秋の旅、冬も春も夏も、それぞれ季節に應しい旅への憧れは、果て知らぬ慾望となつて僕を苦しめます。

極く手近かの志摩半島の、東洋のニイスといはれる渡鹿野や●昭和の女護の島といはれ

テリヤと思ひきや平民の仔が産れ　大阪　夕鐘
麥飯へ頭の下がるまろさです　同　同
せつばつまつた女給の戰術にふれ　大民　沒食子
主義化してゐても弟に違ひなし　同　同
老鋪もう賣らねば餓死をまつばかり　神戸　明珠
藥瓶下げて今日から御出勤　同　同
只一度それが死になる飛行士よ　盛ケ池　靜太
銀行と郵便局とあづけかへ　同　同
ちよつぴりのうどんの値上げ夜は寒く　大阪　八歩
工事場の技手のポマードよく光り　同　同
骨ばかりなる手に涙つたふなり　島根　線之助
蟬が啼いてゐる僕は九度七分　同　同
律義者儲けそこねてばかりゐる　大阪　翠夢
かばかりなこと善人の嬉しくて　同　同

神戸川にて

書來ても鳴く虫がゐる河原

山中幸盛の祠跡にて

月山へ秋の陽かげり事もなし
鮮人を生埋めにした崖工事
屈辱に耐へます利子も拂ひます
夢多き人の子となり秋は逝く

る女郎ヶ島などへすらも、思ひのみ遠く走る計りで、淑々旅情を味ふことも出來ません頃來女護の島思想の、江戸文學に現はれた跡を追つてゐるのですが、それとこれとが結びついて、尚更旅情を唆るのです。

解放された旅の心がさせるのか、旅の恥は掻き捨てといふ考へがさせるのか、或は旅宿を廻る設備がさうなつてゐるのか、兎に角旅と女は離して考へることは出來ません。全く地方色豊かな旅の女の歡待は、新鮮な味覺を味はゝせて呉れます。江戸の飯盛女のことを調べてゐて氣のついたことですが、若い頃の不潔な戲作本を破棄することを心懸けたといはれてゐる瀧澤馬琴でも、その「羇旅漫錄」を見ると、實際旅の女の歡待を受ければ書けないことを書いてゐますし、參勤交代の道中にある大名以下が、その旅宿である宿場の本陣へ、飯盛女を出入させたことも窺はれます。昔も今日も、その身分の高下を問はず、恐らく萬人に共通する旅の心でありませう。

浮世繪師の描いた女を檢討して、春信は童眞美の、清長は成人美の、歌麿は神聖美の、英泉は廢頽美の、それぞれの好みに從つた表現を試みてゐるといはれてゐます。寡見の僕でも、歌麿の繪本や一枚刷の和からは、それの目的とする唆情感は甚だ稀薄で、英泉の惡魔的實感力には比較すべくもありませんでした。

春信描く女が、例え遊女の場合であつても人の眼にそれが遊女の扮粧をした童眞の女であると鑑賞され、又英泉描く處女の姿から

叔父の臨終（九月卅日朝）

職業が臨終へ時計出さしたり　同
二代目は乘馬姿がよく似合ひ　大阪　水車
金的は君にまかせて飲むもよし　同
わがこゝろ河豚提灯にひからびし　同　鮎美
いちじくを食べて俳優さびしすぎ　同
バスよろめきてビルデングある風景　京都　司郎
滿月が出るとおがんでゐた子だと　同
壹錢のみくじが示す道を行き　大阪　紀太
酌ぐまねをすればそれにてなつとくし　同
花もたぬ木犀に似た女かな　布施　靈壺
感心をされて履歴書たゝまれる　同
ダンサアといふ歩きやう裾をけり　大阪　おさむ
ウインドの秋は女をとらへたり　同
行商が世辭を云ふてる腰のへん　同　小柳子
女給等よ我が淋しさを殺ろせるか　同
金貸してやれば時々遊びに來　愛媛　英賀夫
たしなみをちと塗りすぎた未亡人　同
虫けらの如く生きん消化機關のごと　滋賀　蒼太

◇

夕燒の道へ影出すかくれんぼ　大　大門

は、恰も娼婦から受けると同樣の唆情感を味はされるといふことは、一個の作品としてその藝術的表現力を疑はれるに足る、大きな缺陷であるかも知れません。しかしながらこれあるが故に、春信は春信の女を創造し、英泉は英泉の女を創造し得たたのでありませう

春信には童貞美が魅惑でしたでせうし、英泉には娼女の廢頽した肉の香が魅惑であつたことでありませう。その魅惑が強く働いて女を鑑賞する場合には、最も强裂に印象される部分丈けが攝取され、ありの儘の姿は忘れ捨てられて終つて、そこに春信なり英泉なりの獨自の映像を殘すことになつたのでせう

僕達の川柳にしましても、あるが儘をあるが儘に表現することは、恐らく至難な業でありませう、素材を切斷し濾過するものが、一個個性である限り、その個性が攝取し、更に詩の生成への過程をその內部で營む以上、あるが儘をあるが儘に詩へ移すことは出來ない譯です。だからあらゆる川柳は、作家の一つ一つの個性が生み出したものである筈です。だのに餘りにも繰返し川柳の多いといふことは、眞實の眼を心を働かせ得ないのでもありませうし、又は攝取した素材の表現技巧を知らないからでありまして、恰も個性の普遍性を信じさせるやうに、それが思はせるのでありますが、これは言葉を使用しなければならぬ結果からの錯覺でありませう。

左樣なことは兎に角、僕は悲しむべき英泉と同じやうに、娼婦美しかわからず、又魅惑を感じないのであります。だから僕の川柳に

腸にお通夜の酒が沈んでゐ　同
怒鳴られて使ひ計らひ兼ねて居り　同
大阪に姿かくした猫なり　同
萬歳師怒氣を含んで見せるもする　同
うどんげの花は是れかと見て呆れ　桂枚大阪
お四國を廻ぐると出たが見納めか　同
西瓜切る父を裸の子が圍み　同
年長者友引だけはよせと云ふ　同
好物を田舍大きな皿へ盛り　勝二同
颱風のあとにあつけらかんと島　同
人間を赤新聞に低められ　同
成功をも一度誓ふ倉の隅　同
雨に逢ふた植木を部屋の中へ入れ　裸人同
石油コンロへ妻は女給をして稼ぎ　同
お光をあけてる妻の脊がひくゝ　同
引き眉毛阿彌陀の顏に似せる氣か　迷兆京都
病むことが詩の常識であるぞ君　同
意地がおすえ張りがおすえ京都の藝者かて　同
或日フト藝妓を連れた父を見る　菊路大阪
叱つては居るが娘も可愛さう　同
することが一々癪な家主の子　同

は健康な童貞美も成人美も母性美も、且て唄つたことはありませんし、若しあればそれは必らず失敗してゐる筈です。僕が娼婦美しかあらはし得ないと同じに、その童貞美しか或はその母性美しかあらはし得ない作家は、必らず無數に存在しませう。娼婦美といひましても、僕のは全くの賣女の場合でありまして勿論女給美藝妓美とは聊か異つてゐるのです。

娼婦には肉あつて靈を認めたくはありません。故に僕は一生不犯の不戀身です。

十月號「柿の皮」を讀んで、苦笑にもいろいろあることを思ひました。且て僕の書いた大衆雜誌の編輯子の一は、「氏は大阪研究の大家である」といひ、一は「軟派文學を以て鳴る氏が」と書いてゐます。僕が大阪研究の大家だつたら、「上方」の南木氏などは一体何ういへばいゝのでせう。又軟派文學とは恐ろしい廣範なことをいつたものです。商品の價値を高く見せる爲に、至極結構な人物に仕仕上げられるのは、勿論讀者の一笑に附されることとは考へても、全く苦笑以外の何物でもありません。

有名な厭生路郎先生が、かくれたる天才であつたり、世間は御都合のいゝやうに人間を扱つてゐます。武藤山治氏の如きは、川柳界には盲目でありませうから、寡小なその言葉に對しても、寧ろ愛すべき稚氣といつた態度に接する苦笑でせうが、僕の場合には全く苦々しき苦笑なのであります。

巻帯で出れば小さく虫が鳴き　松江　巻二
空想の儚なきを知るコンパクト　同　同
叱られて見たい氣持に雨が降り　島根　羅門
さびしき視線に蛙が息吹きかへす　同　同
吹きふせられて風の日の百姓や　香川　三汀
ひるふかく枕の影の憂欝よ　同　同
ぢゆうりんをされた女が笑ひかけ　愛ケ池　愚寵
薄給の恙くもう禿げてゐる　同　同
幼稚園まで戰爭の眞似をさせ　松江　靜一朗
犬鳴いて血を喀く夜をさみしくす　同　同
秋の月起きてベットに座りたる　神戸　幸村
よき言葉なみだながして讀みゐたり　同　同
美しい星の夜ですとラヴレター　京都　豐次
横顔にアラッと思ふ滿員車　同　同
角砂糖夕陽の映るとこで溶け　同　同
本人の意思はどうでもよい毒婦　同　同
病人が寢てゐるらしい二階の灯　同　同
痩せ薬一つ求めに百貨店　同　同
煙草吸ふ女の好きな窓の雨　同　同
ベルトの音をのがれば夜となり　同　同
夜店商人きちんと座つて居るもあり　同　同

我が家の老少

西田紳樂

せがむ子へ渡す湯呑の飲み加減　當百

我が家の老人、當百は此の句の通り子供に對する愛情が濃やかである。私の子供達、當百の爲には目にも入れたい三人の孫達は、長女が、五歳の時、生母に死別の不幸を見たが祖父母の愛に育まれて、もう十五と十三と、十二、二人は女學校へ、末の男子は尋五に通ふ少年少女となつた。

今日も老人は三人の子供をつれて、松茸狩に出かけた。お婆さんも一しよである。

老人と子供は日曜日に打つれて出る事をほとんど缺さない。お婆さんも過去十年健康が勝れず、幾度か生死の境を往來したが、近來漸々達者になつて、今日の外出にも自ら手辨當を拵へて出た樣である。

辨當の事なら、別段御馳走を作つたのでない事は見なくても分つてゐる。老人達は子供をつれて出ても、滅多に外で食堂などへ這入らない樣である。子供の敎育を重んじてゐらう。つゝましい生活からでもある。

毎日曜に伴れられて出る子供達は、まだ芝居も知らない。常設館で活動を見た事がない動物園や、公園や、百貨店の展覽會などで、一日遊んで來るばかりで、我が家の老少五人は、その時いとも幸福である。

その幸福を破壞するものがありとすれば下手人は私であらう。私はその罪人にならないですむだらうかと想ふ時、身ぶるひがする

同じ所で降りた娘を見返へる夜　京都　陸平
寢てる子にやる燒芋が一ツあり　同　平
荷車押してやつて何がてれくさい　同　丘
獸心の一歩手前で手を重ね　東京　白土
落ぶれた俺の姿が歩いてる　同　同
本當の涙で役者子を叱り　同　雨
今の女中子供と遊ぶ事が好き　金澤　今
母の背も十一月の丸さにゐ　同　同
白粉を塗らぬと妾すねたやう　同　同
神經に觸れるもの皆刎ねかへり　函館　虎
忍び泣く聲もかすれて土の秋　同　徹
同窓會女中に行つた友は來ず　大阪　小松園
行水の盥で力む子の手足　同　同
うつかりと味を聞かれた物思ひ　神奈川　收
舌打で酒が終りの暮しむき　同　同
考へる煩はしさに寢てしまひ　大阪　無鬼
ウンと働けと減俸で威したり　同　同
痩腕は土產の西瓜提げて去に　同　鯉友
乳母車勳三等は孫をのせ　同　同
丁稚けふ新語辭典を買ふて來る　愛ケ池　煙太郎

鄉里より弟來る

私の現狀は此の罪なき老父の前に全く白く塗りたる墓である。

私は父から謠曲を敎はつたが、これもみつちり仕上げる餘裕がない。川柳を始めて見たが、幾多の感化を提供されてゐても、血を分けて貰はぬ父の眞似は到底出さうにもない

父は謠曲をやり、修養團体に加はつて世話をしたり、氣の向くまゝの振舞ひをやつてゐるが、それは誰一人に遠慮のない振舞なのである。私の店から眞近に隱棲してゐるが、息子の私から屢々難題を持ちかけられる事があつても、米一握私の方から持つて行かぬ父である。

私はも一度川柳をやつて欲いとも思ふが折に觸れて一句二句作る外、川柳人としての生活を再び繰返さうなど、父は思はない事にきまつてゐる。せめて私が、勸められもせず命じられもせず、勝手にやつてゐる川柳が、私の家に川柳が續いてゐると云ふものだが全くこれは、私の勝手で、二代目當百が名乘れるなんぞと、大それた事は思つて居ない。

お祖父さんと、父の血が流れてる、子供達の中で一人位文學好が出來てもよさそうなものだが、まだ彼等はハッキリとそのきざしを現はして來ぬ。學校の綴方なんかも拙いものだ。只讀む事を好む樣だが、これも親の欲目とも云へやう。必ずしも、彼等に文學趣味を強ひやうとも思つて居ないが、つい先頃の純子さんの「川柳に就て」の一文を拜讀した時、親の仕事をよく理解して呉れる子を持つ事は嬉しいものだらうと、路郎主幹を羨望し

呑めもせぬタバコがほしい年となり　長野　風亭
人並の空想をして自嘲する　同　同
工面など出來ようのない日が迫り　大阪　笛秀
不景氣で賣られ景氣で受け出され　同　同
銀婚になつても悴氣止まぬなり　愛ケ池　作美
戀も無く男膽寫を刷つてゐる　同　同
ウエトレスいつか闘志の無い軍歌　大聖寺　青豐
山門を出て念佛のあらたまり　同　同
愉快だな男の方が生き殘り　愛ケ池　湧水
一切を忘れて萬歳席に居る　同　同
看護婦の時計動いて居ればよし　鳥取　湖山
亡き母もあすこあたりか晝の月　同　同
天照す神の眞下のうごめく目　大阪　柳次
相容れぬ心と心秋近し　同　同
灯を下げて一人淋しく醉ひにけり　高知　鐵吉
愛闘へ鏡あまりに卒直な　同　同
インキの減りが現在に似てわびし　大阪　黒天子
買ふよりも高い玉子に生れて來　同　同
さし向ひ丈けのチップでないのなり　長野　柳兒
舉國内閣すがられることばかり　同　同
後悔を褒めれば恩師すがられる　同　同

てゐる。

夜長

關本雅幽

○

讃められる言葉に對して羞む程の初心な私でもなく嚙んで捨てる程の意氣のない此の頃、唯口をもぐ〳〵さすかわけもなくニヤニヤしてゐるよりほかに之に答ふる技巧を識らない私である。此の「受」の方は之でよいとしても「動」の方の他を讃める事の技巧を持たない私につく〴〵淋しい夜長の訪れである

○

此の網を僕が借りて來たんやないか。
イヤ、僕が眞つ先に見つけたのだ。
じや、ジヤンケンにしやう。
君、ずるいよ鋏を急に石にするなんて。と
う〳〵解決がつかず一疋の陽干しになつた黒鯛を砂の上に棄てたまゝ二人が物別れして家に歸つてしまつた幼時を想起して子供でない大人の世界にもこんな事件の餘りに多いのが面白くてならない。

○

私の生家は前に畑が段々にあつて大平洋に面し後方には山が迫つてゐる。
こう言つても海にも陸にも風景としては變化が乏しく取得の無い狹い高原地である。晝寢の好きな私は夏の晝寢から覺めて背戸口からくる北風を背にしてボンヤリと海を眺める時滿汐が此方向いてキラキラと光つ

久々の舊師に逢へば子澤山　松江　柳人
情痴から覺めたる朝の眼が痛い　同　カツラ
療病院夕日輝く海が見え　兵庫　同
未亡人二階を貸したまでの事　大阪　夜王
塀高らかに彼氏の夢は金に盡き　同　佐一郎
沈默と泣く手とだけは覺へたり　京都　同
雨垂れの音に嫉妬は增すばかり　大阪　儀助
帶〆を締めて滿足した姿　同　同
思はずも念佛の出る湯の加減　京都　麗光
漬物石は飛石のなれのはて　同　同
九官へさからひたきは丁稚なり　鳥取　耕民
大都市の音響芝に寢て聞いて　同　同
錢湯でもう滿洲を承認し　大阪府　醉羊
味ふて見よと修養書が屆き　同　同
墓參り栗の大きさ見て歸り　島根　鴉天
暫くを女變つた顏で來る　同　同
丸藥の黑さにも似て我が病ひ　大阪　四五麿
吸ひつけて吸れて煙草の移り紅　同　同
盛場で乞食ねそべるのも仕事　大和　翠峰
紙芝居儲けもうすう辯士めき　同　同
飯喰へば腕がぼき〳〵鳴る秋ぞ　同　同

て來る海岸線は子供心にも棄てる事の出來ない眺めであり幸福を感じて居たのであるもし此の時

晝寢から海岸線がのびてゆく　路郎

此の聲を聞く事が出來ならば私の小さな魂がおそらく何をか囁いたであらうに。（十月十日夜）

外に聽く

吉田水車

「日本へ來て失望した」とは我國に遊ぶ外人具眼の士の言である、私はこの言に敬服と感謝の念を厚うするものである、何となれば最もよく我日本を識つて臭れるものゝ言葉であるから。チヤップリンばかりでなく他の外人もよく「ワンダフル」を連發するこれは必ずしもお茶の會やニギリすし、てんぷら乃至はハラキリ芝居に對する讃辭であるとのみ自惚れてはいかぬ、凡そ西洋文明を物質的とするならば東洋文明は精神的である、だが私は東海道五十三次を封建の昔に返へせと希ふものではない、百尺ビルの林立はもとより足下三十尺にメトロの唸りを聞こうとする大大阪の文化も結構、空中タクシーも空想に終らしたくはないにしてもせめて京都だけでも必要以上に鐵筋コンクリートを建てゝもらひたくはない、桓武の由來を誇る平安の都、京洛の山水に配した實用以外何ものでもない歐風建築は蓋しかなしむべき存在ではあるまいか。コンクリートのお城も出來た

金貸した弱みはる〳〵取りに来る　江　同　淑子
臺所の隅へも秋の米白く　同　同　みつる
母と伯母二人仲好く墓となり　大阪　同　白花子
あさはかに錢が心をつながせる　大聖寺　同　富士雄
海岸の冬を歩いた惱みあり　大阪　同　いわを
行水の女影繪の灯がともり　松阪　同　沃里
洗濯の後に午睡が待ち構へ　岡　同　田鶴緒
患者より一足先に醫者が逝き　島根　同　憲坊
引越しへ持つて行けない近所なり　大阪　同　雀子郎
トイレットルームへ秘密捨てに來る　岡山　同　曉鳴子
打上の煙火へ啞の子は笑ひ　神戸　同
P代の値下げと聞くも淋しい世
胎教も承知して居て貧しさに
トンボが一ツ大百姓の門の内
わが戀の源氏螢にさも似たる
籐椅子の寢心地よさは猫も知り
行水にあらを見られた流し元
あぐらなどかいて家族を見渡しぬ
まんまるく妻と座りて秋を聞き
新世帶夫も何か買つて來る
繼母と噂にのぼる日がさびし

以上外觀だけでも古風建築に模して欲しい。こゝにたゞ一ツコンクリートにも侵されないものに我歌があり詩がある。しかし生活をはなれては歌も詩もあり得ない。そして其我等の生活我日本の民族的精神を傳へて遺憾なきものに川柳詩があるのである。

（一九三二・一〇、四）

獨語

—川柳雜誌十月號が着いた日—

井原鴉天

「呑んで欲し止めても欲い酒をつぎ」か「家内も少々やりますよ。」絲之助居で、しよぼ降る雨を窓外に眺めながら、初めてお會ひした先生の、元氣な話し振りが思ひ出されるわい。先生ゐの頃は禁酒しておいでたが、昨今は？……路郎先生と酒、なんだか切つても切れぬ緣がある樣だ。先生の飲みつぷりを一度拜見したいもんだなあ。紙屋の歡迎會でサイダーをすゝつておいでた先生の姿は、いと哀れだつたつけ。あれが五月、もう五ケ月にもなるかなあ、そう〳〵今日の樣に雨が小止みもなく降つてゐたつけ。

ホヤ！大他を讀る人人？ふゝん雜門か。ほゝう！書いたな雜門、自分の事は棚へあげて、書きよつたな。ホーヤ！？奴俺公をポッキヤクしちよるぞ、鴉天先生を度外視すると、けしからん。不幸雲西の地に獨り離れてゐても大地を識る熱意は燃へてるぞ！こいつは文句を言つてやらづばなるまい。

空ビンへ秋の日射となつてゐる　大阪　月

算盤の珠も自由にならず秋　同

歸郷

今年も忘れず來た燕祖父は逝く　大阪　一騎

番頭と云ふ名に帶を固くしめ　同　沃天

混血兒抱いてママさんまだ若し　大阪　同

AとBへ秋はくすぐつたく迫り　同　し

ひとの事考へてゐず賢母なり　石川　しとし

色々なものを鳴らして寺閑か　同　吸

美しく來て言葉からあらたまり　大阪　呑

歡待に相濟まぬ程小さき胃　同

結婚

甦生にあらず凡化の第一歩　今治　曉童

運命をある時金が作り出し　同　同

左翼にも道理があると涼臺　京都　草村

父の死

秋の夜を念佛ばかりの母子にて　同　同

母親はお供の樣に娘に竝び　盤ケ池　松雨

見較べてみる看護婦の手はまろか　盤ケ池　同

病人が面白く見る雲の峰　盤ケ池　巷巴

心臟の音が聞こへるほど靜か　同

これはしたり、羅門奴。萬年卷頭の名に傷をつけやがつたぞ。黑い日にC子がどうとかこうとか言つてゐたが、神經衰弱にでもなつかかな　羅門の爲、大地吟社の爲、激勵電報でも打つてこまそ。

ほ、路郎先生、坊つちやんの看護のお疲れで臥床……アートちやんの病氣、お見舞をと思つてゐたのに……俺はどうもズボラていけないな。でもすつかりよくおなりになつたさうでお目度い。あの雨の日、今市の加藤さんの宅で、目を細くして、お子さん方の話をなさつた先生。お亡くなりになつたお子さんの話しに、涙ぐんでおいでた先生、先生はよつぽどお子さん思ひらしい。先生の御一家につゝがのない樣に……。

月の無い窓だなんて、變にセンチになつてゐる緣御大、心境の變化を求める爲か、いよいよ上阪の決心がついたらしい。俺も行きたいが金がない、暇がない、癪だ、御大に、ごつさり土産をねだつたろ。

矢車莊掌篇

久方慕秋

ピンク色のレター

それは物寂しい夕暮れでした。こもりゐの生活から離れたい僕は小川の淨を靜かに彷徨ふのでした。その時です。哀愁を孕んだす闇の中にピンク色のレターが落ちてゐたのは……

戀人から戀人にあたへる淡い胸の惱みが

希望を捨てゝ女給の頬杖
錢の音こゝにも秘密があるのなり
今日も亦御自慢丈けの御手料理
心境の變化が未練沸いて來る
極樂のすがた蓮の葉よくしげり
佛になる身ぞなにがかなしく
履歷書に投手してゐた頃もあり
保證し合ふて信用のない男
口說いても見たい家主の娘なる
お化粧の濟むまで八百屋待つてゐる
代名詞で自分のことを話してる
他人の錢を數へるに暇どる窓よ
パジヤマ衣のあまりに派手に振りかへり
洋館の寢臺に寢て蚊帳を吊り
退院は出來たがツバメもう居らず
大膽な心酒場の灯が青し
宮崎の型はこうだと風呂の中
逃けたのがうまへ喧嘩の筋をのべ
眞相も知らずに戀に醉ふな君
朝顏も世帶の樣に咲き細り
かゝしかと見れば農夫の一休み
稻によく密柑に惡く照り續き
晴れたのに傘持つて子は父を待ち

大阪 あや美
同 同
鳥取 暢山
大阪 同
同 北人
青島 琴舟
大阪 永樂
京都 梅香
大聖寺 水玉
大阪 小舟
大阪 白瀧
尼ヶ崎 まさる
堺 曲豆
尼ヶ崎 白菊
大阪 灯羊子
大阪 朴甫

ハートのおのゝきが、どんなに優しく美しくその中に眠つてゐたことでせう。
持ちかへらう……そつと胸に抱きしめてみやう、瞬間の僕は云ひしれぬ快感に襲はれるのでした。
あゝしかし僕はそれをためらひました。何故なら……その夢を追ふレターの持主を傷けたくなかつたからです。いゝえその美しい情緒をこはしたくなかつたからでした。

思ひ出の丸木橋

初戀の墓標ともなる丸木橋　墓秋……僕は今谷間の丸木橋のかたはらに立つて、ありし日の悲しい思ひ出に泌つてゐるのだ。淡い月光をあびてハーモニカのメロデーもむつまじく限りない嬉しさに夜の更けるのも忘れるのだつた。
楡の梢を搖らして夜の寂漠を打ち鳴り響く教會の鐘の音に、誰れからともなく讃美歌を歌つて變轉極りなき人間苦に堪えやうと誓つたのではなかつたか？……
「ねえ！本當にいゝ月なのよ」云ひ合はしたやうに冴えた月を眺めては成功への懸崖に立つ僕とS子は慰さめ勵ますこともあつた。
今思ひ出の丸木橋を彷徨しつゝ次から次へとありし日の感慨にうたれる自分の悲しき姿は……
便りなき君よ！思ひ出のS子よ！夢青白き初戀の墓標を偲ばうではないか。

一生も此の五分間五分間
泳げない人とは見へぬ肌の色
遍路さんまだ日は長い歩み様
レコードのストップそこら虫の聲
子の寢息眞ン中にして起きてゐる
圓タクの眼が夕立に忙がしい
灰皿を圍み爭議の夜は更け
海水浴肉體の美の見せる時
親の不和子供默つて本を讀む
二期工事見て鐵力の恐しさ
練習に今度は硝子わらず濟み
磨滅した外交員の立話
鄕愁を誘ふレコード遙かゝら
夕涼み同じ夕べの北斗星
統計によつて家計は上手なり
行儀よく育つて娘行きそびれ
高切れのいつそ淋しい年に居る
新醫博總長程に禿げて居る
順番に影歪ませるショウウインド
婦人科の待合室に男居る
超特急踏切番も見送りぬ
起重機はつり上げたまゝ晝休み
病むだけは病まぬばならず眼をつぶり
忙中閑貨物列車をかぞへて見
働きに出る樣にして甲子園

大阪 秃山
愛媛 南葉
伊豫 紫雲
島根 華村
伊豫 一虹
京都 阿鴻
大阪 玉兒
同 二黑子
同 馬骨
同 三丸
同 立坊
同 青兒
同 汀華
大聖寺 鷺月
大阪 寒溪
同 劍坊
同 青米
尼崎 盧白
京都 ゆきら
大阪 詩郎
同 孝男
伊豫 芳岸
大阪 葉光
武庫川 鳴玉
愛ケ池 岸岩

柳川ハルピンの此頃 (三)

立井登美坊

浸水の街ズロースのあからさま
松花江の氾濫はハルピン市街をベニスさながらにして終ひました街の水に彼の女達の右往左往思はぬ時にエロを發見致します
パン抱いてボートを避ける街の水
街の交通機關はボートに代り、食料缺乏に瀕しました。洗面器ほどもある大きなパンを抱いて水を渡るあはれさ。
新聞を賣りに胸まで水の街
水が出やうが火が降ろが支那人は金儲けにぬけ目がない……いや新聞を賣られば食へないのかも知れない。
豚屋根に水の流れがうらめしい
呑氣な豚君も屋根の上では食ふ物もなく誠に水の流れがうらめしい。
泥水に何か煮て居る屋根住居
人間許りは屋根の上でも世帶が出來ます
紅萬字旗押し立てゝ救護班
この慘狀へ支那の救護班めざましい活動をする可く大きな旗を押し立て續々とくり出して來ます。
浸水のお陰施療をして貰らひ
生れて始めて醫者に手を握つて貰つた連中、大變な喜びです。
めぐまれてもう避難民働かず
一生このまゝで食はして呉れたらと思つ

晩婚は拾はれたのを見せたがり　愛媛　孤鶴
梅雨晴れて母高下駄で歸つて來　高松　柳夢
陽の入りを女給に變る母で痩せ　愛媛　西英子
ナフタリン務めはたしだ姿なり　松山　耕朗
旅芝居村は晝から休みなり　大阪　坊茄子
花嫁を見れば淋しく成る俺だ　京都　富美三
淋しさはましろい壁につきあたり　堅ケ池　美子朗
御近所も頼んで歸る弟子の母　大阪　南柳巴
杭一つ打ちたいが蚯蚓鳴いてゐる　同　調
思ひ出はなつかしい足の古い傷　奈良　青柿

西國十六番所

俄か雨舞妓もぬれて清水へ　大阪　正路
買物に來たと新妻電話する　同　胡蝶
情熱をひつたくられた秋の空　同　岩石
失戀とは別に健啖なるダンサー　長野　有爲朗
にこついてゐるのは寄附で來た巡査　大阪　百男
朗かに感謝をせよと牧師なり　京都　竹雅生
月給をもらふにオーライとも云へず　同　秋來
籤引きは子にひかせても五等なり　堺　慈雨
掛けたまへ偖て氣の毒は饅頭のこと　同　光外樓
プロとプル桁の違つた生計費　松山　大秋彦
痩せ馬に似た晩秋にある詩情　松江　慕刀子
大阪の黄色い晝に疲れて來　靜戸　秋麥
金策の心に下駄の音も秋　同　阿里蘭
貧しければ子を呼ぶ聲の荒々し　大阪　晴夫
筆とめてさびしくなつぬ履歴書　同

てる事でせう。

連れて居る乞食の犬のあばら骨

水につからない方面は相變らず

犬を連れた乞食ががんばつて居ります。

運のはて匪賊の哀れ梟し首

避難民を襲ふギャングが捕つたら最後公衆の前へ首が梟し出されます。

拾五圓映畫は僅か小半時

水のない崗の上では「顏面筋肉を硬直させて凝視する肉魁の動きをさながら馬のそれの樣に」見て居る人々もあります。

南京に襲はれ夜番の杖を聞き

又カマレて飛び起きたら夜番が石疊の道をつく杖の音が響いて來ます。

哈爾濱にて七、十、一五

新誌友

（七年十月廿五日まで）

（川柳雜誌）前金半年分壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致します。何卒新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には川柳雜誌の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（絲雨）

靖田方眠、天野卜居、都藤冷笑（梅田支部）山口元山、和田永樂（塗青支部）石村正和、照屋寬柳（鶴町支部）今村荒男（長崎柳秀）和田ゑらた（廣江天痴人）水谷野洲（藤田紫石）北川あやみ、岸上錦石、幸松四五麿、今荷千清水虛白、丸島利生、三井伊之吉、橋本言也二宮權太郎、綿谷雪、山本白丘子、紙谷北陽子、北出義郎（木社事務所）【括弧内は紹介者】

武玉川初篇研究 (六)

梅本秋農屋
森東魚
姪子省二

(108) 安弔の蓮の明ほの

省二＝例へば、仲間で擔でゆく弔。池の端あたりで、明ほのの蓮をみるー安弔は早朝出したものだ。

秋農屋＝寺院の境内の蓮池でも宜いが、谷中邊の寺へ送る棺の附人が、不忍池の蓮をみて通るとするもよい。

東魚＝曾て此句は大分問題になつたが、原本を引合せてみて驚いた。「安弔」ではなく「安イ望」と、イが捨てある。えらい事になつたものだ。今迄どうして誰も氣がつかなかつたらう尚原本御所持の方は一應御覽を願ひたい。「安イ望」だとすれば、蓮のあけぼのの光景にみとれて、極樂はこんな處なのだらう、死んだら、こんな清々しい處へゆきたいものだ、といふ心持ちと解して、充分受取れると思ふ。

省二＝私の見た原本には、明瞭に「安弔ヒ」とある。(望といふ字は後出するが、弔なる文字が大きく書れてある)。四五冊の原本を調査の上、決定する事にしよう。句意は前二說何れも可。

秋農屋＝某君から安弔に鹽釜を用ひたといふ說が出た由なるが、江戸時代の葬式の會葬者には强飯を出したもの、死者が五十歲以下なる時は黑豆を入れし白强飯、五十歲以上なる時は小豆を入れたる赤飯に雁もどき一個、澤庵漬一切、日光唐辛子一本を、一の竹皮に包みたり。會葬者はこれを寺に於て喰ひ好まざる者は歸途乞食に與ふ。明治初年まで亦斯の如くなりし。老生の祖母が明治六年に死したる時も亦赤飯を用ひたるが、夫れより後初めて鹽釜を用ひる事となりしが、決して安弔には用ひられず上等の方なり。安弔には煎餠おこし樂雁などを袋入りにて代價一錢程の物を用ひたり。老生の養父が明治二十四年一月の葬式には鹽釜を用ひたるが、當時一個の代價三錢五厘宛なりき明治十年頃迄は葬式に鹽竈は決して用ひられず、されば武玉川時代の句によまるゝ筈無し。昔の安弔には何も出ざりしと聽く一錢の菓子袋を出すやうになりしも、明治十年後なりときく。

省二＝(餘談)鹽釜は昔からあつて、「鹽釜を手土産奥の宿下り」今日の東京の鹽釜は仙台の藻鹽燒に比すれば僞物の思ひ

がある。

(109) 雀子の可愛かられて迯て行

省　二＝「人に遁げ人になるや雀の子」（鬼貫）で、雀子ほど可愛しいものはない。拙家で犬の五器の餘り飯を親子雀がたべる。牛肉まで食べてゆくが、子雀丈け殘されてゐて、笑ひ聲で迯てゆく。外國のカッフエには、雀の子が遊びに來ては、御馳走になつてゆくのがあるそうだ。「絲悲すれば糞をする也雀の子」（一茶）糞をするも可愛いものだ。

秋農屋＝「我と來て遊べや親のない雀」、同じ一茶の句でも、此方は哀れである。

東　魚＝小さきものをいとほしむ、心持がよく出てゐる。

(110) 折ふしは棒も降也さくら狩

秋農屋＝この櫻狩は花をみる意で、亂暴をする醉漢とか、狼藉者とかを捕へるに、山番などが棒で歐打するのである。

東　魚＝「棒突に盃をさす花見かな」といふ太祇の句がある。それなら無事だが、其棒を喰ふやうではたまらない。

省　二＝「亂に及むで縛られる花の山」で、櫻には醉漢をつくる大魅力がある。因に突棒と生醉の句「突棒に顏恥かしく醉が醒」（武十三）。「生醉の覺るまくらに棒を見て」（武九）など類吟多し。

(111) 淋しい茶屋のしれるかやり火

省　二＝杉葉やネムの木などたいた。「蚊遣火や善き宿をとり後れたり」（路曳）など、旅路での蚊遣には思出深い。頻りに蚊遣する茶屋の何んとなう寂しい景趣。

秋農屋＝元來、蚊遣火は淋しいものであるが、往來の寂い街道の茶店では、一層淋しい事であらう。

東　魚＝蚊遣が一しきりぱつと明るく燃えたやうな氣がされる。「しれる」の修辭がさう感じさせる。

(112) 志賀は小言の種にそ有ける

省　二＝句振りが古今和歌集序、「やまとうたは人の心を種として、よろづのことのはとぞなれりける」を踏むで居るやうな氣がする。小言の種とは「志賀寺の掘る手戀の厄所」の話柄關係なのだらう歟。

秋農屋＝志賀寺の朝觀が、京極御息所を看初めて戀慕した、故事を言つたものであらう。

東　魚＝充分のみ込めぬ。再考したい。

(113) 捨ものにして抱ついて見る

省　二＝無駄になるか、役に立つか。「抱つくと云ふは叶はぬ時のこと」（武十八）。成否は兎も角當つてくだけろ。

秋農屋＝身を捨てゝこそ浮む瀨もあれだ。

東　魚＝色事には兎角押の强いが勝、一押二金三器量といふ俗諺がある。

(114) 居風呂へ明てはかへる松の風

省　二＝うら寂しさが味へる。

秋農屋＝「明ては」が、少し耳障りである。

東　魚＝どうもよくわからぬ。

(115) 錢ほとに盛あてかふさくら草

省　二＝「錢ほと」は「櫻草二百が買ふとからになり」で判る。「櫻草は季春の比賣之瓦鉢に植る」で櫻草賣が來た。可憐な花丈けに妾宅に愛せられた句もある。「花は木の根にかへりてや櫻草」（盛道）。「我が國は艸も櫻を唉きにけり」（一茶）など氣焰を上げて居る。東京附近では淨閒が原が名所。

秋農屋＝昔は鉢栽の花卉の中で、櫻草が最安價であつた故、子供なども買つたものだ。櫻草賣は明治初年まできたが、其後

は全く絶えたのである。

東　魚＝「盛あてかふ」は僅かな錢に對する盛りの短い意か。

(116) うまい事書た文見る鼠の巣

省　二＝この鼠いたづら好きな愛嬌者かも知れぬ。うまい事書いた戀文を、巣へひいて來て置くとは、たゞの鼠ぢやあんめエ。——その文を讀むでゐる者の顔がみたし。「戀の世や鼠も文をもちありき」(武七)

秋農屋＝「戀の痴話文鼠に引かれ云々」といふ俗謠がある。鼠を愛嬌者とは如何。

東　魚＝「桝落し」の所作に出てくるやうな、洒落た鼠なんでせう。

(117) 山歸來干す辻番のうら

省　二＝山歸來は元と支那から渡來した藥草である。「惡病山歸來などにてかくし置きしが」とか、「藥種屋でやつと聞とる山歸來」梅毒用とされて居る。「辻番にたま〳〵若い骨からみ」。「辻番は鼻の障子もないところ」。裏に干す理由も判る。—朝鮮にも山歸來はよく生えて居る。

秋農屋＝山歸來は東京近郊に、自然生のものが多く有るから辻番人自身が藥用にするとて、これを採取して干して置くのである。

東　魚＝賛成。

(118) 狐に戀を見せて化され

省　二＝美しい女姿には、はまり易く化され易い。狐傳說は餘りに多いが、私は一度も化された者をみた事がない。

秋農屋＝狐妖の傳說は支那が本場で、我が國のは其受賣である。「聊齋志異」などをみると、安倍保名のやうな男が甚多く、人獸の混血兒を擧げてをる。

東　魚＝美女に化けた狐にしてやられたのだらう。五丁町の狐にもしてやられるのがある。

(119) 鎧を着ると側に卷物

秋農屋＝卷物は例の勝畵卽春畵で、出陣に臨むでそれを繙いてみるのである。

東　魚＝魔除けださうだが、實は陣中の慰めが、もとであらう。鎧櫃には皆入れてあつたものださうである。

省　二＝太田南畝の「南畝莠言」に、具足櫃にいれる話が載つて居る。一說には蠹魚を防くまじなひだと。色々附會する處に語つて落つるわけ。

(120) 千鳥をは鷺にして置遠めがね

秋農屋＝洲先などに居る友無し千鳥を、望遠鏡でみて、彼處に鷺が一羽居るといふのである。

東　魚＝肉眼では群飛ぶ千鳥しか、見えないのだらう。

省　二＝遠眼鏡の活用といひつべきか、呵々。

(121) 水かねを吝く振出す鏡研

省　二＝水銀は高價でもあり、毒にもなるので大切にした。「鏡研いつち仕舞に毒をもり」この職人に加賀者が多かつた。「水かねのしまつも寒し鏡研」(寥和)。

秋農屋＝「吝く振出す」は少量づつ振出すといふ意で、それが高價であるからといふのではなからう。

東　魚＝ちび〳〵振出さないと、始末におへなからう。

(122) 前巾着に枕する猫

省　二＝巾着の上の孔に紐をつけ、帶革によつて前腰にさげたもの、前提げとも稱した。金をいれたものだ。猫の人なつかしさが面白い。

秋農屋＝少し作り過ぎた句である。

東　魚＝前巾着と婆さんである事が想像される。

省　二＝私は主人と解してゐた。前巾着には主として印とか鍵を容れてゐた。そこに猫が枕する興がある。「今宮の心中」に「やう／＼灸も點ゑおろす、主人の帶の前巾着、後へ廻る紐とけて、繋ぎし鍵は巾着より」で、主人は四郎右衛門。又「嬉遊笑覽」にも、一簑山【大鑑】に前巾着は凡卑なれど遊所には能かなへり　これ寛文延寶のこと也醫者などの提たる古く見ゆ　其後久しく廢りしにや【賤小手卷】安永頃京攝にて前さげといふもの流行て一般に用ひたり巾着の上に紐通しを付帶革といふ物を付て前へ提るなり、印形要用の鍵の類身をはなさゞる品を入至極重寶なる物にて能工夫なりしが江戸にてはさのみ用る人少なし【獲絨輪】に前巾着はとり置の翠丸、居風呂で人の燗する雪の香といふ付合あれば今少しはやく江戸にも流行したるを知べし」と

123）螢の先へ間に合ぬ傘

秋農屋＝句意不明

東　魚＝ふと眼前を流た螢を追て、思はずさしかけられた傘から出た場合ではないか。傘をさしかけてゐる方は、不意に螢を追はれたので、急で傘を差出したが及ばず、小雨に美しい人の袖がぬれるといふやうな光景かと思ふ。

省　二＝雨夜の螢は低く飛ぶ。「雨の夜は下ばかり行く螢かな」（舍咕）。一寸傘で追ふてみる。螢は上の方へ……「傘の上螢飛かふ明り哉」（梅寶）。

124）湯立の通りはやる振出し

秋農屋＝湯立の大釜に湯を湧かすやうに、流行感冒の振出し藥を煎じるのではない歟。

東　魚＝そうかも知れぬ。さうすれば湯立を思合した處に、藥のきゝめも著しい信頼した心持ちなのであらう。

省　二＝大膽な、面白い取合ではある。

125）聾きいて笠を名殘の檜原

秋農屋＝人の旅行を送るとて檜原に差懸り、「それなら御機嫌宜しう」。「道中を御大事に」。さらば／＼の聲ばかりで姿はみえず、只管笠ばかりみえるといふのであらう。

東　魚＝原本「聾きへて」で、「消えて」の假名違ひであらう聲が聞えなくなつて笠だけ、チラ／＼みえるのである。

省　二＝消えてならば、甚だ判よい。—臺本には「嚴密に對照精讀せしに付き誤脱なきを保證す」とあるが、かなり誤植が多い飜刻の難事を思はせる。

126）世はからくりの福壽草咲く

省　二＝前出「室の梅」と同巧。元日草ともいつて喜れた。「福壽草けさ咲く物と覺えけり」（文素）。

秋農屋＝室の梅と同巧かも知れないが、最少し深い意味が有りはせぬ歟。

東　魚＝室で咲せるからくりと、暮から春へのからくりとい ひ掛けてあるとみれば見られる。

127）凡夫さかむに猪牙へすはしり

秋農屋＝凡夫旺にして神祟無し、といふ俗諺はあれど、これは山の神の後の祟が䘮ろし。すばしりは俳諧の慣用手段で、魚の名を借りて、走る意を表はしたものであらう。

東　魚＝魚の洲走りといふのは、洲になつた處を躍越えて水に飛入る事を云ふようである。（鮭の洲走など。ヒラりと猪牙へ飛乘る。凡夫旺んにして怪我もせずと云ふ意味合ひであらう或はすばしり 鯱)は、おぼこの大きくなつたのを云ふさうだから、遊びもチトなれてきた意味合ひかも知れぬ。

省　二＝氣力旺盛にして、猪牙にのりたがり勝ちなのであるこの俗諺利用句は珍らし。

(128) 住居の智恵は越てから出

省　二＝居は想ひを新たにすと言ふが、よく轉住する友人に尋ねてみると、この句通りで、移つてみると不便な點が氣になつて住むで居れぬといふ。——大觀すれば人間萬事こんなものかもしれぬ。(因にケイ廿二に「引越の夜明てみればうらに山」といふ奇拔な作がある)

秋農屋＝昔ならば引越女房と新世帶、今ならばアッパートに愛の巢、孰れにしても安値至極である。

東　魚＝往來から垣越にかう丸見えだとは思はなかつた。氣がつかなかつたなア、などといふ塲合なのだらう。自分も今現にその經驗に苦笑してゐる)

(129) 外科はその名も付す別るる

省　二＝その名を知らす程の患でもないのであろう。

秋農屋＝千金方すら讀めぬ藪井先生。患者に病名を問はれてされば癰、疔、根太の類でござる。

東　魚＝怪我かなんぞの手當で、別にいふ病名もないのだらう。

(130) 首さへ出れは窓の通い路

省　二＝ビルディングの上層の窓から首を出しても、通ひ路となる話は仄聞せぬ事もない。

秋農屋＝油屋の丁稚久松は、藏の窓から首さへ出されぬ。

東　魚＝茶氣滿なところが良い。

(131) 暑き日に娘ひとりの置所

省　二＝虫干もせねばならぬ。娘ひとりに親の氣苦勞。居り所よりは置き所の方が複雜丈け良い。

秋農屋＝虫干をするとて、坐敷中に衣服を掛け渡したので秘藏娘の置所がない。床の間へでも据えておく歟。

東　魚＝はし近な處は、どうも危まれるのだらう。

(132) 青い葉は律儀にしらぬ立田姫

省　二＝「たつ田姫是より息子うかれそめ」は　葉を示す。立田姫は秋を掌る神なのである。故に青い葉を知らぬといふのも觀察であり、「思ふまゝ松のみ染す龍田姫」(三二敲)も亦通る。

秋農屋＝「あをかりしより思ひ染めてき」といふ古歌も有るが此立田姫は律儀に過る。

東　魚＝律儀に知らぬといふ樣な、言葉の活用が面白い。

(133) 鐘つきに引はなさるるうしろ神

省　二＝「後ろ髪を引かる」を踏む。あれ憎くらしい明の鐘。

秋農屋＝「着想が古臭い。神は髪の誤り也。

東　魚＝鐘つきが引はなず樣によんだのが山丈けで、全く清新な味はない。

(134) 張合のなき盃はさし向ひ

省　二＝さし向の盃だつて悪るくはなからうが、もつと、すねた盃の方が好いには極つて居る。エログロを加味した。

秋農屋＝そして炬燵の差向ひだと、エロ味充分であるが、野郎同士の差向ひでは、失職の話借金の話、實に張合が無さ過る。

東　魚＝差向では全く話が理に陷ちたがる。三人以上にならないと、はづまない。

(135) 土産の一駄前の日に着

秋農屋＝田舍の親戚か知人が、來訪の前觸れを兼ねて、土産物を送られるので、それは酒樽か芋俵か。

東　魚＝はでやかな句だ。

省　二＝後からつくのでは有難味がうすらぐ。

(136) 子を擧て居る舟の眞中

秋農屋＝渡船の情景であらう。
東　魚＝利口らしい子供が、行儀よく居る様が目に浮ぶ。
省　二＝舟の眞中に武玉川式の味がある。

(137) 師走の猪牙に裏白か舞

秋農屋＝現今、猪牙舟は廢れても、小形の舟に松飾をしたものを、歲暮より新年に掛けてよくみるのである。
東　魚＝春の飾をするのに、散らばつた裏白の葉、それが特殊な猪牙であつて更に興が深いといふ心持ちの句。
省　二＝濛朦自動車でも、裏白をつけてゐるのがある。

(138) 雀へ酒のかかる鳥さし

省　二＝「鳥刺は生きた雀の帶をしめ」。燒鳥で一杯だらうかてゐたので、居酒屋などで立呑をする時、酒の雫が其籠に懸るといふのである。
秋農屋＝昔の鳥刺は、魚を入れる呑のやうな竹籠を腰につけ
東　魚＝生きた雀の帶に酒の雫がかかるのであらう。

(139) 夜着の榮花の眼か明て居

省　二＝「だまされた人へ三井は夜具をうり」、その夜着布團の榮花の夢を結ぶには、仲々に惜しい。
秋農屋＝これは妓樓の夜具ではなく、「枕中記」の盧生を咏むだのではない歟。
東　魚＝寢つけぬ立派な夜着にねて、何だか落つかず寢そびれるのであらう　妓樓でなくてもいいやうに思ふ。秋農屋翁說の如くだと、「夜着に榮花の」とありさうなものだと思はれる。

(140) ひよんな字を問て家内にうたかわれ

省　二＝例ば「淋しひといふ文字は癆病」武十七)。うつかり淋しいなどもきけぬ字だ。
秋農屋＝家内とあつても、妻ではなくて、家人の意であらうと思ふ。
東　魚＝贅

(141) 廿チの思案聞に及はす

省　二＝「悔かりし十九の年も無事で過」(武十三)はしたが、女の時期を失しては愚痴も出る。昔の二十は今の二十五に比適する。「廿五は娘の年でなかりけり」(武八)。俗諺には十九立花二十は見花、二十一では萎花。
秋農屋＝二十歲の女と思はれるが、又男かとも思はれる。
東　魚＝聞に及ばずからみると、男らしくも思はれる。云はずもがな北國行きの思案だ　と云ふ様にとれるが、二十を重くみると、十九を過ぎた女、今年は何としても嫁にゆかねばならぬと云ふ心持の様にもとれる。これも亦前句如何により明かになり得べきであらう。

(142) わさひおろしに寒い袖口

省　二＝本物の山葵卸として解せられる。——(下女の手を形容した句もある)。
秋農屋＝山葵卸で大根をおろす場合には、自然寒い感じが起る。決して婦の手ではない。
東　魚＝卸かね其ものが既に寒い感じがする。

(143) 高く聞へる闇の口上

省　二＝闇に聲ありなどの語もある。闇の口上は四隣寂として居るから。
秋農屋＝何の口上である歟。屋内か屋外かも判らない。
東　魚＝さして高聲でいふのでもないが、思ひなしか大變高聲のように感じられると云ふ、感を主として受入れゝばよい。場合は前句の如何である。

(144) 麻刈の一鎌つゝに笠が鳴

省　二＝高八尺位に直立して育つ。夏刈り、秋刈るを二番刈といふ。—「麻の香や笠きてはいる野雪隱」(元峯)
秋農屋＝麻畑の光景が能く顯はれてゐる。
東　魚＝全く爽かな、すが〳〵しい感じの句である。

川柳塔

ひ・町・素・琴・山・絲・合議選

○ 橋本絲雨

掛取に明日來いの明日案じられ
閻の黃に女はふるえ

○ 西田艸樂

サーベルの威壓に善人吃るなり
取りつけぬ米屋を呼べば裏から來

○ 岩崎柳路

腦味噌が足らんと伯父は露骨なり
ライターが點かず若樣腹を立て

◇ 水谷鮎美

祝樋口坊茄子氏（二句）

松の風長壽の秋の澄みきりぬ
出勤の途上の蛙おもしろし
蓮の枯葉の風におどろく
善惡の影が重りあうてゐる
少女らの晝食にまるさくずれし

◇ 石森靜太

「患者さん」それで寂しくなりました
淋しさは落葉となつて今日も晴
ああかたこひをあおぞらにとかそう
名月へベットを捨てゝ歸るなり

◇ 楊井二南

風呂沸いたまゝで秋の夜話しこみ
眞心を裏切る樣に足を組み
世渡りに躓つまづくこと多くなり

◇ 岩垣奇可愛

買上げた米の値に住む人もゐる
砂遊び乞食の眞似もしてたつしや
質問を許さずたゝき賣屋ゐる

◇ 中澤濁水

欝ぎこむ書齋に烟管まで詰り
赤い灯や青い灯を見て痩せる村
氣まづさを元教へ兒に並べられ

◇ 平岩司郎

山はだに墓見えてふるさとなすびなすび母まないたに老ひましてたゞまるき月に散髪でもしよう

◇ 熊谷紅

質札と背中合せの五圓紙幣
獨身の噂バケツの水が越す

◇ 尼線之助

漣のゆるく流れて光る秋

長男六ヶ月

クル〳〵と剃つて元氣な頭かな

◇ 西村明珠

屑籠にみちみちたりや秋の事
父と子と机圍んで試驗前

◇ 春多春秋

父は相場師象牙の箸で食ひ
用心をしたなと毒婦思ふなり

◇ 日野華水

納得をして歸つたのに手紙來る
何べんも唄うて達者な五つの娘

◇ 中西おさむ

頬骨の高き男と新體詩
低腦兒お釣錢を貰ひすぎてくる

◇ 吉田水車

洋樂に合はして他愛なく斬られ

大阪歌舞伎座成る

洋風の軒にとぼしき繪看板

◇ 市塲沒食子

現像液の中に彼女が見えて來た
針仕事チユウインガムの口動き

◇ 廣江天痴人

野良休み今日は沙魚釣る頬冠り
農民からみれば無罪となるものを

粒々集

—路郎選—

東京 富士野鞍馬

女學生着物になつてお茶へゆき
三越がしまつて日本橋暮れる
哥澤の二つ位は彈くといふ
女學生母の鏡で物足らず

松山 前田五健

外人の和裝きまつて五ツ紋
鼻は眼は耳は口はと小さい手
かまきりの寄らば斬るぞと構へたり
不景氣と夜寒を云うて鼻をかみ

石と光線

—前號近作柳樽より—

松丘町二

句評といふものは、仲々骨が折れるものと見えて、胸のすくやうな批評には一向出逢はない批評家といふ人種は——かくいふ私も御多分に洩れず——人間褒められて腹を立てる奴は滅多にない、といふことをちやんと心得てゐて、時には心得過ぎた結果、隨分無理な褒め方をする。褒められた方は「作家自ら一番いやな所と思つてるところを、一番褒めるものが批評家さ」などゝ皮肉りながら、矢張り悪い氣持はせぬらしく、脂下つて見せる。もつともまれには下手に褒めると、腹を立てる底の人間もゐるにはゐるが、そんな男は、批評家の方で敬遠して近寄らない。どつちにしろ、句評なんて不景氣な店を張るのは、利巧な人間のやることではなさゝうだ。などゝこれから批評文を書かうと云ふのに、ふざけた筆を弄する奴だと怒られさうだが、本人これで頗る眞面目である。

「あらゆる批評の前提として自己批評がある」とは如何にも見事な言葉でありこの言葉の實踐は、私と雖も務めてきた積りだし、また務めて行く積りである。そして諸家の作品を自己批評の素材として取り上げるといふことは、結局作品をダシにして自己を語るといふことで、最も見事に自己が語れたら、それは最も見事な批評だと心得てゐる。

正當な批評に、逆説や詭辯は邪道であらう。併し眞實を語らうとして、語ることの困難のために、その困難を助ける嘘に反抗して、逆手の効果を擧げやうとする逆説や詭辯なら、敢て退けるに及ばずそれらの孕む眞實の洞見を誤らないで欲しい、と頗る蟲のよい注文をしておいて本論に入る。

君ちつと自己宣傳が過ぎたのさ
ノーチップそんな無粋な俺ぢやない
長いものに巻かれてをれぬ愚直さよ
身の爲であろとなかろと俺の趣味
ルンペンが恥かしくない世の中さ

窮すれば通ずる議員たちとなり

その外に何か求める御親切

川柳の一番の缺點は、ともすると表現が露骨になるといふことである。つまり云ひすぎるのである。どんなにハッキリ云ひ切つてみたところで、たかゞ十七字である。具體的には何事も語れる筈がない。短詩の貴さはその餘情にある。暗示にある。一語一語の陰翳にある。陰翳の齎す豊富性にある。素材の持つ外部現實は、作者の手法を通じて、一句構成の表現形式となつて、外在律を奏で、素材のもつ内部現實は、所謂内在律として、生命の音を脈うつ。内在律のない若しくは薄弱な短詩は、短詩ではなくて散文の一齣に過ぎない。いかに巧妙な技巧も、それが單に文字を發音されることによつて存在するだけのリズムを持つに過ぎなかつたら、内部から湧き上つて、人々の心底に觸れてくる靈動的な個性的なリズムを持たなかつたなら、いかに巧妙な技巧も死物に過ぎない。誠に技巧を磨くことは、心を磨くことである。こゝにもつとも本質的な技巧の問題が胚胎する。

我々は、たとへば、石を觀察するときその一つの石が持つ光線の戯れを無視してはならない。見逃してはならない。石といふ言葉を見るのではなくて、石そのものを觀なければならないのだ。犬といふ言葉を見るのではなくて、犬をみるのだ。概念ぢやなくて眞實だ。我々が今辨證法的觀察をコップについて試みたとする。コップは硝子製の圓筒狀の底をもつ器具で、普通液体を入れて、人々の口に運ぶ用をなす。併し一莖のコスモスを投すれば一輪ざしとなり、その周緣を辿れば幾何學の圓が描ける。筆挿になり、手品師の手品となり、若し投げつけたら兇器にもなる。だがコップの持つ無限の光線の戯れを見逃したら、詩にはならない十七音字が持つ內在のリズムの生動！これが川柳といはずあらゆる短詩の生命である、貴さである。云ひ切ることはよい併し決して云ひ過ぎてはならぬ。

我といふギヤマンの如き男あり
打てば響く我と信じて疑はず
木賃宿にも純情はあるものぞ

酒だけが自分を知つてゐて呉れる

これらは嘗て發表した私の句であるが明かに云ひ過ぎてゐる。これらは未だ素材である。かういふ氣持が歌ひたいといふテーマに過ぎない。素材を素材のまゝで提出するのは、甚だ容易であつて、敢て作家の才能を必要とせぬ。作家の才能を必要とせぬものに、川柳も詩もあつたものではない。露骨であること、生であること、あくどいこと、品格を顧慮せぬこと、輕薄であること等々が、川柳の特長でゞもあるかの如き觀念は、川柳の敵であらう。別に上品ぶる必要はないが、きよろきよろする必要もない。

散文的精神といふものが、己れの理智の上に織る幻を見るとき以外、詩を知らず詩を歌はぬ精神であるとすれば、在來の物欲しげな通俗感傷精神よりも、數等健康な歌を歌ひ得るだらう。だが散文的精神が、まともに散文的な言葉を語るとき、川柳に在つては屢々云ひすぎるのである。彼が奉ずる現實主義は、物質の情熱の上に、慾情的な自己の夢を織るときに於てのみ、詩となるといふことを忘れてはならない。プロレタリア短詩と稱するものを見て見給へ「あらゆる藝術は宣傳である」と云つたアメリカの誰かの言葉を、まるで自分達の短詩のために、提灯持をしてくれたと信じてるかのやうな素朴さだ。いかにも藝術は宣傳である。だが、この言葉は、あらゆる藝術は、それが秀れてゐればゐるほど、作者の根性まるだしであるといふ事實を考へないでは、意味をなさぬ。まる出しにされた根性は、作品の評價は個人の鑑賞の上に築かれる、といふ事實を確信しながら、他の精神に呼びかけてゆく。呼びかけられた精神は、見事に定着された根性の氣魄にうたれる。こゝに個人の鑑賞が始る。鑑賞は次の鑑賞を呼ぶ。かくして作者の根性が、數々の共感を蒐めるとき、その藝術は、作者の魂の宣傳ではないか。こゝに根性とは云ふまでもなく作者の性格である。個性である。云ひすぎてはならぬ。云ひすぎると、作者の根性がまるで出ないで、何から消え去つて仕舞ふ。

南北君隱退と玉屋町時代

木村半文錢

南北君が番傘を去つた——事の正否は私には分らない。然し若しそれが事實だとすれば、さきに五葉を喪つた番傘としては重ね重ねの痛心事であらう。水府君個人としても番傘自體としても。——

南北君がなぜ番傘を去つたか——番傘はなぜ南北君を去らしめたか——といふ問題は私の如き方今の大阪柳壇と關係のない者には全然その眞相が摑めない。よし又それらしいものを傳え聞いたとしても、それをとり上げて發表する程の私は閑人でもない。ただ私の關心すべき事は、南北君が番傘を去るにしても、川柳を全く棄てきるのか、但しは番傘を去つても尙ほ自由に川柳を作るのかといふ問題である。

もちろん、南北君自身も川柳雜誌社宛の書信には「…川柳をかつてにやるだけで今は斯道に何の關係も無之」云々とある通り、川柳は自由にやるが在來の川柳界（番傘を指すか但しは全川柳界を指すか不明だが—）とは無關係であることを意味してゐる。最も南北君が番傘を去つたとしても其の作品なり文章なりの發表機關はサンザリするほど揃つてゐる同君の事だから、南北君を失つて誌面の淋しさを餘儀なくする番傘の將來の杞憂はあつても、南北君としては發表機關に何等の顧慮すべき點がない。だから同君としては「川柳をかつてにやるだけで今は斯道に何の關係も無之」と強く出るだけの立場があるわけだ。

それはいゝとして、問題になるのは番傘を去ることをきつかけにして全川柳界と關係を斷ち、自由な立場で川柳を南北君一流の生活と氣分と趣味とから割出さうといふのか、但しは番傘を去つても川柳界には尙ほ作家としての南北君が居殘るのか——の此の二點に存する。若し南北君が全川柳界から隱退するといふのであれば、路郎君の提唱するやうに、隱退批露會でも華々しく催ふして、同君の大阪柳界にのこした功績に酬ひるといふことは當を得た所置であらうと思ふので私もその贊成者の一人になりたいと思ふが——若し、番傘だけの絕緣であつて全川柳界を見限るわけでないのであれば、從つて斯の會合の意義をなさない譯けである。

こゝで少こしく南北君の大阪川柳史上に貽した功績の一端を述べて、諸君の參考に資しておきたい。これは番傘とか川柳雜誌とかの對立的感情問題ではなしに、大阪に於ける川柳史を說く上に於て重大な關係を有するからである。決して一黨一派の問題でなく川柳の發展、川柳家の移動、川柳向上の動向等の上に見逃すことのできない重要な意義を含むからである。

私は記述の便宜上、大阪に於ける川柳發展の道程を左の如く區劃する。但し左表は特に番傘のみの抄出であることを斷つておく、他は本問題に關係がないから省略する。

京町堀時代（當百居中心時代）
前玉屋町時代（南北居中心時代）
後玉屋町時代（水府居中心時代）

つて創立したもので、番傘を創刊した時代には當百氏一人のみがとゞまり、他の三氏は既に大阪を去り（虹衣氏は殘つてゐたが）從つて番傘創刊には關係がなかつた。要は關西川

葉柳—關西川柳社—番傘—第一期
　　—第二期
　　—第三期

右表の關西川柳社は番傘を創刊した以後も是を用ひてゐたが、實質的には關西川柳社と顏振も內容も變つてゐる。即ち關西川柳社は當百、百樹、卯木、虹衣の四氏が中心とな

柳社の名義が當百居に遺されてゐたので、便宜上それを用ひたまでで、事實は全く相異してゐたのである。後年に斯の關西川柳社の名義を廢して番傘川柳社に改稱したが、既に番傘創立當時に實質上の變更があつたものと認め、私は右表を作製して於たのである。故に番傘第一期京町堀時代には關西川柳社の招牌を用ひてゐたが、私は是を番傘時代の中に收めた譯である。見る人は其の點を注意していただきたい。

右表の京町堀時代は、西田當百氏が中心となつて諸種の會合の世話なり、會計なり、特に川柳の指針などなりも、專ら肝煎り役を勤められたので、謂はゞ當百氏の寓居が京町堀上通三丁目に在つたところから、假に斯く呼稱するのである。

ところで當百氏は一身の都合上から川柳界を隱退し、全く川柳作家としての過去を撤去してしまつたので、番傘は中心を失つてしまつた譯だ。そこで五葉君を後任として番傘の重要なる面倒を見て貰ふことにして、水府、蚊象、絲天君等に會合や雜誌上の世話をたのむことゝなつた。

これよりさきに、京町堀時代に南北君は天平君などと共に顏出しをするやうになつて當百君隱退時代には、既に番傘の中でも重き一人となつてゐた。勿論これは川柳作家としても實力があり、人間としても社會的地位なり學殖なりで、儕輩を拔いてゐたから、比較的顏出しをして日の淺いに關はらず、重視されてゐたのは事實だつた。

だから當百氏隱退後の番傘にありては、故五葉君の君子的溫順さと、南北君をめぐる享樂的華かさとがいつも會内に流動してゐた、殊に事實上番傘の寵兒となり、鬪士ともなつてゐる水府、蚊象、絲天などが殆ど南北居に入り浸りとなつて、どこが自分の家庭やら何やら分らぬ程に親密の度を濃くしたものだ。實際、南北君の家へ行くと、一と頃は川柳家が二三人——多い時は十人近くもゴロ〳〵してゐて、飯を食つたり、酒をのんだり、無駄口を叩いたり、泊つていつたり、宛然八笑人のサジロー宅の觀があつたと思ふ。だから大阪、京都の川柳家で番傘に緣故のあるものは恐らく南北居の飯を食はないものはあるまい——と斷言しても敢て不當ではない。

斯うして南北居の華やかな生活環境に沒頭することによつて、番傘の空氣は享樂の亂舞——といふ言葉はいやだが——を演出することになつて、句風の色彩も從つて花柳氣分や南地情緒が濃厚になり洒落氣が橫溢したのだ。

特に、南北居へは松竹を媒體としての生活者が多く出入した。俳優、藝者、師匠は申すに及ばず南北君個人としての友人、又は、松竹關係の友人、弟子、等々が頻々に出入したのであるから、その間川柳も共に作れば、伴れ立つて共に飮みにも行くし、毎日毎夜の旺んな會合は行はれた。

地味だつた京町堀時代（時には市川新升へ贈りものを積んだり、各種の異つた催ふしものをしたことはあるが）に比較して、これは亦、到つて享樂萬能の歡喜時代だ。そこへ肝腎の水府、蚊象、絲天が未だ獨身時代と來てゐるから其の放縱も餘義ないことだつた。恐らく、五葉は此の期間に定めて若いものを嚙みしめてゐたであらうと想像するが、人氣の赴くところ、本能のもとめるところ、時代と環境の欲するところ、如何とも仕方がない。と言ふ私も時々顏を出して、この享樂味を追ふ一群と行を共にしたのであるから、あまり威張れた義理でもない。

番傘の會合で幹部が八ケ間しいと參會者に小言を聞いたのも此の時代であり、成駒家を動かす作者を覗きに來たのが川柳を作る素因となつた人のあるのも此の時代で、川柳會の歸りには必ず飮みに行くべくきまつてゐたのもこの時代で、川柳會とは華やかなものだと認識せしめたのもこの時代で、番傘の會合に多勢が參會する空氣を助長させたのもこの時代で、川柳家はごく道やと陰口をきかせたのもこの時代で、川柳に通と粋と意氣とが活躍たしのもこの時代で、よい作家の顏ならべかけたのも此の時代で、其他記念す

光耀抄

葭乃選

京都　ゆき子

胸毛などいぢつて留守を父の膝
平常着にお召など着て落魄れる
この邊に花壇が欲しい設計圖
ゴシップが二人をつなぐ糸になり
不自然な戀と睨んだ美粧院

大阪　房子

籤入りへ嬉しさが増す腕時計
行進曲父の機嫌のひざへ乘り
兒を背に輕くバケツの水をさげ
母の持病が氣になる雁の來る頃よ

姉といふ意識がおしめも替へてやり

大阪　機見女

飛び出して來た娘の無口今日も雨
感傷へ耳もかさずに急く朝や

七年を迎へて

端座した單衣羽織の父なりし

微笑

濕情主義の微笑と知りは知り

魚崎　吟女

編棒へ女中廢止論續くなり
止めかけて居たに煙草の御進物

べき幾多の話柄を作つたのも此の時代だつた。それは功罪相半し、讃褒褒貶が伴ふことは爭へないにしても、一つの華やかな玉屋町時代を現出したことは、番傘史上としても、大阪川柳史的管見の上にも、異彩を放つ一頁であらうと信ずる。勿論、これは多少共樂屋落氣分の濃厚さは認めるが、然し、事實上番傘を牛耳る人々が斯く多數毎夜の如く會合して川柳的（享樂生活としての）發展をなしつつあつたことは、延いてそれらの人々が活動する舞臺即ち川柳を中心としての席上に必然的反映を投するから、番傘自體の空氣も斯く華やかな色彩にいろどられることは、必至の成行であらう。

故に私は特に番傘の句風などを檢討する人々に對つて言ひたいのは、この前玉屋町時代の空氣を審にしない以上は、恐らく其の動向なり發展の經路は把握するに至難であらうことを切言して置きたい。

後玉屋町時代は南北君が京都下加茂に去つた後へ、水府君が移轉して來て以後の時代を指すので、番傘社の玉屋町進出は名實共に具體化した譯だ。然しこれは本稿に關係がないから一切を省略する。

叙上の如く、南北君自身は意識的に玉屋町時代を大阪川柳史上に貽した譯ではないが、結果として斯く一區劃を歴然と顯出してゐるのは否定することはできない。それだけ南北君の過去につくした番傘への功績は——假令それが功罪相半するにしても——蓋し

編んでゐる窓までとゞく葉鷄頭
大阪　貴志子

たばこもうやめるつもりで子を看とり
ビイタミンも知らず肥へてる長屋の子

いゝ年でふとん太鼓の汗となり
移り氣のまた飛石を掘らせてゐ
天下る嫁へ湯殿の模様がへ
奉天　松代

勳功を胸にレンズの前に立ち
就職の朝朗らかな母の顔
神戸　茂もよ

小遣をねだれば夫目をむきぬ
添乳する母がおさきへ夢の國
大阪　伊勢子

ひと眠りさせて下さい秋の虫
雨のジヤズ蛙の唄へにぎわしい
大阪　靜子

初孫を母は我子にしてしまひ
それほどでない女房を見せたがり
大阪　千榮子

見舞客ノックへ細い聲を聞き
買物に娘は母の先きを行き
大阪　公子

大阪になれてお經を忘れてゐ
二十五の秋よしみじみ手の淋し
大阪　茂代

鐘の音にあはしてすだく奈良の虫
大阪　正子

一頁もう一頁夜は更ける
螢ケ池　凡子

あきらめてゐると云ふのも口ばかし
金の奴隷の奴隷となつて御寮人
肩凝らす夫婦氣ばかり若うして
麻生　霞乃

巨大である、と同時に南北君の仕拂つた犧牲も可なり大きいと見做なさければならぬ。

斯く番傘にとつては當百五葉に匹儔すべき南北君であるから、事實番傘を去つて川柳界より隱退を聲明するのであれば、番傘としても、其の去るべき理由や動機は如何は別として、私心感情をサラリと捨てて功勞者南北君を笑つて見送るのが當然であり、且つ、この擧を番傘とか川柳雜誌とかの區別をたてず、川柳界の功勞者としての南北君として其隱退批露會を華々しく催ふすが宜い、と提言する路郎君の意圖には、衷心から贊意を表する。然し問題は前述せるが如く、番傘だけの隱退か否やに存する。且つ南北君の進退が一時的の感情問題であるならば、水府君も何を措いても其の諒解に努め、引留策を講ぢるであらうから、案外に話は好轉して融和するのかも知れない。又、兩者の昔日の情誼、關係などを知る私にあつては、さう落ちつく事を切願してまやない。

要は、路郎君の說くが如く、この問題を路傍の一人として聞きすてにするには、餘りに過去の交誼がものを言ふので、甚だ僭越だがちよつと一言老婆心を披したまでゝある。他意あるのではない。

因に、以前の私であれば直ちに飛んで行つて兩者の中に介在する感情問題（若しありとすれば……）を融和さすべく奔走するのだが目下は其の適役でないことを、ひどく遺憾に思つてゐる。これは遁辭でも何でもない。事實なのだ。（十月七日稿）

柳の絮

長野吉高

（一九）

貞子さんの書いた戯曲「ニロ」が、いよ〳〵木星座によつて脚光を浴びることに決定したのは十月の始めである。これまでにこぎつけるには、なみ大抵の苦勞ではない。

貞子さんが、やつとこの原稿を書きあげて雨軒居士に渡したのが六月の終りであつた。いつもの雨軒居士なら、ちびくれた筆でべた〳〵と朱線を入れながら、すぐに辛辣な批評をとばすのだが、何んと思つたかその時だけはたつた一言「これは暫く預つて置く」といつたまゝ到々のべ〳〵に八月過ぎまでなんとも言はなかつた。貞子さんは、無理な執筆がかなり體に障つたと見え、脫稿すると二週間ほど寢込んだが、全快してからも今迄のやうに後の原稿を書かうとはしなかつたこれ迄以上に作家修練に一層の努力をするか、またはこゝらで轉換するか、その懊惱のまゝであつたが爲めであらう。さりながら、これまでの忍苦は、必ずしも無駄ではなかつた筈である。貞子さん自身が知らぬ間に、その努力の實は次第に結ばれつゝあつたのだ。

戯曲「ニロ」を見てからの雨軒居士は、貞子さんには詳しい事を知らさず、八福君と屢々會見しては、いろ〳〵と合議をしてゐる。其のぐうたら評定の結果、貞子さんの爲めに遂に地獄から地上への鐵門を開くことに、意見の一致をみたのが九月の半ばである。雨軒居士はその時、今後に於ける貞子さんのことに就ては、八福君に何もかも一任する約束をして了つた。八福君が、自分の仕事まで投げすてゝ置いて、木星座に「ニロ」の上演交涉をしたのは、かうした事情があつたからである。

ところが、この上演交涉を受けた木星座では、贊否兩論に分れてひどくゴタついた。といふのは、もし「ニロ」を上演するとなると色々の意味に於て、かなり犧牲を拂はねばならない。單に演出部と脚本部との紛爭のみでなく、第一に木星座としては最も重大視すべき經濟問題が横つてゐる。それに

演出部が、この問題を後廻しにして、年頃の娘が家出したやうに大騒ぎをして作者問題をかつぎ出し遂に脚本部の激昂をかつたのは、何んと言つても拙かつた。同じ貧乏世帯の他の研究劇團では、木星座以上にやり算段がつかず、で上演は不可能と見ねばならない。といつて、興業劇場側に持込んだのでは、戯曲の性質上これ亦上演は甚だ困難である。木星座の事情は十分に承知はしてゐても、然しかうなるところの一座がまだしも、比較的上演の可能性があるので、これにたよるより他に術が無い。いらく八福君が劇界の先覺者でも知名な作家でも、劇場も劇團も持つてゐない限り、この上演自由行使權だけはどうにも手がつけられぬ。

木星座側としては、八福君の顔だけは潰されない立場にある。考へてみれば、むかつ腹を立てゝ借金取りに慳突を喰はすやうなわけにもゆかず、演出部も到々折れて、すべては藝術の爲めに、といふ藝術家良心によつてこの問題はかたづいたが、かく「ニロ」の上演決定までには、相當の曲折があつたのである。

雨軒居士は、この上演決定と同時に、こゝまでに到る八福君からの詳細な報告を、始めて貞子さんに知らした。貞子さんは其の時、何も言はないで、たゞ聲を上げて泣いたが無理もないことである。この事を知つて驚いたのは、小石川の母堂と正夫君とである。美事貞子さんに凱歌をあげられたわけだ。この向きでは、再び結婚の話なんか持出せないだらう。

貞子さんの作家的存在など、蕪の莖か大根の皮のやうに、ほとんど眼中に置いてゐなかつた妻君も雨軒居士から「これでどうやらテイ君を劇壇におくることが出來た。テイ君にはあゝした面倒な事情があるんだが、然しこれでわしも多少の責任を果したことになる」と言はれた時には、流石にどきつと胸を打たれたやうである。「大体お前なんかは金ピカ服の大官か、どこかの大會社の重役にでもなつて、自家用の自動車でも乘り廻すやうな連中を、無暗と偉い人物と定めてかゝつてゐるんだらう。これは餘程無教育な低俗なやからの考へることで、實に憐れ至極なもんだ。そも、學者とか藝術家とかいふ者に、尊敬を拂ふことを知らなかつたり、その生活に理解の無い者ほど困つた奴はない」雨軒居士は、貞子さんの事が出るたびに、この時とばかり自分の立場を妻君に吹きまくる。妻君は、今度だけは敗け色でグウの音も出さない。

戯曲「ニロ」は、古代エヂプトを背景にした三幕物の運命悲劇である。貞子さんがこの戯曲を書く爲めに、エヂプトに關する必要な文献を仔細に調べてゐることは何よりも驚嘆に價する。中でもドイツに於けるエヂプト古物學者であり、一面また小説家でもあつた。GEORG M. EBER³ のエヂプトに關する研究書を漁り、分けて一八七七年に始めて發表された小説 UARDA からは、プロットの暗示を大分に受けてゐる。これ等のエヂプト關係書は、ドイツ原本から重譯された英譯本と、一部のフランス譯とによつてゐるが、普通の者ならこれを讀みこなすだけでも相當骨を折るに違ひない。

エヂプトに關する雨軒居士の智識は稀薄である。そも「ニロ」とは、果して何を意味するものだらうか？

エヂプトに於けるメムフイスの金字塔とテーベの王墓とはすべてナイル河の西岸に建つてゐる。靈魂の再來を信じて、木乃伊の術を創めた古代エヂプト人が、その王の遺骸を葬るに、最も安全な場所として選んだのかも知れない。然し中世サラセンの侵入によつて地中海に巍然として聳える金字塔はまつさきに奪掠の標となり、墳墓と寶物とは無慘にもかすめ取られて了つたが、たゞテーベの王墓だけはこの危からのがれた。ナイルの上流はるかに退いてゐるが爲めである。ナイル河の東岸ラクソアから西に河を渡り、クルナーの村を過ぎると茫然とした沙漠の果に、砂岩の絕壁が延々としてつらなつてゐるが、これがナイル河の窮極でリビア大沙漠の起る所である。この砂岩に登つて見ると、其處には再び降るべき道が無い。たゞ茫漠とした大沙漠が横つてゐるだけだ。リビアからサハラへ、二千哩の砂の海が大西洋に續いてゐる。古代エヂプト人は、この魔の沙漠の彼方に死の國があると信じてゐた。故に、死者の冥土への旅を送るため、この絕壁の下にこの世とあの世との境界地に、王や王妃の柩を葬つたものである。古代エヂプト人は、ナイル河を神格化して崇拜してゐた。その流れが何處に始まり、どこにつきるかを知らなかつた。たゞこの河の水が、人と共に生存することだけは知つてゐた。そして、幸福も不幸も一切この河の默示によるものとして信じてゐた。

ローマのヴアチカン美術館に IL NILO と題した群像がある。波を線彫にした臺座の上に、左の肘をスフインクスの脊に置き、兩脚を長々とのばした一人の巨人が横つたその肩から腰、脚のあたりに十六人の子供が、或ひは巨人に抱きつき或ひはなつかしげに其の姿を仰ぎ見ては、嬉しさうに囁きあつてゐるのが其れだ。この巨人は卽ちナイル河の象徴で、子供達は五千年の昔から、この河の恵みを受けたエヂプト人の姿である。ナイル河はエヂプトに於ける一の謎であつた。南北に流るゝこと四千哩、この河をめぐつて三十の王朝が興亡してゐる。河が謎であつたが如く、人の運命も亦大きな謎であつた。

戯曲「ニロ」が、謎の水と人とを象徴した NILO の群像から、その題名をとつてゐることの說明は、これ以上の絮說を要しないであらう。貞子さんの綿密な頭腦の動きには、流石の雨軒居士驚かざるを得なかつたとみえて、その着想を葬りに讃めてゐる。

たとへば、フランスのフローベルが、新約聖書馬太傳第十四章の傳說から「エロデイアス」を書き、ワイルドが更にこれを脚色して「サロメ」を書いた如く、所謂物語の父ヘロドタズ王に嫁材したものは、餘りにも多く語られ過ぎてゐる。たまゝ〳〵エヂプトに關する物語はあるとしても、絕代の妖妃クレオパトラの史的ローマンス以外に何の見るべきものがあ

らう」貞子さんは「ニロ」に於て、エヂプト十九王朝のラメス二世を描き出し、その王宮をめぐつて醸しだされる一王妃の凄愴な私的悲劇をとり扱つてゐる。これは見やうによればエヂプト史上の英主として有名なラメス二世の裏面描寫とも言へる。勿論、貞子さんの構想になる點が多いが、最後の幕に於て豪莊な宮殿が次第に燒けてゆく、その間の登場者の心理描寫をした場面などは、かなり巧妙に出來てゐる。たゞそれは當時の一王妃の私的悲劇を中心にしてゐるとはいへ、西紀前一三五〇年頃の時代相を解剖してゐることは餘程注意せねばならない。恐らく貞子さんも、この點に最も苦心を拂つたに相違はない。

尤も戯曲としてこの「ニロ」は、仔細にみれば幾多の缺陷はある。これまで雨軒居士が、しば〳〵注意した如く事件の進行上に無用な台詞が冗漫であつたり、人物の出し入れが並列式だつたり、或ひは重要な事柄は同じ劇中で三度は言はせなければならぬ、とのイプセンの教へはよく守つてはゐるが然しその適用法を誤つたりしてゐる。第二幕目で、王妃が火中に入つて悲慘な死をとげるまで、かなり事件に起伏を見せて書いてはゐるが、その幕切れが下り調子になつてゐる。若し貞子さんが「ニロ」を三幕なり四幕なりに内容を盛つたとしたならば、明かにこの作は失敗である。何故なら、それは一層この作をだれ氣味にさすからである。其れを知つて二幕にまとめた貞子さんは、既に作家としての眼を具へ得たといつてもいゝ。とまれ、この戯曲が、木星座でどう演出されるか豫斷は許されないが、蓋しかなりな舞臺効果はあるだらう「ニロ」が謎の運命を含んでゐるが如く、作者貞子さんも亦大きな謎の運命をもつてゐる。運命を信じるといふ事は、運命を否定しそれに反抗することよりも、遙かにむつかしいものである。雨軒居士は、一葉の古びた寫眞を持つてゐる。友禪模様の振袖を着て、裸人形を抱いた四、五才の童女が、座敷の椽の座蒲團の上でニコ〳〵笑つてゐるところを撮つてゐるが、この童女こそ幼時の貞子さんである。回顧すれば二十年前、當時まだ一寒の貧乏書生だつた雨軒居士が、妻君の紅化粧はなやかなりし娘時代に「これがあたくしの妹でございます」とて貰つたのがこの寫眞である。その時、この寫眞から構想を練り「童女」といふ鎌倉末期を背景にした物語を書く心算で、妻君を下宿に呼んで女の着物の説明から髪の梳き方、帶の結びかたやらすべて女に關する一通りの説明をやつて貰つて、さて書きあげてはみたものゝ、これは美事に不出來だつたので、到々發表せずに終つた事がある。

事は別だが、高山樗牛の書いた「瀧口入道」は、樗牛がまだ書生つぽ時代に、下宿の二階でつちあげたものである。仙臺生れの彼は關西方面、ことに京都の地理に暗かつたのであの小説を書く時には、一枚の地圖をひろげて、これで京都の地形やその他の色々と必要な説明を友人達にやつて貰つたものだ。中に現在の海風博士等がゐる。だから「瀧口入道」は、別な意味からみて一の合作とも言へる。當時の××新聞社が樗牛に、「時計をやらうか金をやらうか」と言ふと一時計より金の方をくれ」とて賞金五十圓貰つたものだ。花より團子といふことがある。樗牛でなくとも金の方が欲しい連中が多からう。

烏が鴉の眞似をすると溺れる。水面に浮ぶ月を狙ふ猿と同様、出來ない事は望むだけ猿骨折りだ。雨軒居士は、樗牛の向ふを張る心算で「童女」を書いたのはいゝが、筈にも棒にもかゝらぬ愚作をでつち上げたに過ぎない。それどころか事の眞相を探知した飲み助連が下宿に押しかけ、ワイ〳〵騒ぐので、到々着物を質に入れてその金で一杯飲まして落着さした程である。これが、餘り名譽にもならない雨軒居士の「童女」一事件である。

要するに、雨軒居士と貞子さんとは、かうした因果關係にあるが、この貞子さんが後年に於て、雨軒居士の示教と指導とにより「ニロ」を發表して、ともかくも女流作家としての記念すべき第一歩を劇壇にふみ出したことは、當人もさることながら、雨軒居士としては實に、感慨無量たるものがあらねばならぬ筈である。

——それは或日。

「ニロ」の上演決定があつてから間も無い晴れた日の午後のこと。知人のアトリエからの歸りだといふミミ子クンが、珍らしく和服姿で、貞子さんをひよつくり訪ねて來た。

貞子さんは割烹着をつけ、手拭で頭をすつぽりと包み後で無造作にギユッとしめ、炊事場でゴン〳〵釜を磨いてゐたが

「ま、やるわね。さうしてお釜でも磨いてりや、女流作家も天下太平よ。」

と、ミミ子クンは、勝手元を一寸のぞくとかう貞子さんに浴びせかけて置いて、いつものやうに別に部屋へ通らうとはせず、貞子さんが出て來ると、玄關の上り口に腰を下し、間斷なくあれこれと漫談を放らしてはきやつ〳〵と嬌聲をあげる

「あのヘボ詩人がね、今度のあんたの事をあつちこつちへ行つてはふれ廻つてるのよ。チンドン屋だと思へば腹の立てやうもないけど——。」

と、どうやら眞面目な口調になつたミミ子クン

「あんたは宿願成就ね。それにつけてもつまんないのはあたしよ。」

ミミ子クンは妙に張りの無い聲で

「こゝで、あんたに繪の話をしたつて至方がないけど、およそ今の畫家ほど宙ぶらりなものはないと思ふわ。あたし、別に氣炯をあげるのではないけど、近頃の展覽會の出品畫なんて、いやに解り難い變てこなものばかりなのよ。時代が早すぎたといふことはあつても何時の時代になつても終に解らなかつた、といふやうな名作なんて無いわね。これは小說でもあんた達が書く戲曲でも同じことだと思ふわ。今日の畫家が何故そんな難解なものを描くかといふと、そこには相當の理由があるんだけど——とにかく厭やんなつちやうわ。」

と、溜息ついて

「ある批評家がね、現在油繪を買ふ需要者の經濟能力からみて、それに應ずる畫家の數は五十人か六十人あれば十分だらう、なんて言つてるけど、これは實際なのよ。畫家が無暗に多過ぎるのは、生活的にとも倒れになるばかりだもの

貞子さんは笑ひながら

「でも、さういふ見方からすれば、それは文壇にだつて言へると思ふわ。やたらに作家が出てくる——あたしなんかゞそれで餘り人のことなんか言へないけど——それがいゝ事か悪いことかあたしには何んとも言へないのよ。少し範圍を限つて

劇壇といふ方面からみても、有名無名の作家が隨分ゐるわ」

「だつて、たゞお道樂ばかりで小說や戯曲を書いてる人は無いでせう。若しあるとしても其んな人は到底問題にはならないわよ。ところがね、劇壇にはこの素人といふのが割合に多くて職業的な劇家にある脅威を與へることがあるの。その理由は簡單には言へないけどね。入選したぐらゐで、やたら思ひ上つたりするやうな生半可な劇家が濫造されるのはあまりいゝ事ぢやないと思ふわ。藝術的興奮もいゝけど、そしてドン〳〵劇家の出來るのもいゝとして、でもかういふ興奮と命がけの仕事を今日の日本の劇家そのものに持つのは、あまり犧牲が大き過ぎるやうな氣がしてならないのよ。つまり、今の大衆といふものゝ腦味噌でも新らしくかへない限り、劇家ばかりでなく總べての藝術家といふものは、よくは理解されないと思ふわ。これは愚痴つてものか知ら？古い言草だけど、人間の仕事つて馬鹿らしいものね。求めて〳〵得るものは、たつた一つの空虛だけよ。」

「あんたも、この頃は變つたわね。」

と、しみ〴〵とした口調で貞子さんは言ふ。

「男なら、安月給取りで凡々におさまるし、そのお內儀さんにでもなつて、お釜でも磨いてりや命がけの興奮も犧牲もへつたくれもありやしないわ。男は男で、女は女で——劇を描いたりすることは、子供つぽい婦人解放運動や、社會運動なんかするよりは、でも惡くないわよ」

ミミ子クンは、やけに大聲で笑ふ。貞子さんはニコリともせず重々しい口調で

「あんたの氣持を知つてるのは、おそらくあたし一人でせう今日の劇壇は、あんたにいゝ教訓を與へてくれたのよ。あたし、つくづく思ふわ、それは女性が單に男性との外觀的平等のみを望む結論は、女性の本質が解放の必要を自覺しない事になりはしないかつてことなの。男性を不斷の壓迫者とみなし、社會にたいしてすべての女性を新らしい關係に置かうとする一切の解放運動なんか無意義なやうな氣がするわね。婦人解放運動の原型は、遠い大古にも存在してるし、そしてこの騒擾は時代によつてその程度を異にしても、常に女性と共に存在して繰返されてゐるのよ。だけど、解放に對する眞の女性的欲求つてものが誤つてゐる爲め、多くは無意味に終つてゐるものね。ルネッサンスの婦人運動史とこの完全な消滅とは、女權擁護者に對する一つのいゝ教訓よ。ほんたうの智的自由は、騒然とした大衆の力のみでは獲得出來ないわね。それは、何よりも先づあたし達個人の戰ひによらねばならないと思ふのよ。解放の最大の敵は男性でも社會でもなく、それは實に女性自らね。だからあたしは、將來文藝で身を立てるにしても、社會が無理解であればあるだけ、女としての守るべき本性を一層ハッキリさしてゆきたいと思つてるのよ。男性との對等な權利や地位——そんなものは、男性を基準にしての憐れな慾望に過ぎないんだから、あたしはさうした考へを持つ女性を心から輕蔑してやるわ」

「同感！キミイ！かめの子タワシで誰が白粉をつけやうと、七面鳥に乘つて天上しやうと、ちよいと、それより番傘でも被つてゐる方がよつぽどさつぱりするわね。」

と、朗かに笑つたミミ子クンは、すつと立上つたかと思ふとその癖の口笛をピイツと吹く。（つゞく）

損料

朝田新水選

損料を値切るに妻の智恵を借り　玉兒
叱るだけ叱つて損料拂ふてやり　華水
損料の布團の裾が寒いなり　平八郎
損料の事を問借の人に聞き　佐一郎
結界も昔のまゝの損料屋　方眠
香水を振つて損料のかざをけし　南柳
損料をとつてやつぱり氣がすゝ　玄坊
損料の着物は山でたゝむなり　四五麿
損料を出してラヂオを破約する　水車
損料と思はれてよい兄の服　南葉
損料の椅子へ來賓並んで居　紅
目に見えぬ損料高いものにつき　紫雲
謝罪した上に損料とられて來　沒食子
損料で借りた物まで質に入れ　一柳
損料で義理を欠さぬ律義者　葉光
損料の衣裝はどれも袖だゝみ　里十九
損料を着てから妻の病ひにて　義郎
いつの間か親しくなつた損料屋　幸村

損料のたんびに高いなと思ひ　白峯
損料の借着仲人らしうなり　巴調
損料を氣にして空の色を見る　紫石
損料のいる紋附の裾さばき　小松園
損料を取る氣の毒をたしなめる　松之助
損料は裏と表を見せて貸し　掉二
はげてゐる熨斗で損料持つてくる　麗光
損料の蒲團と知らぬ高鼾　慈雨來
賞められてフト損料を思ひ出し　鴉天
損料へ又算盤をはじく音　白龍
損料へひつそりかんと主人居る　鐵吉
損料の晴衣で歸るウエトレス　笛秀
損料を出した車の使ひ樣　英子
損料が笑ひ話に新家庭　富美三
頭掻く癖へ損料着る日が來　春秋
損料を着て祝盃へ落ちつかず　八歩
損料の要るモーニングとは見え　沐天
損料の衣裳隣席氣にしてゐ　呑湖

是非もなき事に損料惜まれる　迷兆
損料の工面もつかず痩せてゐる　虎徹
損料の取れぬ友達借りに來る　白菊
損料へ不親切なる目が光る　青兒
損料の嵩むは知れど買へぬなり　鯉友
儲かつた事に損料見得をきり　正路
損料を氣にして戀も出來ぬ妓よ　多郎
高砂やともかく濟んだ借衣裳　竹雅
損料の他に辨償もさせられる　白丘土
損料に金紗とやらの肌さはり　暢山
損料のいる變裝は靜かなり　耕民
損料着借りに行くのへ又揉める　阿鴻
損料の事で見知らぬ人が來る　虹一
損料の高いもなんの踊り好き　禿山
損料を出すに財布の底が見え　孤鶴
何時の間か損料までも使ひ込み　同
損料へ妻を走らすいゝ話　菊路
損料へわが定紋が見當らず　同
損料を出すとすげない口をきゝ　明珠
損料と見せぬ苦心に流す汗　同

佳句

損料の代り剃刀研いてやり　鯉友
もう元が返つてそうな貸衣裳　水車
損料と云へば笑ふて終ふなり　山月

損料屋手荒な人へ改める明珠
損料の膝を忘れて亭主醉ひ勝二
損料で肩身の狭い椅子に着き菊路
損料を支拂ふ父の指の節白丘土

食堂

豆秋選

◇

食堂へ一番先に子が這入り義郎
食堂に無産闘士も涼しく居阿鴻
食堂で女中汁粉へお辭儀する紅軸
食堂へ這入る暴口押へて見佐一郎
食堂車花瓶がゆれて驛へつき麗光
銀ブラはつい食堂の客となり柳夢
食堂の鏡を横に坐を構へ白花子
食堂の惡口社長の耳に入り一柳
食堂に電燈淋しく燈つて居紫雲
三越の食堂も見た國の母茂代
食堂のメニユー裏から表まで南葉
食堂を出たが夕立止んで居ず灯羊子
食堂の庭掃く男無言なり禿山
寬ろいで食堂車の窓に倚り曉鳴子
食堂の時計と合せて箸を取り葉光
食堂の窓からあれが天王寺まさる

氣にかゝる損料へチップ少なすぎ新水

選後…類句が多かつた爲め多數の全沒者を出したことをお詫び致します。

須崎豆秋
西村明珠 共選

食堂の中の一人は食べつゞけ掉二
見なれたるメニユーなれども眼を通し松之助
食堂はせまく正午の笛が鳴る白峯
食堂に來るとうつむく彼の女華水
書間からヂョッキをあけるゝ話水車
ビフテキを敵のやうに切つてゐる正路
食堂車外の景色へ箸を取り青柿
食堂で命じて置いてメニユーを見鯉友
食堂のビールへタ燒映えてゐる紫石
食堂で氣焰をあげる勞働者巴調
食堂できちんと坐る姉の子玉兒
食堂で動物性に歸つて居青兒
食堂へ女三人おとなしい靜太
商談もありり食堂へさそうて居方眠
味よりも量と値で行く世想なり曲豆
食堂の噂へぬつと現れる勝二
妻は子と一人前で濟ませとく慈雨來
何か有るらしい食堂の萬國旗柳路
秋たけて淋しき雨の食堂車白丘土
食堂に友達がゐる女學生今雨
食堂車景色へホーク宙にゐる西英子
献立を見て女連れ手間が取れ四五磨
食堂があてゞ子供らついてくる菊路
食堂へ後さきに來て社の小言竹雅
食堂の鏡に寫つる眞帆片帆笛秀
食堂の混んで坊やの氣が向かず鐵吉
意見の相違食堂へまで續き鴉天
食堂車松の青さに眠くなり八歩
食堂で專務の顔につきあたり沐天
食堂の窓から見てる基礎工事沒食子
食堂の便所で頭分けて來る同

三越にて

は女ばかりに見へるなり平八郎
食堂車出れば兩側寢てるなり同
カッ食つて來て食堂を非難する明珠
食ひ足らぬまゝ食堂を出てしまひ同
食堂へひざ固うしてホネムーン迷兆
食堂のはなし重役から離れ同
(佳)食堂の一とこ煙草のいにほひ同
(同)食堂も紫丸と共に搖れ山月

(同)食堂の一輪挿へ旅の酒　春秋
(同)明々と食堂丈けの灯がとも、　小松園
(同)勞働者カレーを食べる友もち　幸村
(同)食堂の椅子が冷めたい母でと　秋生
(同)食堂で水はなか〳〵持つて來ず　富美三
(同)食堂をみれば日本も飢えてゐる　天痴人
(同)奥様は食堂へ來て氣が疲れ　水車
(同)ボーナスの夜を食堂の父でる　黑天子
(同)母の手が膝に乘つてる和食堂　華水

◇　明　珠　選

食堂の窓から見てる基礎工事　汝食子
(佳)食堂で會へば儲けを尋ねられ　秋生
食堂の正午ベルベルベルの音　富美三
ソーダ水隣にモボとモガが居る　しとし
食堂へ意氣投合の二人也　孝男
買ふものはなく喰に行く百貨店　南葉
何か有るらしい食堂萬國旗　柳路
滿蒙の話がはづむ食堂車同　
食堂へ二設目は女同志で來今雨
食堂の隅で醉ふてる國訛八歩
食堂の隅に氣まづい舌づゝみ　竹雅
懷はさむし食堂の賑やかさ　四五麿

秋たけて淋しき雨の食堂車　白丘土
食堂で隣にすまぬものをとり同　
食堂の味を繼母喜ばす　勝二
食堂の二人なつかし土佐訛　錢吉
妻楊子今食堂を出た姿方　眠
食ひ足つた顏で食堂出て淋し　靜太
食堂へ行くに賑ふエレベーター　玉兒
食堂で親子親子を注文し　鯉友
(佳)食堂がせめて樂しい女工達　青柿
食堂はせまく正午の笛がなる　白峯
食堂の窓からあれが天王寺　まさる
實る秋コーヒを啜る食堂車　葉光
食堂で仲居の世辭が恐くなり　禿山
食堂を出たが夕立やんでゐず　灯羊子
勞働者カレーを喰べる友をつれ　幸村
三越の食堂も見た國の母　茂代
食堂がカフエーとなり酒場となり　紫雲
食堂車花瓶がゆれて驛へ着き　麗光
食堂を出てから青い空を見る　佐一郎
食堂車フオークの先に富士が見え　曉童
大衆食堂と書いて三人客の居る　兵四郎

食堂も又々もめる子澤山　星
泣止んだ子を食堂へ連れて來る　虹一
トンネルを出てから入る食堂車　青豐
食堂であやまつてるブローカー　春秋
食堂へ今日一日を精算し　雷兒
食堂に樂しみがある事務疲れ　虎徹
食堂へ今日幸な話來る　迷兆
(佳)食堂で意見が合ふたことこれ　水車
見なれたるメニューなれども眼を通し　松之助
食堂から天守が見えて話あり　義郎
食堂車出れば兩側寢てるなり　平八樓
食堂へ引張り込んで久し振　山月
默つてりやボーイ定食持つて來る　鴉天
食堂で飮んでしまつた今日の汗　巴調
食堂の鏡を横に座を構へ　白花子
食堂で野心がつのる月給日　天痴人
赫々と食堂丈けの灯がともり　小松園
母の手が膝に乘つてる和食堂　華水
食堂で見る人々の若いこと　菊路
給料は明日食堂の請求書　紅

西之町 MEMO

綠雨

▼奥野秃山君は社友として入社と同時に萩の茶屋支部を新設されました、今後の活躍を祈ります。

▼主幹路郎先生は青田代議士、藤本卯之助君（本社賛助員）等と十月十五日に和歌山市公會堂で開催された立憲政友會の近畿大會へ出席されました。

▼同人松盛琴人君は十月二日有馬溫泉に行かれて左の句を寄せられました「藝者など有馬のお湯が利きすぎる」

▼同人庄萬よし君は十月十三日東上され九段から神宮外苑を散歩して上京した氣分を味つたと言つて來ました。

▼本社客員大島濤明君は九月十八日記念すべき滿洲事變の一周年に奉天へ行かれて左の句を寄せられました「省城に新五色旗と日章旗」

▼社友尼絲之助君は（簸川支部幹事）十月四日夜關西方面旅行のため鄉里を出發途中松江驛で天痴人、柳人の兩君に見送られ、京都、伊勢、奈良を見物されて八日午後一時半大軌上六終點へ來るとの知らせに鄉里を同じくする鶴峰君が迎えて路郎先生の宅まで案内されました。當夜本社の句會に出席散會後綠之助君を圍んで南地の大市で小宴を催しました。出席者は路郎先生、町二、杏三、山雨樓、艸樂、新水、かほる、豆秋水車、鶴峰、京都から出席した司郎君と私

翌九日鶴峰君の同伴で拙宅へ立寄られ、拙宅で一泊した司郎君と四人連で四天王寺を參拜大阪城で待合せを約してゐた町二君を加へ天守閣から中之島附近心齋橋筋、道頓堀、千日前、新世界、天王寺公園方面を巡り鶴峰居で二泊十日朝、鶴峰君二人で見送り途中神戸明石などへ下車されて歸鄉されました。

▼社友大西八步君は商用で北陸山陰へと出張ばかりしてゐるので社友會の如きも十月四日に石見から送つて來られました。いづれ旅の句が出來ることでせう。

▼永らく螢ヶ池支部幹事として御盡力されました龜井愚龍君が今回都合より新進の石森靜太君と交替されましたが愚龍君は幹事を退かれたが從來より一層盡力されることになつてゐます。

▼螢ヶ池支部では久し振りで句會を十月九日に催されました、當日本社から鮎美君が出席して選句の批評と有意義な話をされましたので多數の出席者が喜んで來られました。

▼同人伊藤愚陀君が病臥されてゐられます一日も早く全快されん事を祈ります。

▼社友楊井二南君の令閨はその後經過悪く入院されてゐられるそうです、一日も早く全快を祈ります。

▼塚崎松郎君は十月十四日大阪市電宇和島橋附近で自動車と電車の事故で負傷されたさうです一日も早く全快を祈ります。

▼平野瓢々君は九月中旬永眠されましたさうです、哀悼の意を表します。

▼奉天川柳會から時局一周年川柳會の寄せ書をうけました。青龍刀、蓮樂、啞佛、六齋不朽、星明、白洋、新朗、福來、半生棒、若八、青蛙、木耳、筑水その他の諸君署名がありました。

▼高峰柳兒君から萬柳會創立の寄書をうけました。柳兒、一艮久、有爲郎、李一、多佳夫、風亭、雀亭、蓉峰君その他の諸君の署名がありました。

▼奉天から十月四日「若蛙さんを迎えて」と寄せ書をうけました。本日大老若蛙氏を迎へ川柳の難有味を知りうれしく呑む（星明）奉天の柳人は必ずしもヒマでないが朗らか以上であり得る（青龍刀）外連樂、木耳。

▼高知から十月十六日寄せ書をうけました濁水、東洋鬼、紋太、紫白、紫浜、春風、花舟、青果、一狂、柳風、浮城

▼番傘川柳社は大阪市南區心齋橋筋三丁目をぐらやビルへ移轉されました。

▼「川柳はりこ」京都市東大路二條上る、はりこ吟社から創刊號を發行されました。

▼本號發表の一路集「闇」大島濤明選が編輯までに着かなかつたので十二月號に發表することに致しました。

▼川柳同舟會ら昭和自選「川柳集」第二輯が發行されました。

▼本號の編輯は路郎先生、山雨樓、杏三、鶴峰、機見女、の諸君と私とで本社事務所で致しました。

飛燕往來……

私信のことですから公開を憚るやうなところは前略、中略、下略、又は××の伏せ字にしました、編輯係を云ふ

▼**大谷五花村氏**（福島縣白河）　啓久しく御無沙汰仕候御戀りも無之候や、秋の白河、今年雨許り多くて閉口に候 日本一を自稱する白河馬市も終りを告げ候 今回こんな繪葉書を八枚一組として賣り出し候 地方印刷でインキが惡るくて困りものに候 遙かに先生の御健康を祈り居り候早々（路郎宛）

▼**川上三太郎氏**（東京）　福田樣長文のお手紙有難う、早速御返事致す筈の處、仕事を片づけてゆつくり書かうと思つて居ましたがあとから〳〵と 新年號の仕事が山積し月末にでもならなければそんなヒマがないやうなので それでは餘りに失禮と思ひ取あへず十分ばかりの中にこれを書きます、從つて亂筆誤字雜談的なのをお許し下さい。

前田君の事はさて置き、小生へ酒に對する御叱聲は胸を刺されました、自分ではさうでない心算でも第三者に主義主張が稀薄になりはすまいかと懸念されるだけでも 大なる罪であり慚愧の至りであります、苟くも事を爲す者先づ自らを持する事 固くなければなりません深く恥ぢます、さうして今後充分なる戒心と自省とを以て臨みます、有難う御座います（中略）

反パクしないのはそれが 出來ないのではなく、する氣が起らないのです、そのヒマがあつたら「川柳雜誌」へ雜文でも書きます、僕は麻生君に「麻生君が書けない時は僕に手紙を呉れ、さうしたら何か書く」と約束があるのです、これは餘談に入りますが萬一小生の雜文御用がありましたら 御遠慮なく御申越し下さい。

さて目下の小生は東京の金川柳家を 相手にしない事に決めて居るのです ありますが僕の知己は東京にはありません、却つて大阪の麻生君とあなた方、たまむしの連中、白河の五花村、函館の三休、青森の不凍人、九州の來人なぞにあります、僕はそれで好いと思つて居ます僕は將來共にもう 東京の他の川柳の雜誌には斷然書かない事にしてあります。

前田君に對する小生の反パク、大兄が一人お讀みになるのなら寸暇を得次第書きます、但し川柳の社會進出に關し他の全雜誌が悉く反對説を書いた時 小生は麻生君と共に敢然と立つだけの自信と勇氣は持つて居ります、喧嘩をして居る暇に 他を説くしこれが現在の僕です、時間が來ました、又書きます 粗雜な御ゝ事で申譯ありません（山雨樓宛）

▼**食滿南北氏**（大阪）　大變御無沙汰してゐます、毎度川柳雜誌の御寄贈に預かつて恐縮してゐます先頃氣がついて 本社の方へ御遠慮の旨をおこたへしましたが 十月號を拜見してあなたの「南北氏隱退？」の御原稿に對してかう申上げたいと存じます 私が番傘を脫退したのではありません 新らしくなつて行く番傘に奮い 私がふるい落されたのです 洒落ではありません 今の所は番傘の人達は私の趣味から私の道樂から 私のこのみから番傘をグン〳〵引放して行きます 私は世の中に一番番傘が私のやうな 低徊趣味の男にヒツタリ來てゐたので今日まで 番傘にセキを置いてゐたので 水府君との間に短册の値段の問題なんかあつたのではありません 社會人であることを認められぬからのヲヤクでもありません私なんか 番傘にゐてやつては今日の番傘は困りませう「あらゝ邪魔になるオツサンやな」と恐らく云はれてゐる事でせうと察して番傘の爲にやめたので つまり今日の戰場へ胴丸なんか 着込んでゞゝり出たら恐らくすぐ討死する事でせう 私はデッカンショの中でも一人 清元をうなつてもゐられますまいつまり世の中が 私を置いてきぼりにしてしまふたので 隱退の脫退の意見の相違のとそんなカシコイ 事は云ふてゐられません 貴誌などを拜見すると私が嗤はれてゐるやうに思はれて 氣がさすのですとう〳〵番傘にまで嗤はれてしまひました それでも勝手に柳だるといふのはやつてます 私は句の上に於ては同氏と相容れぬ 點の多くをもつてゐるなんか おつしやらないで遊びに來て下さい 今日の川柳からふるい落されても私の川柳はある筈です どうぞよろしく

御令閨によろしく大分長いこと　お目にかゝりません喫茶店をおはじめになつてゐられるさうですが一度よせていたゞきたいと思ひますコーヒ位は非現代人の　私にものめない事はありませんから（路郎宛）

▼**廣江天痴人君**（松江）　廉生先生膝下、旺んなる秋となりました。御健勝ですか私は「公務」多忙でしたので　少し體を弱らしましたが意氣は旺盛です。四日夜柳人君と二人で松江驛に綠之助氏の上阪を見送りました。私の如きプロ農民は氏の旅行を羨しがるだけです。（中略）いろ〳〵「公務」多端の爲川柳も思はしく作れず遺憾でした。川柳雜誌十月號は意外の好評で七册賣れました。

柳人、法泉子、祥月、墓秋、眞吉、廣葉、あらたの諸氏が買つてくれたのです。和田あらた氏が十月から誌友として　參加してくれることになり今日午前中半年分誌代を　振替で發送しました。松江支部も柳人君の　孤軍奮闘により涙ぐましい歩みをつゞけてをります。都之介、墓秋の二君も少しづゝ　手傳つてくれることになりました。××君は傳統にゆく傾向があります。十一月一日には　少數でも意義ある記念川柳會を催したく思ひます。十日夜にその相談をかれて十月例會をやります。記念句も近く清記の上　お送りいたしますからよろしくお願ひいたします。

短册の方もお手數乍らお願ひ申上ます。皆樣によろしく御傳へ願上ます。一九三二年一〇月七日（路郎宛）

▼**岩崎柳路君**（樂天）　前略御免被下度候陳者小生儀又々表記へ轉居仕り候間　御承知被下度候　目下支那語研究中にて今後の異動先は長春へと參る豫定に御座候へ共　本年中は當地に滯在の積りに　御座候御無沙汰のよしの奥樣へ　何卒宜敷御鶴聲被下度候當地も追々と寒く相成り昨今街路樹は皆枯落ち　〇度以下のシーズンも　近く思ひやられ居候御大切を祈り居候（路郎宛）

▼**富士野鞍馬氏**（東京）　川柳雜誌に路郎氏の句が見えぬのが淋しい。淋しいばかりでない雜誌の價値にも影響がありはせぬかと心配する。

川柳雜誌が來ると　一番に路郎氏の句を見るといふことは讀者の誰もがさうだらうと思ふ若しそれがなかつたら　一種の失望を感じるといふ事になるであらう。

主幹が句の發表を意るといふ事は、其雜誌の興廢に關係するものだともいへる、恐らく其雜誌の讀者の大部分は、其主幹の句調主義に好意を持つてゐるものだと思ふ。

つとめて路郎氏の句を見せて頂きたい。（豫爾宛）

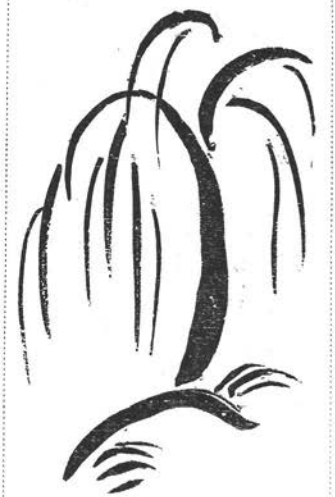
▼**長野吉高氏**（道後）　御たより拜誦、原稿は御受取り下すつたとのこと、安心しました。何時もおくらしてすみません。仁兄御病氣、御子さんたち共御よろしい御樣子、御祝ひ申します。レコードと言へば、私の近所は毎日同じのを鳴らす人があり、これには參つてゐます。おかげで唄の文句までおぼえさせられました。あの小唄とかいふものはいけませんね女の兒などがこましやくれて　唄つてゐるのを見ると御世辭にも可愛いとは言へません。小唄作者がいけないんですよ。二日程かゝつて今日やつと三十枚近い　原稿を書き上げました。毎月高い雜誌を惠贈して貰ふばかりで何も書かず、おまけにろく〳〵返事も出さぬ横着ぶりに、いさゝか氣がとがめてそれで思ひついて書いたのです。おかげで夜更したので風邪を引くやら腰が　痛むやらで大弱りです。仁兄に先手を打たれましたが、貧乏の方は御同列、いや私の方は當分どころの騒ぎではありませぬ。御買込み新譜レコードで御店御繁昌の節は令閨にはご內密で少々　御融通を願ひます、十五日（路郎宛）

▲**三好正明氏**（美保關のエビス館にて）　關の五本松をたづねて當地に參り候　昨夜當地の藝妓の五本松を聞き候　哀調切々たるものあり旅愁を感じ候旅館の椽より見ゆる　大山の威容波靜かなる　海に浮ぶ眞帆片帆浮世の苦勞を忘れしむるに充分に御座候　眺望絕佳の地一度は遊びに來る値打有之候（路郎宛）

▲**日野華水君**（神戸）　前略新聞紙上にて御近火の由承知、さぞ御驚きの事と存じます、皆々樣如何ですか御伺ひ致します、先日は突然參上致し失禮致しました　何づれ又その內に御面會致しますし右先づは御見舞まで　匆々（路郎宛）

各地柳壇

＝いのちある句を創れ＝



本社十月句會

十月八日夜　於ちとせ倶樂部

種々の故障から續いて二三回本句會の席上にお姿を見せられなかつた路郎主幹がやおら立上がつて、一日の勤勞で可成疲れて居る皆んなの頭に努力なしに消化の出來得るように例のユモアーに滿ちた而も滋味たつぷりの縱橫自在な漫談をものせられた事は、折柄の小雨を冒して集つた柳人の熱心に報いるに充分である事を思はせた。

猶遙ろ〳〵島根から見えた簸川支部の尼綠之助君が披講に先立つて言葉少くなに、皆に會ふ事の出來た喜びと兼題の選をする光榮を語られて一同に深い感銘を與へられた。

（參會者）

鶴峰、夕鐘、豆秋、えいを、馬左夫、葉平、艸樂、里十九、町二、綠之助、松之助、華水

春秋、かほる、鮎美、卜居、方眠、閑子、汀華、角丸、白峯、默平、勝二、小柳子、麗光、司郎、紫石、山抱子、明暗子、機見女、南面子、岩石、雅祐、掉二、いわを、青兒、夢裡、彩秋、山雨樓、一久、素月、あや美、杏三、水車、小辰、才見樓、綠雨、みつる、

席題　信用　互選

信用も何んにもいらぬ若夫婦　岩石
だまつてる方が信用されてゐる　素月
信用をされて淋しく一人ゐる　白峯
信用をされて子供を委されるいわを
御無沙汰の詫から書いて信じさせえいを
金借りて吾が信用も無駄ならず　山抱子
信用をされてだん〳〵痩せてくる　小柳子
信用と金の工面が別になり　角丸
信用も大事儲けはなほ大事　勝二
信用をされてすまない惡奸計　綠之助
信用へいつそと思ふ前科者　春秋
信用をされてこちとら困るなり　紫石
信用をしてもやつぱり判をとり　掉二
信用へリンゴの皮が續くなり　かほる
子を抱いて信用されてゐる日向　鮎美
日本人信用するとのむ話　同
信用があつて臭れる母でない　艸樂
信用を女はつらく逆り出し　同
信用を賣つてる店のかびくさし　雅幽
高い家賃拂ふて信用されてゐる　同
傘一本の信用も出來ない事が知れ　路郎
呑まされて一寸留守番頼まれる　同

席題　自轉車　艸樂選

急用へ自轉車一寸かりられる　方眠
お寺ハンが自轉車でくる　葉平
言解に小僧自轉車押して去に　汀華
此の年で自轉車なんかに乘れるかい　里十九
自轉車で輕くハモニカ吹いて過ぎ　いわを
廣つぱの香具師に自轉車ほつとかれ　紫石
自轉車が急に止つた人だかり　華水
自轉車の口笛に秋晴れの風がある　町二
自轉車の先生一齊に禮を受け　綠之助
交叉點自轉車降りて恐れ入り　角丸
自轉車の前へ主人の子を乘せて　かほる
自轉車の灯がゆれてゐる急な坂　華水
自轉車で町から町へ紙芝居　閑子
自轉車で來る吳服屋は月賦にし　鶴峯
自轉車の流れに暮れる堺筋　素月
自轉車をよけて電車に轢かれかけ　杏三
自轉車へ片手を離す人通り　默平
自轉車の小僧軍歌でよく走り　みつる
自轉車の上で小唄を練習し　同

自轉車の背に貰はれてゆく仔犬　町二
自轉車で若き産婆歸りゆき　同
すれ越して覗いて行つた自轉車　青兒
出前持ち曲藝じみて乘つて來る　同
(佳)自轉車に乘れば小唄になる若さ　掉二
(同)國道を折れて自轉車ほつとする　勝二
(同)自轉車を入れてひまごる話が出　機見女
(同)自轉車をすてゝ青葉にれこんびぬ　鮎美
(同)つゝぬけに自轉車からの御法文　鮎美
(軸)人込みの自轉車人生もかくぞある　艸樂

席題　新聞　華水選

新聞をたゝんだまゝの朝を出る　司郎
ポケットの新聞煙草ついて出る　掉二
いつ見ても社長新聞だけ見てる　汀華
新聞の半額券で給仕行き　春秋
寢ころんで新聞よんで娘なり　松之助
獨立になつて相場の記事を見る　山抱子
新聞の切抜きちつとも讀まぬなり　杏三
臺所へ新聞の記事派手すぎる　山雨樓
飛行機が飛んでも我社なり　路郎
新聞を見ながら妻の愚痴を聞く　岩石
書置が出て新聞の記事になり　同
〇〇の記事〇〇とうなづかれ　彩水
新聞を電話室まで持つて行き　同
新聞に息子の書いた事が出る　同
新聞がもう讀める程なほりかけ　葉平
心つめたく計を知る新聞　同
ギヤング、情死、ルンペン、新聞は哀し　二
吹雪少し付きし新聞拾ふ朝　町
新聞を子が持つてくる朝の風　同
新聞へ眼がするどくなつた朝だ　鮎美

父と子の膝のまるさの新聞紙　鮎美
新聞をしまふて母の母らしく　同
(人)新聞に包んだ戀の饅頭よ　卜居
(地)かなしき朝の新聞をよむ　葉平
(天)地方版の隅に小さく死んでゐる　路郎

席題　男盛り　雅幽選

男盛り品位扇さぬ大家の子　南面子
夕暮を男盛りが遊び居る　小柳子
頑張つた男盛りへ虹が出て　鮎美
アパートの男盛りも秋を知る　えいを
國旗へ男盛りの眉太し　春秋
男盛りを三角に惱み　綠之助
男盛りを嗤はれてゐて金があり　杏三
女等にも出して來た男盛り　里十九
男盛り女盛りにおくれたり　角丸
体格は男盛りほどでなし　同
今日も又男盛りを釣に行き　默平
秋晴れを男盛りには鶏を追ひ　同
履歷書に男盛りを疲れてる　勝二
赤だ白だと男盛りを自殺させ　同
(佳)ぼんやりと男盛りをみつめる　紫石
(同)酒呑めぬ男盛りをもてあまし　明暗子
(同)曲つた腰で男盛りを案じてくれ　艸樂
(同)男盛り腕を組む日が多くなり　山雨樓
(同)儲けては使ふて男盛りなる　掉二

席題　パン　鮎美選

冬の風吹けよパンにも溫かみ　素月
夕方にパンひつ提げて痩せてゐた　青兒
パン一つ殘して旅行歸るなり　彩秋
パンちぎる指にも冬がきてるなり　町二
胸時計合してパンを買ふて去に　かほる

味覺の秋パンで生きてる　葉平
食パンだけで戀をしてゐる　山雨樓
朝のパン田舍の父が笑ふなり　小柳子
ほこりの中に露西亞パンが賣れてるる　雅幽
トースパン却々腰を上げぬなり　默平
(人)パンの影が淋しくまるみおびてゐる　卜居
(地)寒椿妻病む朝のパンを嚙む　町二
(天)美しき天然の譜えパンを食べ　かほる
(軸)子の熱にせめてもパンをもたすな　鮎美

席題　お叩頭　かほる選

卒業の翌日お叩頭あらたまり　青兒
奥樣へお叩頭して　ゐる小商　白峯
銅錢を投げてお　を受けてゐる　艸樂
前もつてお叩頭　いと敎へとき　里十九
女客お叩頭する子へおゝかしこ　春秋
お叩頭して〳〵金集らず　紫石
歸省してお叩頭へ父はたゝ笑ひ　南面子
戒ばし知らぬ妓がお叩頭する　葉平
女學生同志すましてお叩頭する　町二
お叩頭して歸る姿を見送られ　みつる
叮嚀なお叩頭が俺をあはてさせ　掉二
桃割で來てだしぬけなお叩頭をし　雅幽
お叩頭して馴れた手附きで酌きに來る　いわを
寄附帳へ代理はそつとお叩頭をし　麗光
接待はお叩頭の巧い人が立ち　岩石
お叩頭してカツタナーと笑はれる　小柳子
氣まづさにお叩頭漸くして歸り　夢裡
バスよけてからもお叩頭が續けられ　華水
犬連れてお叩頭する妓の肥えてゐる　鮎美
花形のマダネシウムにお叩頭する　同
お叩頭でオールバックが邪魔になる　山抱子

お叩頭だけ供の丁雅に用がなし　山抱子
(人)お叩頭して指輪が光る未亡人　同
(地)お叩頭したはづみに釦が一つ落ち　麗光
(天)お叩頭してうれしそうなり窓と窓　松之助

兼題　辛抱　緑之助選

今度こそ辛抱する氣で紹介所　松之助
屈辱に耐えて見上げる青い空　汀華
辛抱の父は笑顔で通したり　青兒
辛抱をしてゐて金利重むのみ　雅幽
辛抱のほろにがき酒とはなりぬ　鮎美
辛抱をしてまだこれ程の借があり　白峯
神を信じてがん張つてゐる　豆秋
玄關に辛抱強い記者一人　松之助
食ふためにする辛抱に寒い風　明珠
辛抱に十年先を氣つかはれ　山抱子
辛棒はしたが會社が左り前　路郎
辛抱の兩手に髪をかき上げる　司郎
辛抱へ母は只々手を合せ　夢裡
辛抱の筆もかすかにふるへたる　水車
ロボットにされて勤續してるなり　華水
辛抱がもう老朽にされてゐる　鶴峯
(佳)おもひなほした柳行李の紐　機見女
(同)辛抱へ子供ばかりが殖へて來て　雅幽
(同)辛抱をしろと意見は終ひなり　夕鐘
(同)辛抱の仕甲斐の朝となる微笑　司郎
(同)馬も亦今一といきの峠道　素月
(人)雨ひと日子なき夫婦に降りくれず　町二
(同)恩給へ今一年の朝を起き　素月
(地)腰かけのつもりで辛抱しつゞける　豆秋
(天)賴る子の年は幼し酒の留守　町二

兼題　鍋　路郎選

肉鍋へ秋の味覺がとけ入つて　あや美
末の子にいよいようまい鍋の底　杏三
鍋の蓋取ると置くのに場所が要り　彩秋
鍋の脚一つとれたとまだ使ひ　青兒
爪彈きのあいまあいまに鍋の世話　明珠

「R君の結婚」
お祝の鍋と云ふのも友なるよ　白峯
君と僕鍋をはさんで故郷の事　方眠
宿替の女房土鍋を提げて行き　えいな
肉鍋はうどんが煮えて外される　松之助
醉て來て鍋のフタなどあけて見る　小柳子
すき燒の鍋をふさいだ子澤山　水車

紡績工場食堂風景
ライスボイラー千人前のめしが出來　葉平
ふせた鍋晝の女をさげすみぬ　鮎美
居候鍋の在所を知つてゐる　汀華
二階借鍋を圍んでよく笑ひ　同
鍋墨を落し小川へ黃昏るゝ　麗光
コック場の鍋サンプルの標につみ　同
(人)使はない鍋を鼠が動かせり　華水
(地)鍋やきが御馳走だつた君と僕　同
(天)社會鍋きれいな人へ呼びかける　岩石
(軸)あの頃の土鍋はすでに植木鉢　路郎

兼題　スタンプ　清記互選

八點　スタンプへ獨りうなづく旅の宿　水車
同　スタンプの力切手を外れてゐる　豆秋
七點　手がかりになるスタンプが消ねてお　香峰
同　スタンプへお寺お心持で押し　柳民
六點　スタンプの名所季節をはずれてる　北人
同　スタンプの色濃く新婚からの便　岩石
五點　スタンプのうすい切手を見せに來る　松之助
四點　流行らない店スタンプの日が違ひ　波濤
同　記念スタンプへ列亂れたり　おさむ
同　祝電のスタンプまでが浮いて見え　龍美
同　溫泉のスタンプ見せし友は逝き　紫石
三點　スタンプの日附と違ふ日付なり　一久
同　懷しさ故郷のスタンプ押してあり　あや美

(二點以下省略)

兼題　雜詠　清記互選

十點　生きてゐる顏を故郷へ見せに去に　紅
八點　草を食む中に厄日は晴れ渡り　變人
同　寢ころべばはつきり痩せたことを知り　波濤
七點　賣られゆく妓らが夜汽車に默りきり　鮎美
六點　宵寢してはつきり遲刻してしまひ　白菊
同　清廉にして借金へお叩頭する　豆秋
同　戀仇絹のハンカチ持つて居る　おさむ
四點　尊しや糞にたかれり　鶴足
同　笑ふ事多く親爺の上機嫌　掉二
同　美術の秋[illegible]童二千人　葉平
同　灯を消して子[illegible]たる虫の聲　北人
同　風の音淋しくきゝて晝の部屋　小柳子
三點　お彼岸の渦に別嬪眼立つなり　山雨樓
同　天空へ大手をひろげ何か慾し　岩石
同　本家と云ふ方は大きく太く書き　默平
同　本箱へ向つてからの讀む思案　水車

(二點以下省略)

川柳雜誌社　**神戸句會**　(神戸)

十月十一日　於華水居　明珠報

兼題　滿員　明珠選

乘れん事ないのにバスは通りすぎ　繁堂
思ひ切り乘せて重たいバス走り　幸村

椅子席の押すな〳〵へ扇風機　春　秋
下足番きれいに詰めてもてあまし　竹　楓
團体の旗がデッキで立たされる　華　水
落ちさうなとこに乘つてるバスガール　同
席題　房　春　選
洗ひ髪房々してゝ陽が當り　華　水
乳房から離れぬ子供へチンドン屋　竹　楓
(佳)薔薇の房へ處女の唇赤し　同
(軸)宮參り守り袋の房へ晴れ　春　秋
席題　人　間　竹　楓　選
人の子へまたゝく星のある夕べ　春　秋
人間になれと先生眞面目なり　幸　村
人間の強さを知つた登山靴　華　水
(秀)人間の喜怒哀樂に疲れきり　吉左右
(軸)ロボットを見る人間のあはれさよ　竹　楓
席題　尖　る　華　水　選
言譯をする口先をとがめられ　繁　堂
尖つてる神經へ蕨蚊ついて來る　竹　楓
鉛筆が尖つて淋びし秋の夜　明　珠
ふとついた痛さへ針の先を見る　吉左右
(佳)キューピーの頭を撫る共稼ぎ　幸　村
席題　足　袋　互　選
地下足袋をぬいで淋しく大神戸　幸　村
なれぬ旅汽笛へ足袋がぬげかゝり　繁　堂
白足袋で笑ふて出るも久し振　吉左右
白足袋になつて子供に見上げられ　明　珠
うれしさに觸れてる足袋の艶々し　華　水
兼題　靴　清記互選
靴の艶借りに來たよな色でなし　明　珠
共鳴をしたのへ靴の先が觸れ　華　水
公休日誘へば靴を磨いてゐ　繁　堂
泥靴のまんま抱かれるピクニック　竹　楓
一足二足三足朝の玄關靴光る　明　珠
塲末まだ靴音してる二時が鳴り　華　水
靴先で蹴つてまたいだ空財布　竹　楓

川柳雜誌社　**加茂川句會**（京都）

十月二十一日　於仲源寺　平岩司郎報

兼題　財　布　新　水　選
四疊半わざと財布を落すなり　好　涙
誘惑の財布紫色の札　奇可愛
特價品ばかりに用のある財布　草　村
はらわたの樣に財布をつまみ出し　愚　人
一家をば支える財布首にかけ　富美三
和かさ銅貨の音も子の財布　啓　秀
冷靜に返る財布の見詰められ　木公
突き出した財布に父の口重し　香　朝
責任のある財布にて默り勝ち　同
惡友に空の財布をあけて見せ　晃　洲
圓卷の底たしかめて財布入れ　同
明けたまゝ剩錢を待ち財布　金　波
天氣などほめて財布の紐を解き　同
判押した紙ばかり出る革財布　紫　明
ふところの財布が重い妻揚子　同
(人)戲れに女の財布など覗き　陸　平
(地)財布まで軍服くさい匂ひがし　麗　光
(天)見覺えの財布を叔父はふらまき　山雨樓
(軸)生欠伸財布の底が知れてゐる　新　水
兼題　髪　山雨樓選
拔毛をばじつとみつめる細いまゆ　富美三
立髪に湯氣上げて馬と父歸り　朝四郎
頂上を極めて女髪をなで　晃　洲
黑髪に秘めたる戀の島そだち　艮之祐
髪洗ふ庭九官と默しきり　麗　光
髪梳いて晝の娼婦にある鄕愁　麥刀子
髪すけば金木犀の風があり　祐　介
ゆき遲れ此秋髪のぬけること　素　人
秋雨の中を遺髪の着いた朝　冠　岐
櫛の目のはつきりシャンデリヤの光　流　石
女の目にもう子供でない髪の出來　二　山
洗ひ髪女冷たい返事する　秋　生
女給部屋抜毛に晝の陽がまとも　斗　船
髪の毛の出た味噌汁に恐れ入り　千　枝
杖いらぬ白髪に晴れた渡り初め　草　村
髪の毛を一すじ細い指に卷き　佐一郎
髪結ひが歸つて妾淋しがり　同
掌の錢いくらかに髪を梳く　鮎　美
舞ふ巫女の髪も光りに見ゆるなり　同
髪結ふて市バスの天井低すぎる　舜　二
轉地して知る一筋のほつれ毛よ　同
狂人が髪をきつちり結ふてゐる　同
(客)よき母の髪に白髪の數がふえ　悟　久
(同)一人娘のくせなき髪の桃割よ　草　村
(同)髪梳いてゐる手が雨を氣付くなり　好　涙
(同)きりつめた暮しに妻の束ね髪　冠　岐
(同)氣に入つた髪も長に見ゆる日よ　進示朗
(人)結ひ立ての髪に障つた聲になり　晃　洲
(地)ラケットを持つは見知の高島田　富美三
(天)洗ひ髪小さく見へる妻の顏　艮之祐
(軸)髪染めてへびよこ〳〵孫の數　山雨樓
(同)みもちして女の辯のぬけぬ髪　同
席題　慰　め　京　郎選
慰めに言うたがお氣に召さざりき　失　名

慰めの言葉でくもる汽車の窓　悟久
教會の鐘に慰められて居る　佐一郎
慰めの隣りに一人あくびする　迷兆
慰める氣の妹に泣かされる　紫明
慰める男の肩の廣さ見る　香朝
慰める言葉に盡きて酌いでやり　麥刀子
慰める姉から涙聲になり　山雨樓
慰めてくれる彼女は年が上　耳之祐
慰めに來て背に障子からの風　祐介
慰めてくれる友達金がなし　秋生
慰めて同じ思ひの膝につき　同
慰めの墨すり直し書き直し　二山
ポケツトに慰められる金があり　同
（佳）慰めてくれる月とて冷たかり　陸平
（同）慰める女の膝のかんぜより　愚人
（同）慰めてやれば一層こみ上げる　欸乃
（同）慰めの言葉がすぎてつんとされ　波樓
（同）慰めは茶柱の立つ夜の膳　二山
（同）慰めに來れば灯のない部屋に居る　草村
（同）慰めに來たに平氣で髯を剃り　同
（同）怪我をした子に慰めのありつたり　山雨樓
（同）慰めてやれば羽織の紐をもち　同

席題　堤　二

トラックの埃堤へ黄昏れる　木公
堤ははてなし小鳥はれぐらへ　白扇
行けども行けども堤橋が無し　祐介
手ばなしでトロは堤を下りる也　千枝
馳けて行く子に堤のゴールイン　進示朗
此の堤が村の生命線だ　冠岐
霧の朝堤の下で牛がなき　光風
肺と病む堤に遠く帆が走る　欸乃
堤の秋へ一匹の牛　山雨樓
犬土堤を登つたとこでふりかへり　草村
土堤の下鮮人小屋が崩れそう　同
花を摘む堤に足場あるのなり　耳之祐
演習の地圖に堤防記される　同
（佳）貧乏をかみしめ行く土堤の徑　同
（同）就職の話堤に寢そべつて　耳之祐
（同）堤ながく愛の言葉續き　香朝
（人）思案して堤短う歩いてた　啓秀
（地）堤いまは慘事を秘めた花が咲き　迷兆
（天）ロケーション堤の長さ使はれ　香朝
（軸）堤から晝になる柿の木が赤い　二山

席題　表情　鮎美選

うつりぎのまゝ表情のかはりゆく　素人
高下駄を履いて表情變るなり　山雨樓
表情の巧いのがゐる女學生　耳之祐
マネキンのその表情を寫される　金波
寫眞師の方もすました表情する　草村
脂紙ちよつと表情かへて見る　愚人
クツシヨンにはれる女の表情美　秋生
ぬつと出ただけで蝶六笑はせる　千枝
表情を生かすのよと眉を描き　六祥
頼もしい表情で女かはふてる　朝四郎
（佳）表情のさても汝は痩せてゐる　秋生
（同）無表情障子の桟が動くなり　白扇
（同）表情の冷めたき無理を聞いてゐる　迷兆
（同）表情の隙へとまつた蠅一つ　光風
（同）表情へ天井の鶴が動いてゐる　新水
（同）下駄探す目に表情を見つけたり　二山
（同）表情が柱鏡にうつるなり　同
（軸）表情の虚僞と嬌態とに生る　鮎美
（同）表情の鏡のなかにある若さ　同

席題　歸る　千枝選

引きまいげ村へ淋しく歸つて來　富美三
父歸る其の夜の部室に明るさよ　白扇
一人で歸れば何か物足らず　陸平
歸る日を旅から告げる第二信　晃洲
近づくと走つて歸る子の使ひ　草村
心なく歸した後は寂しすぎ　波樓
腕時計歸る時間を知つてゐる　二山
柿熟す朝を笑ふて歸すなり　鮎美
見ておいた空地歸りの途しるべ　耳之祐
醉ふて來て濟まぬ女房と子の寢顏　紫明
叱られて歸る踏切雨が降り　秋生
母親の咳聞いてゐる旅戻り　同
靴磨き歸の群をあきらめる　雨山
歸る氣へ女將留めたい譯があり　同
れだる兒へ父の歸りの音をたて　金波
折詰をゆがめて歸るいゝ氣分　同
鮮人の歸る西日へ雞が逃げ　木公
咳一つ歸ると決めた朝かさ　同
歸るとは思へぬ人の醉機嫌　迷兆
歸る氣がありと見てゐる膝がしら　同
父歸る其の夜お酒を買ひに出る　香朝
古里へ去ぬ女中に重い物ばかり　同
（人）働いて歸る姿に嘘がなし　麥刀子
（地）たわし賣すなに歸る氣の毒さ　欸乃
（天）失業が歸れば村のあたゝかさ　富美三

席題　果物　紫明選

好きな男へくだものゝ皮をむき　鮎美
たまさかのリンゴが腹で落ちつけず　麗光
果物にも飽き二次會の酒落ばかり　斗船

お妾の林檎の艶に思ふ事　秋生
泣きに來て柘榴の香ふ叔母の家　麥刀子
借金を返して林檎むいてくれ　佐一郎
果物まで手を延ばす程癒つて來　六祥
果物へ女將器用に妻楊子　愚人
柿熟れてめつきり村の朝が冷え　晃洲
柿の荷と片言混りの手紙來る　流石
無花果のそれにも似たる母なりし　陸平
果物の籠床の間は靜かなり　同
果物が夜に光つて秋酣ける　進示朗
籾殼の中に林檎はまだ青し　同
梨貰ふ右の手にある卷煙草　雨山
小學の理科へ果物一つ割り　同
子を叱る果物籠のきれいなり　二山
果物屋棚のメロンが淋しすぎ　同
(客)藝術寫眞林檎へ秋の光する　白扇
(同)靜物の果物知らぬものがあり　草村
(同)磨いて磨いて十錢に賣る林檎　素人
(同)ぎんぼんぶどうが一つ殘つて居　富美三
(同)梨を剝く義母の心にある空虛　麥刀子
(人)果樹園の夜番は月へ笛を吹き　千枝
(地)果物へ一圓紙幣の釣錢を待ち　山雨樓
(天)灯ともせばみかんが青い秋の街　二山

席題　印刷　素人選

印刷所〇時三十分とはなりぬ　舜二
儲けてる音で更けゆく印刷屋　麥刀子
も一臺欲しいと思ふ印刷機　良之祐
秀才の手が眞黑な謄寫版　紫明
印刷になつてプランに氣付くとこ　雨山
印刷屋一枚刷つて灯にかざし　草村
初刷りへはつきり年が改り　波樓
印刷の余白に所判を押し　晃洲
開店へインキ乾かぬビラが出來　佐一郎
印刷へ希望が多い赤インキ　木公
印刷屋仕入文句で賴まれる　斗船
印刷になると我名も惡くなし　同
即席の名刺を刷らす出來心　千枝
今日も又次男へ印刷物が來る　同
印刷へ丁稚器用な事が知れ　香朝
印刷へ兄の力を借りに來る　同
うれしさは活字になつた自分の名　欵乃
印刷を初めて賴む黑い枠　同

川柳雜誌社　御旅句會（大阪）

九月廿五日　於卓球會館　生田翠夢報

句會終了後路郎先生の有益なる御講話あり誠に有意義に會なりき。

席題　露　互選

露深く猿の聲など聞いて住み　艸樂
病んでから露に親しくなりし我　みつる
巡回の肩は夜露にぬれて居り　變人
雜音がして來た露が光るなり　かほる
沿線も夜汽車も露にぬれてゐる　鮎美
白露に君の自重を祈るのみ　路郎
露の命へ注射ことわる　同

席題　旅費　艸樂選

とつぶりと暮れ行く宿に旅費淋し　紫石
旅費もなく續く休みを寢てしまひ　あや美
時勢を論じ滿洲への旅費借られ　紀太
大阪のひろさに旅費がへつてゆく　かほる
旅費だけと地方のかけは集めらられ　らせん
書留の旅費へ父と子鷄を追ひ　鮎美
そろばんへ旅費だけの夜の冷へてくる　同
(佳)死ぬ覺悟旅費のなくなるまで遊び　琴人
(同)旅費の中に手のはられぬものあつて　路郎
(同)行くだけの旅費かもたぬ腕をもち　同

兼題　樂書　葉平選

樂書の友はちり〴〵ばらに生き　紫石
落書が投げる波紋の二人なる　變人
樂書が事件の鍵をにぎつてる　らせん
樂書は其儘秋になつてゐる　かほる
逢狀のあとしばらくは樂書し　路郎
本堂の壁へ參詣何んか書き　琴人
堂守もなく樂書の壁が落ち　同
樂書に年まで書いた奥の院　同
(軸)壁の樂書はつしと秋の陽が白い　葉平

兼題　風　琴人選

病める母秋風吹くを淋しがり　弘子
母親の手に抱かれて強い風　柳笑
同僚と別れて風車買ひに寄り　紀太
松の風美人の住む灯が見へる　鮎美
風をのがれて米の値が案じられ　圓角
安宿ののれんの中を風が見せ　かほる
芋を握る野面の風がもう冷たい　艸樂
吹く風に心まかせし秋の夜　みつる
北風へこれだけ賣れば歸る氣の　路郎
秋の風この相談は纒まらず　同
(佳)吹け〳〵とつてゐりやいな風にのり　圓角
(佳)よい返事半分風はもつてゆき　らせん
(佳)ほゝをなづほほをうかぜ秋の風　葉平
(佳)失戀へふと風とさからはん吾　みつる
(佳)病院のまどソヨ風はなでて行き　悟郎
(軸)飛行機が眞直ぐに飛ぶ無風帶　琴人

兼題　夢　　路郎選

夢であれと母神棚へ燈をともし　らせん
夢醒めて乾いたタオル取りに立ち　艸樂
夢であつたを安心してる娘の子　一斤
束縛はかなし夢にまで見る　あや美
夢に見る碁は鮮かに捷つて居り　圓角
そのかみの秋の女の夢にうく　葉平
ま白き夢に兒の笑顔うく　同
（人）夢を夢みるは哀し明日になれ　同
（地）卷紙が夢の机に白く〳〵と　かほる
（天）橋渡る夢明けがたの下駄の音　鮎美
（軸）金拾ろた夢ぶぶ漬けで聽く　路郎

回覽互選　姿　　路郎選

肉体美何を考ふ頰杖ぞ　あや美
父の着物父そつくりの姿で來　紀太
汗ばんだポーズに畵筆亂れて來　あや美
不如意との噂打ち消す姿で來る　圓角
そう急くになんでスカート細くする　同
大自然ふと我が姿をかへり見る　翠夢
妓もう花が崩れた如く醉ひ　同
まるつきり姿は似てるが不肖の子　同

簸川例會（島根）

川柳雜誌社
十月十三日夜　　於尼綠之助居
同人寶藏海月君が松江へ轉任になつたのでこの送別の意に併せて開く。

兼題　旅　　綠之助選

旅先で出す繪葉書は名も入れず　紫光
若き日の旅日記嬉しいことばかり　田鶴緒
旅行きて鐵路を傳はる郷愁や　與詩雄
汽車にれて汽車に起きてく生欠伸　海月
（人）遊廓の灯も味はつて一人旅　紫光
（地）新鮮な朝が車窓に應ゆる旅　羅門
（天）旅愁が深く枕に出る欠伸　同

同　感謝　　海月選

啞乞食たゞ默々と應へてる　喜久路
五十年感謝に生きて恙なし　比沙緒
感謝の瞳盃に吸ひ込まれ　草路
感謝する睫毛に揃ふ佛達　羅門
感謝して呑む大盃の手がふるひ　綠之助
（人）感謝―咽喉につかへてむせぶのみ　同
（地）百姓の感謝ひし〳〵と雨地に吸はれ　與詩雄
（天）感謝たゞ睫毛の露となり光る　同

席題　離別　　羅門選

養ころが轉んで今日の別れなる　田鶴緒
別れたくない足ごりへ塲が沈み　綠之助
感傷の秋忽然と友は去る　比沙緒
（秀）德利がさみしくころびぬ別れの日　綠之助
（同）別れのプラットかないしぬいく日の　同

同　不意　　田鶴緒選

不意に來て順を狂はす男なり　與詩雄
不意打に合圖をするは舞臺だけ　紫光
（佳）不意に來て悲しいことを言つて去に　綠之助
（同）不意にもたれて何が欲しいの　與詩雄
（同）だしぬけに狂女うつろな目を向ける　海月
（同）上司てき何んぼ何んでもだしぬけ　同

高知句會

川柳雜誌社
柳翁　忌　　中澤濁水報
九月二十日朝會員河野魚川氏腦充血のために逝去せらるよつてその追悼を兼れ九月二十三日高知教育會舘に於て開催遠く郡部方面の會員も參加して盛會緊張裡に閉會。

席題　思ひ出　　青果選

丘へ來て吹く思ひ出のハーモニカ　映珠
思ひ出をほゝ笑む妻の土用干　紫白
虫干に母一ッ身出してくる　悠羊
思ひ出の一ッにノートめくられる　鐵吉
思ひ出へ默る一人に貸しがあり　春風
思ひ出すのは若き日の歡喜　晋平
思ひ出の俺も歌つた應援歌　春風

五　客

思ひ出を語るに天井低くすぎる　春風
思ひ出も古傷に觸れ度くはなし　翠葉
大掃除ふと思ひ出の品に遇ひ　八白
思ひ出は淋し現實なほ淋し　比呂詩
思ひ出の寫眞笑へば笑ふやう　濁水
（人）思ひ出へ月は昔のまゝを照り　鐵吉
（地）思ひ出の猪口に嬉しく直す膝　濁水
（天）思ひ出は今の境地を淋しがり　紫白

席題　聲　　紫白選

頓狂な聲もまじつてよい酒塲　白洋
大漁の聲で港へかへる船　翠葉
自慢する話次第に太る聲　青果
熱狂の聲々聲にゴールイン　浮城
表情で見たいアナンサーの聲　比呂詩
前置に聲を痛めた浪花節　八白
親しめる友に變化のない地聲　青果

五　客

あの聲をそつと仲居に聞いて見る　濁水
父の聲子の聲尖る外は時化　悠羊
レスリング血を見てからの聲となき　映珠
女給皆地聲で朝の拭掃除　同

聲變りもうキネマには飽きた頃　春風
(人)なごやかに五燭をかこむ笑ひ聲　比呂詩
(地)どつしりと或夜の父の重い聲　晋平
(天)借物に來た裏門の笑ひ聲　春風

席題　魚　風選

雜魚の中章魚の子がゐて面白し　翠葉
はれ上る銀鱗潮もよい時刻　白洋
別莊へ跳ねてるまゝの魚が賣れ　紫白
不甲斐ない俺に釣られた魚の運　比呂詩
(人)俺も魚だ面さらしてふぐは居る　八白
(地)鹽魚燒いて刺戟のない生活　青果
(天)去に仕度釣れぬ魚が刎ねて居る　八白

席題　川　白選

堤防を切つたと見えぬ川の色　花舟
川舟で小供面白そうな波　浮城
故里の小川を歸省なつかしみ　鐵吉
行軍の足に散らした川の月　青果
秋さらり川邊の蘆のさゆらぎに　比呂詩
友染の紅加茂の水に搖れ　紫白
水論へ川チョロ〳〵と流れゐる　鐵吉
筏舟川の流れに逆らはず　青果
覺悟して出て急流のものすごし　白洋
澄み切つた流れも賞めて渡る舟　濁水
親の無い子が夕暮れの川へ來る　悠羊
川底の石へ採集家の瞳　浮城
秋の川障子を流ふ人と撮れ　紫白

兼題　肖像　濁水選

勳章をつけてはゐない肖像畫　春風
肖像の何處か淋しい馬占山　鐵吉
肖像のごこが値打の五千圓　映珠
肖像に泪が浮ぶ三勇士　比呂詩
肖像へ一座再び涙ぐみ　酉水
肖像へしばし追憶たゞるなり　翠葉
肖像畫ふと盜人は睨らまれる　八白
肖像畫よく特長を見付けてる　白洋
肖像に亡き父の顏數へられ　花舟
自畫像へ此頃伸びた髯を見せ　紫白
御維新の姿で祖父の肖像畫　翠葉
園藝のサロンに祖父の肖像畫　映珠
肖像に若かりし日の肩の線　晋平

五　客

額にした肖像に孃は生きて居り　青郊
曰くありらしい書齋の肖像畫　白洋
思ひ出す子の肖像ににぶる針　比呂詩
肖像へまだに濟まない義理があり　青果
叱るのでない訓へてる肖像畫　浮城
(人)肖像を前に悔悟の瞳を見はり　酉水
(地)肖像に受けた精神的の恩　青果
(天)成功の初代ニッコリ額に居り　浮城
(軸)肖像に出來ない父を物足らず　橙舍

阪大川柳會（大阪）

九月二十日　竹漸報

兼題　病人　路郎選

劫病の待つお迎へはやつて來ず　肩山
氷囊をのせて病人らしくなり　路生
病人の好きな樣にと醫者は去に　柳水
浮世をば超越しての養生さ　筑川
病人は默つてゐれと叱られる　橙舍
今に死ぬ樣なうめきを繰返し　方正
いまの間にと立てば病人眼を開き　柳秀
病院へどこが病ひかはで造り　深雪
病人を材料と見た態度にし　橙舍
煎じ藥まだかと障子越に聞き　方正
病人に徹震のあつたことを聞き　柳秀
母危篤家出其の手に乘つて來ず　肩山
病人のくせにと鼻であしらはれ　橙舍
病人の皮肉に皆は寄りかゝず　肩山
病人の見舞に孫もつれ出され　竹漸
特等の窓に病むより夫婦船　芳一
世間体主治醫だけでは物足らず　湧三
不治の身を熊岳に迄持ち廻り　肩山
敬遠を胸に抱えて見舞に來　芳一
一碧の空病床にのび上り　湧三
(人)心中の相手も同じ病氣なり　筑川
(同)修養で病苦を忍ぶいじらしさ　同
(同)醫者だけに任しておけぬ焦燥さ　湧三
(地)氣の毒にギブスベットの詩人です　同
(同)回復期喰ひたいものを書て見る　路生
(天)病人の心も知らずめかして來　芳一

雜　吟

長襦袢舞子の肩は痩せてゐる　路生
黃粱豊かな驢馬に乘たり人(滿洲國承認)　竹漸
四十九里島は小さく消えり(九島氏サ迎ヘテ)　路生
詩の島を足蹴にかけて圍碁將棊(同)　正甫
明月も暫し隱れる流れ雲(同)　同

席題　三味線

三味線の途絶えた雨の音も　橙舍
はんてんが三味をかゝへる廊の晝　山彦
三味線が邪魔になつてる語り樣　方正
三味の音がやむで格子に派手な聲　湧三
その肘をちつと曾めつて唄を待ち　橙舍

和製ジャズ三味線入りのチンドン屋　洗塵
ばち持ちて行衛明かさず外出し　筑川
浪花節女房のばちに聲を揚げ　柳秀
金屏風を背に三味線は合つてゐる　湧三
三味線にかゝわりのない唄ひ樣　芳一
惑溺にふと三味線の淋しすぎ　橙舍
宵待はやつと女房の三味に乘り　柳秀
おでんやでへヤが〳〵と鳴らして來　路生
夕立を縫ふ樣に三味聞えて來　同
(人)女學生三味を日課のうちに入れ　竹涯
(地)箱がはいる家だと聞いて宿をかへ　湧三
(天)三の糸きれて久しくなりにけり　路生
(軸)ごゞを無駄に彈ひて白けやう　路郎

川柳雜誌社 螢ケ池句會

石森靜太報

兼題 躰　鮎美選

(健康な人を見ろにつけ)

逞しい躰に何の苦があらう　青鬼
職人と云ふに躰の細く見え　定城
うれしさを躰にみせて子は歸り　湧水
健康になれなれとラヂオ体操　巻巴
恙がなき躰で朝の陽を拜み　同
體力の相異寂しくうなだれる　靜太
癒ゆる日のいつぞ今日も空晴れて　同
(佳)秋風が吹くほそい躰よ　愚寵
(同)あこがれをたゞ夢として病んでゐる　紫煙
(同)健康な躰へシャボンの滑る朝　憤兒
(同)出養生漁夫の體をながめてゐ　靜太
(同)ワンステップ巴里仕立の服が合ひ　のぼる
(軸)傷つきしからだとなりて歸りゆく　鮎美

(同)にんげんのからだひまつちがにぢむ　同

兼題 群　鮎美選

群からはずつとはなれて一人いる　飛車
群衆の中によく似た顏が居り　龜之助
滿蒙の開拓に行く群ですよ　岸岩
交番に外人が居る人だかり　甘水
ルンペンの群に一人の黑目鏡　靜太
鹿の群合圖のラッパ知つてゐる　巻巴
(人)病院の屋根にも雀が群立つよ　愚寵
(同)毛虫ら蛾となりて翅ひろがへす朝　同
(地)雜魚の群へ青空が寫るなり　靜太

病床夢

(天)夢に見た俺は羊の群とゐた　青鬼
(軸)群集へばるんをあげる秋日和　鮎美

席題 天井　互選

天井の鼠を不眠の眼で睨み　紫煙
故里の天井の色や母の顏　憤兒
天井へ這ふてる蜘蛛が氣にかゝり　岸岩
天井のひくき都會に住み馴れる　定城
怪談へ天井だん〳〵下りてくる　甘水
天井の隅から恐怖飛んで來た　愚寵
たゞ天井見つめ狂人笑つてる　公平
天井を見るだけの力なり　飛車
萬策が盡きて天井見つめられ　靜太
花嫁へこの天井が低くすぎる　鮎美
膝のまるみに天井のつゝがなし　同

川柳雜誌社 柳翁忌（松江）

九月廿三日夜　於奈良井柳人宅

奈良井柳人報

席題 佛の日　柳人選

思ひ出へ風が鳴つてる佛の日　巻二
藥瓶思ふ事あり佛の日　同
秒針も默つて吳れ給へ佛の日　都之介
今日は早く歸ると靴はく佛の日　天痴人

席題 煙草屋　祥月選

煙草屋を聞いてごてらの儘で出る　都之介
煙草屋へまでのポケット鳴つてゐる　同
煙草屋の愛憎もなく一つ賣れ　天痴人

席題 噴水　天痴人選

淋しさに行けば噴水あるばかり　巻二
何思つたか噴水に見惚れてゐる　祥月
闇夜を無氣味に水道管の噴水　柳人
(佳)裏切られたる自覺に噴水を去る　緣之助

席題 港　都之助選

(佳)貞操を嘲ざ笑つてる港の夜　巻二
(同)上陸第一歩港の女や女や　柳人
(同)闘志滿々港の朝の軍艦旗　天痴人

席題 こほろぎ　互選

こほろぎに愛の言葉も聞かすまい　都之助
待呆けこほろぎあたりにあざけりぬ　柳人
こほろぎが鳴く薄情を知つた夜　巻二
こほろぎへほろ醉ひの足高すぎる　天痴人

川柳雜誌社 梅田句會（大阪）

水谷鮎美報

題 屏風　かほる選

先代がのこしてくれた金屏風　遊歩
まゝごとの兒へら臺を屏風にし　禿山
屏風へ黑裝束の優男　里十九
手踊りの屏風の裏は樂屋なり　方眠
叱られて屏風の影にうづくまり　艮坊

（人）貧乏を枕屏風の知つてゐる　鮎美
（地）てれてゐる仲居へ屏風こけろなる　同
（天）屏風置きかへて朝の水を汲み　卜居
題狂人　新水選
狂人がおいで〳〵をする二階　遊歩坊
哀れさも知らずに騒ぐ座敷牢　茄子
狂人の日本の旗を持ちたがり　鮎美
髪の毛をつかんで狂人寝てしまひ　里十九
狂人のこちらを向けば子供散り　禿山
人形を抱いて狂人泣いてゐる　方眠
狂人のすや〳〵眠る日もありて　鳴玉
狂人に變つてみたい面白さ　巨坊
氣違ひの馴れ〳〵しさに面喰ひ　同
（人）つりあげた眼で狂人に見つめられ　方眠
（地）うつろなる瞳狂人何處へ行く　まさる
（天）狂人も笑へば頬がおちかゝる　鳴玉
（軸）船唄は消へて狂人草履さげ　新水
題しるこ屋　かほる選
しるこ屋につくれんとする田舍の子　まさる
番頭のお供しるこ屋から別れ　禿山
しるこ屋の女桃割よくうつり　同
しるこ屋で晝をすました女連れ　方眠
廿酒ができずしるこ屋おそれいり　同
しるこ屋の女ばかりのように見へ　鮎美
雨模樣しるこ屋の汁甘ますぎる　同
しるこ屋位なら旦那云ふ　里十九
しるこ屋に一合瓶はならべられ　同
しるこ屋へうさを買ひに犬を連れ　かほる

川柳雜誌社
鶴町句會（大阪）
九月二十日於　白峯居　宮岡白峯報

雜題　初耳　琴人選
初耳ととぼけて見るも面白し　變人
初耳へこぼした酒を笑ふ父　岩石
初耳ですと榮轉笑顏なり　寬柳
初耳は一寸隣りの父を呼び　白峯
初耳へ初耳かと目を見はり　新人
てれくさい事初耳にしてしまい　水車
（佳）初耳にしては合點が早過ぎる　同
（同）初耳に姑は日向ぼこをして　鮎美
（同）初耳ですと塵取持つたまゝ　雅幽
（軸）初耳と祖母も笑顏を鏡にして　琴人
（同）初耳を妻に話して酒をつぐ　同
雜題　街の月　鮎美選
ルンペンの背に淋しい街の月　白峯
街の月格子の中で悲しまれ　岩石
ビルヂングの上に小さく街の月　變人
（佳）月しろく夜中の街を笑ひけり　小柳子
（同）街の月額にあびて金がなし　新人
（同）煙突と月とモ一ツ瓦斯タンク　紅
（軸）大阪の合唱街の月おぼろ　鮎美
席題　電話　琴人選
御主人の電話餘程醉ふてゐる　白峯
名を告げてから叮嚀な電話口　紅
電話口笑ふて後で疑はれ　變人
惚れに立つ電話へ嘘はなかりけり　鮎美
惡友が誘ふ電話の智惠をかし　寬柳
恩師への受話機堅く持つてゐる　同
席題　困る　紅選
困つたわと女同志の面白し　雅幽
困つた奴だと友は寄つてくれ　寬柳
病床の母へ困つた顏もせず　岩石
父親へ困る困ると無心狀　白峯
珍客へ困つた事も云へずゐる　鮎美
（人）困るとも言はず鋭い筆をなめ　變人
（地）天井をみつめて困る話なり　鮎美
（天）困つた事に相手は女なり　雅幽
席題　當直　變人選
當直のコップを洗ふ音がする　白峯
當直かと惡友ちよつと話して來　琴人
當直は犬の遠吠耳をつき　新人
當直のこほろぎを聞き夢となる　鮎美
水の音聞きつゝ當直何か書き　雅幽
當直は腕をめくつて碁を圍み　小柳子
當直の朝へうどんの剩錢が來る　紅
（佳）當直の校庭月がさえてゐる　寬柳
（同）燈明の事を當直思ひ出し　小柳子
（同）當直の灯が流れる運動場　雅幽
席題　白　雅幽選
白ズボン履いてボートの波にぬれ　寬柳
カーテンの白さへ秋の陽がうつる　小柳子
あを白くやせて二疊のひろすぎる　變人
白靴へ母親の顏やせてゐる　白峯
我慾をすてた白ろき晝あり　鮎美
同行二人白衣の旅をつゞけてゐる　同
（軸）白い泡が出て試驗管うなづかれる　雅幽
席題　新任　互選
小使室も覗き新任の笑顏　雅幽
見廻りへ新任先に腰を上げ　岩石
新任の眼によごれたる吸取紙　鮎美
新任の靴はきれいに光つてゐる　琴人
新任の目にタイピスト美しい　同
新任の朝をゆつくり眠られず　變人

川柳雑誌社

加古川句報（兵庫）

押賣

押賣の憎さ御飯を焦げつかせ　美也光
因つてるのも知ら押賣やつて來る　同
押賣へ奥から太い咳一つ　光穂
押賣へ二人出て來る新家庭　同
押賣へ買ふ氣で問へば腹が立ち　督二
押賣へ荒々しくも亭主出る　同
押賣は留守の靴だと知つて居り　泰山
モヲ妻は押賣位輕く受け　同

泊客

泊客子供好きになつて置き　光穂
泊客ざうやら店の金主らし　泰山
泊客へ知られともない暮しにて　美也光
女房が亭主に氣兼れの泊客　同

上役

上役は退屈さうに欠伸をし　美也光
年功の今では一寸押しが利き　同
上役は素知らぬ顔で知つて居り　泰山
上役の電話待合からゝしい　光穂

零落

零落をした身に系圖何になる　泰山
零落はしても昔のヒゲを持ち　同
零落へもう親戚は遠ざかり　美也光

川柳雑誌社

螢ケ池句會（大阪）

九月十八日　石森靜太報

兼題　秋の雑感　線

秋晴れの運動會は汗を出し　雨選
（病院にて）　凡子

古郷とおんなじ虫の聲をきき　紅蔦
脱ぎ捨てた着物に秋の冷を知り　巻巴
若栗に幼な心が歸り來る　憤兒
吹く風も奏でる虫の聲があり　一美
鈴虫の聲に讀書の夜が更ける　湧水
このなやみ清算出來ず虫を聞く　煙太郎
面會にもう秋らしいふりの柄　有鐵
病床のシーツへ寫る秋の雲　六華
とりとめも無い空想へ蜻蛉來た　松雨
秋晴れへ遠く子守の唄う聲　定城
秋空の高さへ兩手さしあげる　公平
處女會露臺で月の座談會　岸岩
虫の聲聽くともなしに聽いて寢る　王手
虫の聲寢返りすれば咳となり　寒子
秋の風おもゆと乳が運ばれる　靜太

川柳雑誌社

塗青柳壇句會（大阪）

九月廿八日　於塗料青年團事務所

熊谷紅報

題羽織

お羽織の折目と別に醉心地　四五磨
羽織着て萬年筆の入れ所　紅
羽織袴はれて言ひたい事があり　雅幽
二十一父の羽織が似合ふてゐ　青踏
草臥れた羽織が肩を辷り落ち　同
羽織脱ぐ障子の影も醉ふてゐる　雅幽

題逆むけ　紅選

逆むけを撫でて夜學の眠い事　雅幽
逆むけに晴着の糸が引つ掛り　四五磨
飛び上る程に逆むけ見えぬなり　青踏
逆むけの指に眞白きアスファルト　白峯
（人）逆むけに氣が付いてから大吹竹　青踏
（地）逆むけの事もわすれた給料日　白峯
（天）十二月主人の指も逆むけし　雅幽

題義理　空想へ

ニンマリ義理が浮んで來　元山
あほらしい義理は財布を振つて見せ　青踏
堂々と商ふ俺に義理もなし　元山
義理で聞く欠伸は膝の左前　紅
義理は義理だと意見序なり　雅幽
二枚の葉書嬉しふ義理が立ち　四五磨
（人）義理固い人を殘して日が暮れる　雅幽
（地）十萬の遺産を守る義理の母　青踏
（天）義理捨てゝ橋まで來れ流れ星　紅

題算盤　青踏選

算盤をはぢき相手の腹をよみ　雅幽
贅澤は算盤玉で割り切れず　紅
特價品算盤玉を外れた値　同
（佳）番頭は算盤待つた儘で居る　白峯
（同）青春を忘れ算盤だけを知り　元山
（同）算盤の玉も淋しい小商ひ　白峯
（軸）算盤の音決算が迫るなり　青踏

題凸凹　雅幽選

凸凹ハちと醉眼が迷ふてる　元山
凸凹の大大阪をバスで知る　青踏
凸凹が有つて軟球コロがつて　四五磨
凸道をバス凸凹にして仕まふ　紅
（佳）凹凸の鏡女給の寢る所　青踏
（軸）句の出來ぬ日の机凸凹があり　雅幽

川柳雑誌社

天王寺句會（大阪）

十月一日　於内藤製作所　須崎豆秋報

兼題　微笑　琴人選

鹿爪な父も微笑の旅戻り　南面子
窓越しに子のいたづらへ微笑する　豆秋
微笑にだまされる程酔つて居る　詩郎
微笑した記念寫眞を送つて來　裸人
微笑まれ微笑みかへす遣瀬なさ　柳民
たつき故ほゝえむ事のさびしさよ　柳村
（軸）くたびれを聞かぬ微笑の首をふる　琴人
（同）ほゝえみのそれだけでよし許嫁　同

兼題　隣　琴人選

お隣りの庫へ片方足袋が落ち　機見女
産聲が隣へ聞へ見舞に來　柳村
安い値で隣の老舗賣れてゆき　裸人
お隣へ返さなゝらぬ鉢があり　豆秋
お隣と物も言はない防火壁　同
（軸）隣から落葉を詫びる髪の艶　琴人

兼題　色街　裸人選

二階から長襦袢で手まねきし　詩郎
たまに來た街一寸こはいなり　柳村
色街の灯の明滅が呼びかける　柳民
ほろ酔の旅色街へ貸浴衣　南面子
女湯がすいて色街灯がはいり　琴人
大門の前で朝日を二つ買ひ　豆秋
色街へ這入つてゆるり〳〵行く　同
（軸）色街で會へば氣のよい男なり　裸人

兼題　寫眞帖　豆秋選

若い時分はなぞと寫眞帖を出し　柳村
鳥打を着たともある寫眞帖　裸人
若き日の父アルバムに髭がなし　南面子
流行を追ふてアルバムを滿たす　機見女
アルバムの角にうすれて行く母よ　詩郎
年々に變つた顏の寫眞帖　琴人
アルバムの若さと今を競べられ　同
寫眞帖こんなポーズがよいと云ひ　同

川柳雑誌社

天王寺句會（大阪）

須崎豆秋報

兼題　秋の街頭風景　互選

ウインドに街路樹の光る秋　葉光
茸の香りの鼻つく八百屋　詩郎
プラタナス一葉さらりと街の秋　柳村
茸狩に誘ふ電車のビラに秋　柳民
電車中見るビラビラも秋の色　孝男
秋風の中に白痴は裸体なり　豆秋
早洗ひ仕事にならぬ風が吹き　同
乞食の子もカスリを着てる一心寺　裸人
塗り替へた臨時電車が走る秋　同
アスファルト何所かで虫の聲がする　水車
チンドン屋ズボンにからむ秋の風　同

川柳雑誌社

加古川小集（兵庫）

養子、次男

養子にも云ひ分がある借のこと　督二
むこ養子飲ませばいける口を持ち　同
養子にはナトむつゝりな顏であり　泰山
養子さんだけで近所は名を云はず　美也光
云ひ過ぎてから養子強くなり　光穗
ゆううつな日を養子犬とジヤレ　同
次男坊元氣に云つて笑はれる　同
母に宛次男から手紙屆いて來　泰山
繼母がチト煙たがる次男にて　美也光

損料、食堂

損料が氣樂だなどゝ二階借り　泰山
損料を吳れと云へない間柄　美也光
食堂の戀もヒツソリ雨の夜　同
食堂車朝のおつゆに映る景　光穗
食堂で思案の變る妻揚子　同

川柳雑誌社

大地吟社例會（島根）

九月十八日　綠之助居ニテ　尼綠之助報

兼題　記念　尼綠之助選

退職の記念の品も時代めき　比紗緒
一つ記念にと保險を勸められ　喜久路
記念木母校の庭の童心よ　與詩雄
記念樹が太り母校のなつかしき　田鶴緒
滿洲國獨立
大空は答ゆる獨立記念祭　羅門
記念の二字に光つてゐるカップ　鴻天
滿洲國承認
東洋のモンロー主義で記念せよ　海月
（人）悲しき記念とはなるラブレター　鴻天
（同）警戒の裡に記念日式を閉ぢ　紫光
（地）記念寫眞口があいてるK君　喜久路
（天）戰爭の記念日勝つた國敗けた國　田鶴緒

席出　思ひ出

板倉與詩雄　選

思ひ出のうれしい町の灯に降りる　鴻天
思ひ出す事許りなる膝枕　海月
若き日の思ひ出アルバムに浮く女　同
（人）記念の連寫お若き日の思ひ出よ　比紗緒
（人）思ひ出は悲し額は古びゆく　田鶴緒

(地)思ひ出は秋はれの中をゆく小唄　羅門
(天)思ひ出の一隅にあるその瞳　綠之助
同　榮　轉　井原鴉天選
榮轉は妻の羽織を買はされる　田鶴緒
同僚に先じ椅子の暖く　與詩雄
榮轉に今日から課長と云ふ室に閉ぢ　華村
榮轉に恨む女も出來てゐる　紫光
榮轉は親しめぬ舅をもつてゐる　羅門
榮轉へ戀など捨てる氣にもなり　綠之助
榮轉の噂署長は多忙なり　同
(人)單調な生活榮轉の旅仕渡　羅門
(地)榮轉の嫁も社長の仲媒人　與詩雄
(天)榮轉に冷く光る同志の目　紫光
同　芒、曼珠沙華　澄田羅門選
芒をちぎる宵待ちぞさびし　涛月
たゞ赤く咲いて淋しい曼珠沙華　鴉天
空想の瞳に芒ゆれてあり　田鶴緒
芒の穗さゝやく土手の片戀や　與詩雄
(人)芒荻桔梗の露に冷える秋　田鶴緒
(地)芒なよ〳〵とありきつゝは口笛　綠之助
(天)戀となる話芒へ陽が落ちた　同

川柳雜誌社　**松江小集**（松江）

天痴人報

十月十日夜、墓秋方矢車莊に於て。題吟の後松江支部復活一週年記念川柳大會に關する協議會を開き當日のプラン及び委員を正式に決定散會したのが十時。秋祭等で朗人廣葉法泉子の參加を得すいさゝか寂しかつた。

兼題　秋の松江　天痴人選
助産婦　柳　人選

席題　新日本　都之介選
希　望　巷　二選
喧嘩友達　墓　秋選
紅一點、幸運日　互　理
かるた會平氣で來てる紅一點　祥月
仁輪加へおすな〳〵と松江祭　同
祭客春日の紅葉ほめて呑み　同
年寄へ若い助産婦こはがられ　同
助産婦へ何の甲斐なく死でゆき　同
活躍してる新日本のスポーツ　同
幸運日貧乏などは苦にならず　柳　人
借金の嵩をおそれぬ新日本　同
家近くなつて出合す幸運日　つもる
希望などゝカフェーの午前二時　同
紅一點視線を避ける窓があり　巷　二
新日本の波滿洲を淨化する　同
助産婦が要る事となる物思ひ　同
債券が見事あたつた幸運日　眞吉
何處となく寂しくなつた天守閣　同
大橋へせつなく秋の灯がともり　同
幸運日人形をだきしめてやる　都之介
秋晴の砂塵へ尖る天守閣　同
心許なく助産婦の合圖を待つてゐる　同
夜逃げして喧嘩友達へ賴る　同
齒ブラシの動きにも知る幸運日　墓　秋
血の色がそつと頰にも幸運日　同
欠伸などよく目について紅一點　同
エプロンへ秋の松江の朝餉する　同
助産婦の動き皆なへ氣をもませ　同
幸運日さて剃りたての顏で來る　天痴人
盛會へ幹事よろこぶ紅一點　同
紅一點銀行員に活氣あり　同
助産婦に又ほめられる子が產れ　同
原つぱよ喧嘩友達戀しいぞ　同
長男の希望を聽けば農會長　同
新日本やつぱり村は不景氣だ　同

赤壁川柳會（大阪）

初心者ばかりの句會である。併し皆熱心である。今にこゝからもよい句が出るだらう。メンバーも二十名に近い。世話人艸樂も勵んでゐる。十月一日の句莖。

兼題　屋根、同情、無駄　艸　樂選
屋根の上寒さ覺えて火事は消え　一風
屋根越しに球に四五人飛んで來る　當　藥
大屋根で見る界隈が珍らしく　短　兵
屋根の涙突出たものが名所なり　文　義
見おろせば行儀のわるい屋根と屋根　南陽
同情は同情貰屋渡世なり　赤　青
子をつれた方の夕刊よく賣れる　流　九
同情を受ける轍の深い跡　苦瓜
圓タクは無駄だと思ふ指を出し　文　義
落ぶれて昔の無駄の惜まるゝ　銀　杏
無駄足の桃子戸口へ紙を張り　木　圭
無駄足は電話番號聞いて去に　雨　少
(軸)よしや無駄でも博士を迎ひて來　艸　樂

席題　靴、空腹、餘暇、子守、間食
ゴム靴の重さへ雨が晴れて來る　一風
泰然と見下されてろ靴磨き　きよし
叱られて空腹のまゝすれてゐる　千　兩
注油所こんどはあんなものを編み　雨　少
ウエターになりたがつてる子守なり　桃　村
子守から見ると子供に甘すぎる　文　義

子守して何ともつかぬ歌になり　當藥
問食の使ひ舞奴は素足で來　雨少

矢車莊川柳會句會

九月十五日夜　於床几山公園御太子堂

久方幕秋報

兼題　月　見　互　選

たゞ庭のしやがんで今日の月を賞め　祥月
月見酒妻の理想に氣が合はず　幕秋　同
月見酒苦勞の堪えぬ身を想ひ　同　巻二
九月十五日裏長屋にも同じ月　巻二
名月へ丘の芒を折りに來る　天痴人

席題　トロッコ、秋の雨　同人選

寢ころんで唄も出てくる秋の雨　幕秋
ネオン燈秋の雨中に浮いたやう　眞吉
トロッコへ人夫は少し多過ぎる　祥月
鮮人の唄でトロッコよく走り　天痴人
秋の雨情死の記事が眼にうつり　巻二
憧れの都についで秋の雨　同

席題　ビスケット、夜　互　選

土産だと兄に貰つたビスケット　祥月
集會の後に淋しくビスケット　眞吉
ビスケット貰つて我儘叱られる　天痴人
ビスケット噛んで子供と氣がまぎれ　幕秋
退屈の欠伸の前にビスケット　巻二
未亡人夜の情痴へ若返り　天痴人
夜行軍軍歌眠く繰りかへし　同
默々と夜の二人へ切れ話　巻二
行き過ぎる夜道女を振りかへり　幕秋
女神、若き日
蓮華草たんぽゝ女神つゝがなし　幕秋

月も泪する若き日の戀よ　巻二
日記だけが知つてる若き日の思ひ出　同
性典へ若き日にある調べごと　幕秋

カラス會句座（島根）

第一回　鴉天報

初めて川柳をつくる連中ばかりが集つて、これから川柳道に精進しようと誓ひました。一同中々熱心です。未だてんでなつてません が、ゆく〳〵ほ、雲西支部の設立でもやらうと意氣ごんでゐます。

題　虫、雨　鴉天選

雨の日にゐたゝまらないスポーツマン　義政
夜遊びを嗤つてる樣に虫が鳴き　重德
雨宿り知らぬ女に話しかけ　水煙

第二回

懷手、嵐、女學生、化粧

化粧すんだ鏡へにつこり笑ひかけ　鴉水
懷手女房の意見きいてゐる　水煙
スカートのさばきも輕く女學生　鴉天
女學校も三年と言ふハイヒール　同

第三回

五圓札、情熱、新聞、祭、愛情

汽車の窓のぞけば村は秋祭り　水煙
祭だよつきあひ給へと醉ふて來る　鴉水
握られた手へ情熱の血が通ひ　かほる
見送りの母人影で涙ふき　同
意風さ昨日の新聞讀みなほし　重德
初孫を土産につれて祭り客　嘉一
五圓札くづさにやならぬ用が出來　鴉天
稻の穗に祭太鼓の音響き　同

第四回

友、煙草、勝利、一週忌

煙草も吸ひます昭和の乙女です　雀天
久しぶりの友角帶をしめてゐる　鴉水
都會から歸つた友へトマト熟れ　水煙

睦會句報（神戸）

九月十七日　西村明珠報

生活、秋、文學

ダンサーの姉が支へる二階借　操
父と母子に戲れて夜が更け　同
生活に追はれがちなる朝の靴　明珠
生活の餘裕へ怖い犬を飼ひ　同
皆な仲よく風邪引いて秋が來る　彌之助
久方に古本あさる秋の宵　同
髯そつて出た夜の風さらり　明珠
病んでゐて啄木全集を讀みふけり　同
戀文に四條八十の詩が一つ　彌之助

三人寄りて（大阪）

九月二十六日夜　於里十九居

水谷鮎美報

席題　退　屈　里十九選

退屈のラヂオも眠い晝さがり　鮎美
退屈の鼻かむ音へほつとする　卜居
（人）退屈の女のなすがまゝにさせ　鮎美
（地）退屈へ今日も金魚が死んでゐる　卜居
（天）退屈の晝へ失業の兄が來る　鮎美
（軸伸びをしついでに雜誌取つてる）　里十九
（同）退屈は隣りのレコード聞き出る　同

席題　酒　卜居選

酒の宵たゞ俳優のつゝましく　鮎美

酒がもの言ふ宵なりきうぬぼれぬ　同
酒がたゞ俺をみすてぬ宵なりき　同
(軸)酒とさびしく母の膝がしら　卜居

席題　梨　　鮎美選

梨の皮あつくむいたる許嫁　里十九
戀もなくたゞいたずらな梨の皮　卜居
梨の皮つゞいて戀のつゞかなし　同
(人)子を持ちて梨の皮にもおもしろし　同
(地)梨むいて男はそのまゝ横になり　里十九
(天)病む母の白き枕へ梨をむく　卜居
(軸)梨一つ俺をたくましくしてくれ　鮎美
(同)梨幾個秋はさながらゆく如し　同

春秋居偶會（神戸）

十月七日　　日野華水報

偶々會つた人々に依つて、奇抜な條件で作句を試みた。即ち絶對に題を詠み込まぬ眞詠である。作句、柳談に花を咲かせて別れた。

題　美麗、融通、無茶苦茶

レヴユー團足が揃ふて幕になり　華水
京染屋なんぼでも出すあれやこれ　春秋
親方は苦勞人だと戻つて來　春秋
運轉手定員超過へ宵を向け　同
曲つてる釘樋振り上げる　華水
商賣へ生醉腕をまくりかけ　同
信用があつても一度だましたれ　明珠

題　早い　（五分間吟）

早起きをして新聞を鐵にする　明珠
早い足もうお前とは行かぬなり　春秋
濱へ行く仲仕ばかりの割引車　同

秋彦居偶會（神戸）

十月十二日　　西村明珠報

愚　痴　　明珠選

愚痴を聞き乍ら林檎の皮剝がれ　秋彦
妻の愚痴を逃れてコスモスを見る　いよ子
愚痴聞いてくれる者ない艷ぶきん　春秋
愚痴ぼさ四十女になつた妻　麥刀子
(軸)煙草盆愚痴といふたりいはれ　明珠

夕　闇　　春秋選

夕闇の丘にすゝきが白う搖れ　秋彦
夕闇を辨當がらと歸つて來　明珠
夕闇へ貧しく生きる車井戸　麥刀子
夕闇へ配り疲れた新聞屋　同
(佳)夕闇の机に座る戀心　いよ子
(同)夕闇へこの頃ひがむ我を知り　同
(軸)夕闇の露地へ豆腐屋あともど　春秋

松　茸　　秋彦選

松茸に友の理想も面白し　いよ子
(佳)茸狩のあつた〳〵と嘘もよし　春秋
(同)松茸の香ひにみちて搖れる馬車　麥刀子
(軸)松茸を提げて故郷の友が來る　秋彦

胸　　いよ子選

痛む胸向日葵ぐつと強く伸び　麥刀子
胸張つて日出づる島の健康兒　春秋
聲樂に秀でゝ胸の廣い娘よ　秋彦
胸張つてマイクロフォンの人になり　同
此頃の惱み胸などおさへてゐ　明珠
(軸)眞心にふれて素直になれぬ胸　いよ子

先　生　　麥刀子選

先生も年めしました同窓會　明珠
先生の愚痴などありて父兄會　いよ子
食ふ事にふれて先生暗い顏　同
先生へお面一本參らうか春秋　秋彦
旅の宿先生の素足親しまれ　麥刀子
(軸)不具な子へ先生の氣のゆきゝ　麥刀子

ひかり集　その十（大阪）

水谷鮎美報

白　紙

反抗の涙白紙に滲みるよな　卜居
冬陽に白紙瞳を射てさびし　同
白紙語らず八疊の間に散つてゐる　同
冥默の白紙へ夢をみてゐたか　同
魂を白紙にうつす机なる　鮎美
墨恨あざやかに白紙の運命　同
まごころの白紙のまゝに渡すなり　同
白紙のまゝでかへした貧乏よ　同
風青々と白紙へ空虛なる瞳　同

田鶴緒君に集ふ（松江）

簸川支部の河谷田鶴緒君が講習會の爲出松されたので九月二十六日夜句會を開き再會の歡びに浸つた。

席題　賽、迷宮、撫子、稻妻

天　痴　人　報

鶴、霧、素足

迷宮の話へ月も出て來ない　眞吉
撫子を摘んで島の娘の浮かぬ顏　田鶴緒
朝霧を素足に踏んで葯狩り　同
素足で岩飛ぶ娘の濱育ち　同
女湯はひつそりとして稻光り　卷二
煙突の頭が見える霧が晴れ　同
愛の巢の窓に折鶴吊つてゐる　同

賽の目へ人間性を弱く見ろ　同　慕　秋
公園の鶴おとなしくなりきつて　同
慘劇を秘めて朝霧の異人街　同
峠下れば素足に知る秋よ　都之介
霧に濡れつゝ樂しき數刻ぞ白壁　同
羽衣に三保の松原波光ろ　同
奸策の襖鋭き稻光り　同
逢曳にあらず田圃の夫婦鶴　同
朝霧が晴れた鳴子が生きて鳴ろ　天痴人
車座の焦點となり轉ろ賽ころ　同
親分の意志に賽ころ從順だ　同
がつしりと握つてみたし鶴の首　同

秋の夜（大阪）

九月二十一日夜　於鮎美居　水谷鮎美報

机

空想が破けた机冷えてゐろ　晴　夫
日記帳も古くなつてゐろ　同
わが顔のうつろ机を去らむとす　鮎　美
罪は消へざり机に悶へろ　同
松の風机に青き露落つろ　同

夜更けの街

ふところ手街は明ろく更けてゐろ　晴　夫
人絶へし街の燈しに注ぐ雨　同
放浪兒に犬が吠へてろ街の月　鮎　美
影重なりて更けてゐろ街をゆく　同
夜更けの街を嚙ふて歩むひとり　同

九月二十三日夜　於鮎美居

柿

藁積んでゐろ母に柿ひとつ熟す　卜　居
柿の葉のかさ〳〵散つた鄕愁よ　同
月まんまろく柿枝にたわゝむ　鮎　美
柿ひとつふたつみつよつ月澄みぬ　同
ひのまろのはたをくゝりて柿熟す　同

嬌笑

嬌笑がくずれて春の雨の音　卜　居
嬌笑のつきあたりたろ壁白し　同
嬌笑のピエロの戀に夜が更けろ　鮎　美
嬌笑へピストル擊てずじまひなり　同

綠雨居偶會

十月十五日夜　橋本綠雨報

當夜豆秋、鶴峰の兩君が來て柳談にふけろ。

郊外に住んで都へ用をため　葉　光
郊外の雨にレコードかけてゐろ　鮎　美

綠雨居より

平野から通天閣の灯が見へろ　鮎　美
囀りの日向おちきぬ　同

つどひ（大阪）

姬田夕鐘報

灯

支那そばは今日も夜業の灯へ停り　水　車
色街の灯へ横揚にたわむれて　同
灯の街へ來て青訓亂れたり　同
灯がゆらぐ俺の心へ灯がゆらぐ　夕　鐘
灯を消せば外はまつたく冬になり　同
大阪はこんなとこだと灯にひたり　同

鶴町句會（大阪）

川柳雜誌社

十月拾四日夜　白峯居　宮岡白峯報

兼題　秋の風　雅　幽　選

栗一つぽつんと落ちろ音をきゝ　白　峯
リユクサツク木の葉をちらす風よ吹け　碧　郎
秋風にもう力ないポプラにて　變　人
秋風に背中吹かれて逢ひに行く　夕　鐘
僧に道問へば秋風吹く彼方　鮎　美
秋風に此所にも一人職がなし　紅

（佳）燒芋の匂ひが秋の風に乘り　變　人
（同）しぶ柿が秋の殘りの風と知ろ　夕　鐘
（同）言傳のタモトへ秋の風があり　白　峯
（軸）五圓そのまゝにある秋の夜風　雅　幽

兼題　火鉢　紅　選

雪ごけの朝の火鉢へ佳い話　變　人
藏になろ話火鉢の火はいこり　小柳子
大部屋の火鉢天井へ照りかへり　夕　鐘
誠心の火鉢へ淚おちろなり　鮎　美
愛嬌のないのが火鉢もつて來ろ　白　峯
（佳）他人ばかり急がてし火鉢抱く身なり　雅　幽
（同）戀しさは火のない火鉢抱き居たり　同
（同）買喰ひの冷たい手々が火鉢に來　變　人
（軸）相續の話火鉢を取り圍み　紅

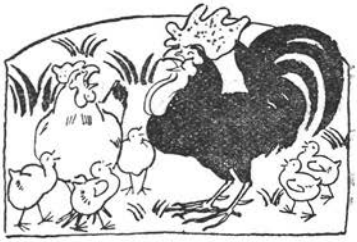
轉居と變更

▼岩崎柳路君は奉天加茂町大同ビル三〇號へ▼村松夢裡君は堺市出町三五八へ▼首藤竹楓君は神戶市須磨區村雨町六丁目二ノ一四へ▼奥野禿山君は大阪市內成區旭北通一ノ四へ▼河野夜王、安西杏三、松丘町二、三君は東成區が旭區に改正▼宮尾しげを君は東京市豊島區巢鴨六丁目一二九に變更▼富士野鞍馬君は東京市王子區堀船町一丁目一三四に變更

前號の正誤

四十九頁中段の一行と二行の句青兒の誤
十七頁の十一行の句は曉童の誤

柳壇話題の中心　（品切れ）
川柳街　を御覽になりましたか
菊版五十頁一部十五錢
御申込は京都市葭屋町上長者町南入川柳街事務所へ（振替大阪一五〇七五番）



編輯の窓

山雨樓

▼十一月は近畿に聖駕を迎え奉るの秋、われ等の川柳は益々隆盛を告げてゐることゝ柳友諸兄と共によろこびたい。

▼前號路郎先生の「柳壇時事」の内——南北氏の隱退？は各方面へ非常なるセンセーションを與へてゐる。半文錢氏から早速寄越された本號の「南北君隱退と玉屋町時代」はその最も熱意ある反響の一文である。

▼主幹の「五葉を語る」は九月號へ執筆される筈であつたが、番傘の五葉追悼號に執筆を依頼されたゝめその方へ豫定の時間を當てられたので遂に遲れてしまつてゐたものである。

▼本號誌面輻輳のため半文錢氏の「千日前今昔史」は乍遺憾本號では休載することにした。

▼町二君が不相變句評に熱筆を揮つてゐる。月評の中斷してゐる折柄必讀の好文字だ。

▼八日の十月例會では久し振りに路郎先生のお話を聞くことが出來たので出席者諸君の非常なる滿足を買つた。殊にユーモアに富んだ漫然の中に川柳家の深思すべきあるものが幾多織り込められてゐたことは流石に主幹の獨壇場であつた。

▼當夜山陰の珍客、絲之助君を圍んで歡迎宴を催したのであるが、同君の話の中にちよい〳〵出る出雲訛りは鄕國を同ふする町二、鶴峰兩君にとつてはたまらなく懷しさうだつた。生憎の雨は憎らしかつたが、かほるさんの餘興などはずんで興の盡くるところを知らなかつた。

▼大阪日日新聞の日日柳壇は紙面の都合で復活しないことになり、關西日報の關西柳壇が新設された。選者は路郎師である。

▼十月二十一日加茂川句會に出席した。自分は當日朝から公用で京都に行つてゐたので夕刻用事で濟むなり會場へ馳けつける本社から素人、鮎美、新水の諸君が一人宛電車一ぱい遲れてはやつて來た。こうやつて京都で顏を合はすのは嬉しいことだ。司郎君か明日のエキザミネーションを控え乍ら熱心に世話をしてゐる姿には瞼の熱くなるのを覺えた。

▼本社高知支部幹事中澤濁水君の贈入で十月十六日開催された高知柳壇開設第一千回記念大會には本社から路郎主幹その他二三の方が出席される豫定であつたが、色々と支障が起り不參の止むなきに至つたことは濁水君に對して甚だお氣の毒であつた同地柳友諸兄にも御期待に反したことを謝する次第である。

▼明年は本誌創刊十週年に相當するので、華々しく記念事業を催したいものと同人社友一同力んでゐる。

▼「むさしの」十月號を見ると「大阪だより」の中に、大阪の某社の元同人で支部を引受けてゐた人がいまはしき罪名でひかれて行つた云々の記事があるが本社とは全然無關係であるから各支部の幹事並に部友諸君は御安心が願ひたい。

▼十月二十二日の晝北陸小松町大火の號外を手にして愕然とした。同地には支部の錦水君、元幹事の柳一路君をはじめ多數の柳友がゐられる。夕刊の詳報を見ると町の心臟部は盡く灰燼に歸したとの事である。柳友諸君が類燒の厄から免れてゐられゝばよいがと祈念して止まなかつたのであるが、二十三日金澤へ歸省した絲雨君からの情報に依ると、柳人十數名の家が焦土化したらしいとのこと、誠にお氣の毒に堪えない。

▼本號の校正には町二、絲雨、杏三の諸君と私とが當つた。

大火御見舞

麻生　路郎

小松町川柳家各位へ

謝大火御見舞

上野　錦水

當地大火に際し早速本社はじめ各地柳友諸氏から御見舞狀に接しましたが當支部は幸ひ類燒を免れましたから御安心願ひます（川柳雜誌社小松支部にて）

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
▼光耀抄は女性作家に限る。
▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
▼締切は嚴守されたし。
▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第一號課題

十一月五日締切
（各題十句以內）

▼雪　川村花菱選
▼炭　麻生霞乃選
▼失望　生田翠夢　阿形一杉　共選

第十卷第二號課題

十二月五日締切
（各題十句以內）

▼影　前田雀郎選
▼姿　住田亂耽選
▼半額　尼子紋之助選

每號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選
▼光耀抄（雜吟廿句）　麻生霞乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも構ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年十月廿五日印刷
昭和七年十一月一日發行

第九卷第十一號
（每月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（函館）石塚
（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衞生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲**日本橋**を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番

松江甦生一周年記念句會
日時 十一月一日夜八時ヨリ
（所） 松江市寺町龍昌寺内
（題） 「一年生」 路郎先生選
「菊人形」 あん馬先生選
幹事 廣江天痴人

女給を募る 二十二三まで の朗らかな方、美しい方をお世話下さい—喜乃
大阪市西成區玉出本通三ノ三六（仲小路）
喫茶店 **キング** 電話 天下茶屋 二五七九番

綠雨居偶會
十一月八日午後六時
兼題「夜景」
會費 不要
本社事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。

螢ヶ池支部句會
（日時） 十一月六日午後一時
（所） 大阪阪急沿線刀根山病院内
幹事 龜井 愚寵

天王寺支部句會
（日時） 十一月十二日夜
（所） 大阪市天王寺區大道三 内藤製作所
幹事 須崎 豆秋

短册頒布

筆者 **麻生路郎先生**
上短册一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし（句の希望の方はお知らせ下さい）
大阪市住吉區本野西之町八三番地 川柳雜誌社事務所内、短册頒布係

申込所

懸賞川柳募集
題「鼾」 路郎選
十一月十日締切
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句謝呈す
▼▼投吟 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

▽**川柳雜誌投句用箋**
本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊（價金拾二錢 送料共）
▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用不苦）

川柳社告
の染筆 手拭 一枚 路郎主幹 金拾五錢（送料共）

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が緣とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社醸

大正十三年三月三日第三種郵便認可（毎月一回一日発行）
昭和七年十月廿五日印刷納本　昭和七年十一月一日発行

川柳雑誌

（第一〇六號）

定價金三拾錢

脳髄を刺戟せぬ毛髪の榮養

伊豆椿ポマード

國産唯一　大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さいませ

全國有名化粧品藥店にあり